

東京立正短期大学紀要

第 52 号

目 次

- マルクス派最適成長モデルにかんする一考察
～大西モデルをもとに～…………… 東 浩一郎 (1)
- バンクシーという名の社会現象 (2023年編)
…………… 有 泉 正 二 (19)
- 子どもへとつなぐレイチェル・カーソン「センス・オブ・ワンダー」の軌跡
～自然との共存を目指す保育園での取り組みの一考察～
…………… 尾 近 千 鶴 (43)
- 保育者養成校における構成的グループ・エンカウンターの効果検討
～ループリック評価を用いた試み～…………… 倉 持 ころこ (71)
- 保育観の変容を目的とした園内研修のあり方
～園内研修の研究動向から～…………… 鈴 木 健 史 (88)
- 幼稚園における室内環境の変遷 (1)
～室内装飾・壁面に着目して～…………… 福 田 篤 子 (102)

2024

東京立正短期大学

マルクス派最適成長モデルにかんする一考察 ～大西モデルをもとに～

東 浩一郎

私が学生の頃は、数学が苦手な者はマルクス経済学（以下、マル経と称す）を、数学が得意な者は近経¹⁾を専攻するという「風習」がまだ残っていた。私を含む多くの学生は、マル経、近経がどのようなものか知らないまま大学に入学していた（それは今でも同じであろうが）。そして、経済学の基礎理論の授業に出席すると、マル経の方は、「労働の二重性」とか「価値の実体と形態」とか、経済学として描いていたもっと実利的なイメージとは異なる哲学的な概念に接してとまどったものである。一方、近経の授業に出席すると、突然教員が難解な微分方程式とグラフを黒板に書きはじめ、せっかく受験勉強から解放されたのにまたか、とがっかりしたものである。こうして消去法で冒頭に書いた形で履修登録していくことになるのである。現在はマル経が一方向的に衰退し、そもそもマル経だけで卒業単位を満たすことが不可能であるため、そのような「風習」はなくなっているのではないと思われる。一方、マル経の世界にも数理派マルクス経済学（以下、数理マル経と称す）という分野が確立されており、経済理論学会（マルクス経済学を中心とした学会）の機関誌『経済理論』で数理的方法に関する特集が組まれたこともある²⁾。もっとも、19世紀に出版されたマルクスの『資本論』も当時としては進んだ数学を使用しており、元来マル経が数学と相性が悪いわけではない。現在の数理マル経との違いは、『資本論』が線形の連立方程式で解けるのに対し、現在は微分方程式も使うということである。つまり、学生が近経の授業で面食らうのと同じ手法を使っているわけである。これは偶然ではない。微分方程式を使用する数理マル経の場合、近経の新古典派と近似的な考え方および解き方をしているからである。

本稿では、数理マル経といわれる中でも、とくに新古典派との近さを自他ともに認めている大西広氏のマルクス派最適成長モデルをもとに、新古典派成長理論との比較においてその意義と課題を考察してみたい。大西モデルは、基本モデルに限れば数学として極端に難解なわけではないが、マル経のみを学んできた者にとっては理解しがたい概念を含んでいる。一方、近年の大学においては、マル経を全くあるいはほとんど学ばないので、そのような者にとって数式は理解できてもその背景にあるマルクスの概念が理解できないであろう。本稿が、この両者における理解を助けるものになれば幸いである。

第1章 大西モデルの構造

本稿では、大西広氏らが主張する「マルクス派最適成長モデル」の基本である p.4に取り上げた3本の数式を大西モデルと呼ぶこととする。もっともこれは、大西広氏も述べているように、彼個人が提唱するモデルではなく、彼を中心としたワーキンググループにおける研究成果である。

大西モデルには、2つの目的がある。1つめは、新古典派モデルにマルクスの観点を取り入れることであり、2つめは、最終的に資本主義の生成・発展・死滅を表すということである。彼の大学におけるテキストである『マルクス経済学』は、2020年に第3版が出版されおり、上記の2点は以下のように示されている³⁾。

「毎期総労働力をどの比率 ($s(t) : 1-s(t)$) でふたつの生産部門に分割するかというのが「人類」の操作変数となっている。このモデルが「マルクス派最適成長モデル」と呼ばれるのは、以上のような成長過程中の「最適化」として問題を定式化しているためである。」⁴⁾

「置塩は利潤存在という現実を条件にそれが搾取を意味することを数学的に証明したのだから、それと同じ意味合いで「資本主義の生成・発展・死滅の証明」はできるのであるか。エンゲルスは『空想から科学への社会主義の発展』でマルクスの理論を剰余価値学説と史的唯物論によって「科学」と定義した。したがって、置塩が前者を証明したのであれば、誰かが後者を証明しなければならない。本章はその

課題を「マルクス派最適成長モデル」という枠組みで開発して果たそうとするものである。」⁵⁾

と述べている。

ここで出てくる置塩とは、置塩信雄氏のことであり、数理マル経の先駆けとして知られており、置塩定理やマルクス基本定理において重要な役割を果たした研究者である。置塩は同時期に活躍した森嶋通夫氏と同様、線形代数を使用してマルクスのさまざまな提起を数学的に証明したが、経済成長ないしは資本蓄積を「均衡蓄積軌道」として描いており、その先にある資本主義の死滅を証明することはしていない。均衡蓄積軌道、すなわち需給一致、全生産手段の利用、均等利潤率を満たす持続可能な軌道については、現在においても議論すべき点が多くあるが、それは別稿に譲る。

大西モデルにおいては、まずは以下の生産関数が示される。

$$Y = AK^\alpha(sL)^\beta$$
$$\dot{K} + \delta K = B(1-s)L$$

ただし、 Y ：純生産物の量、 A ：技術を表す係数、 K ：固定資本ストック、 s ：総労働のうち消費財部門に配分される割合、 \dot{K} ：固定資本の増加分、 δ ：減価償却率、 B ：効率性を表す係数、 L ：総労働量、である。

上の式が消費財部門、下の式が生産財部門を表す2部門モデルである。左辺が産出、右辺が投入なので、生産財部門の投入物は労働のみとなっている⁶⁾。これはいわゆる「迂回生産」として議論される考え方である。最終的な目標が効率的に消費財を生産することである場合、消費財部門に直接労働を投入しても良いし、生産財部門に労働を投入し機械などを生産してそれを消費財部門に投入しても良い。どちらに投入した方が結果的に消費財をより効率的に生産できるのか、という議論である。

消費財の生産関数は新古典派が一般的に使用するコブ＝ダグラス型生産関数になっている。 $\alpha + \beta$ は必ずしも1にならなければならないわけではないが、通常は1と想定する。 $\alpha + \beta = 1$ であれば、現在と同じ割合で新たに労働と固定資本を投入した場合には収穫一定となる。1より大きければ収穫逓増、小さ

ければ収穫逓減である。したがって、 a 、 β ともに0から1の間の値であり、 $a=1-\beta$ となる。もっとも、 β が1になること（つまり a が0になること）は想定しようと思えば想定できるが、 a が1になること（つまり β が0になること）は想定しがたい。現状では、全工程において労働投入がゼロということはあり得ないからである。したがって、 $0 \leq a < 1$ 、 $0 < \beta \leq 1$ である。

ここで技術一定（ A および B が一定）、労働一定（ L が一定）であれば、最終的に ΔY は限りなくゼロに近づく、つまり経済成長が止まることとなる。 a が1未満という定義から、資本の限界生産力が逓減することが分かるからである。特に説明を加えるまでもなく、一般的にも自然成長率は人口増加率と等しいと言われていることと同じである。

しかし、大西モデルはこれで終わるのではなく、現在から未来まで続く時間の中で、消費者が得る総効用を最大化するという目標が加わっている。

$$U = \int_0^{\infty} e^{-\rho t} \log Y(t) dt$$

対数 \log を使用していることに特別の意味はない。単に限界効用が逓減することを表す形にちょうど良いというだけの話である。ただし $e^{-\rho t}$ には意味がある。 ρ は「時間選好率」つまり、現在と未来のどちらを重視するのかという割合である。効用は消費財のみからもたらされるので、現在を重視する場合は消費財部門により多くの労働を割り、将来を重視する場合は生産財部門により多くの労働を割くこととなる。大西モデルでは、時間選好率を使用することで将来価値を現在価値に割引くことができていると考えられているが、これは大西のオリジナルではなく新古典派成長理論において広く用いられている。そして、現在から将来までの効用 $\log Y(t)$ を総計するので積分する形となっている。

総効用の最大化が目標なので、上記の式をまとめると以下のように表現できる。

$$\begin{aligned} \max U &= \int_0^{\infty} e^{-\rho t} \log Y(t) dt \\ \text{s. t. } Y(t) &= AK(t)^{\alpha}(s(t)L)^{\beta} \\ K(t) + \delta K(t) &= B(1-s(t))L \end{aligned}$$

となる⁷⁾。

これは先の式の Y , K , s にそれぞれ t をつけ、通時的に変化することを示している。 s, t は制約条件のことなので、数学的にいえば、下の2つの式が制御関数、最初の式が目的関数であり、労働の分割比率を操作変数とする、ということである。

ソローの新古典派成長モデルによく似ているが、現在から将来までの総効用を最大化するように常に労働配分が変わる点が「マルクスの」であるとされている。

上記の2部門モデルにおいて、生産された生産財 K は消費財を生産するためだけに使用されることが分かる。つまり固定資本 K は労働のみによって生産されているということである。この想定が現実妥当性を持つかという点は検証が必要であるが、新古典派を含め数式を単純化するために一般的に用いられる手法でもあり、先に述べたように迂回生産の議論において使われる想定でもある。そしてこの2部門モデル自体は、数式としては容易に理解できる。先に述べたように資本の限界生産力逓減が前提なので、 L 一定のもので時間を無限に延長すれば、最終的に ΔY はゼロに限りなく近づく。したがって、 ΔU も限りなくゼロに近づくこととなる。

「我々は概して先進国のほうが途上国より経済成長率が低いことを知っているが、それは資本蓄積率が $K=0$ に向かって低下しているということである。」

「こうした蓄積過程＝成長過程をどのように導くかであり、それは先に定式化した2本の生産関数を使って最終消費手段の生産を最大化するという問題として定式化することになる。ただし、ここでは消費財1単位当たりの限界的な効用（限界効用）が逓減することをも考慮して、瞬間瞬間の人々の効用水準（瞬時的効用）が $\log(Y)$ であるとする。この形であれば、限界効用が逓減するからである。また、ここでも将来と現在の選好態度を表す割引率 ρ を使って、将来へと続く効用の流れ（流列）を現時点のものに換算する」⁸⁾。

第2章 大西モデルと新古典派

大西広氏の提唱するモデルは、マルクス学派の中では均衡を重視するグループの中でも特に新古典派的な視点を多く取り入れたものといえる。従来のマル経においては、正統派が「資本主義の基本矛盾」を重視し需要不足（消費需要、投資需要）をもとに不均衡を主張するのに対し、資本論の批判的継承を基礎に置く宇野学派は均衡論的なアプローチをする傾向にあった⁹⁾。大西モデルは、宇野学派とは異なる観点からの均衡論的アプローチであるが、最終的には人口増加がない限り純生産がゼロになるという主張と、宇野氏が再三述べた「労働力商品の無理」には共通点がないわけではない。ただし、議論が散漫化するのでこの点は論じないこととする。本章では、新古典派とマルクス派を対比しながら、大西モデルの意義と課題を検証する。

2-1. 新古典派の特徴

通常、経済学の世界では、新古典派はケインジアンと対比されることが多い。両者を分けるポイントは、供給が需要を作り出すというセイ法則を肯定するか否定するかにある。そして、セイ法則が成立するためには、利潤がそのまま投資需要となることが必要である。ケインズの『一般理論』自体は基本的に短期理論だが、ハロッドは投資のもつ生産力効果も組み込むことでケインズモデルを長期に拡張した。ごく簡単に以下のように示す。

$$\frac{1}{1-c}\Delta I = A\Delta K$$

左辺は投資需要の増加 ΔI が乗数効果を経て最終的に作り出す需要量である (c は限界消費性向)。右辺は投資によって増大した固定資本 K が生み出す供給量を示している (ただし減価償却は無視している。 A は技術を表す係数である)。技術の固定性を前提にすると、一旦供給側が需要側を上回ると、つまり $1/(1-c)\Delta I < A\Delta K$ となると、投資需要の増加はさらに大きな産出量の増加を生み出すため、時間とともにますます不均衡が拡大することとなる。同様に、需要側が供給側を上回っても不均衡は拡大することとなる。

これに対して異を唱えたのが、新古典派成長理論として知られるソローである。

「ある所与の時点で単一の財ごとに見た生産技術それ自体はそれほど伸縮的なものではないとしても、経済は資本集約的な財に重点をおくか、あるいは労働集約的ないは土地集約的な財に重点をおくかを選べるのであるから、総体としての生産要素比率はずっと可変的なものにならなければならない」。¹⁰⁾

ソローは、ハロッドとは異なり、技術は固定的ではないと考えたのである。たとえば、固定資本の増加が労働供給の増加を下回っている場合、利子率が賃金率よりも高くなるため、より労働集約的な技術を使ったり部門移動したりするであろう。これは資本係数を引き下げるので保証成長率の増大をもたらす。このように、技術が可変的であれば、需要と供給の両者が均衡するメカニズムを想定することができるのである。

生産関数には、簡単なコブ＝ダグラス型、

$$Y = AK^{\alpha}L^{\beta}$$

が用いられるが、その背景には、投資は常に貯蓄に等しいという概念が存在している。つまり、

$$K_{t+1} - K_t = sY_t - \delta K_t$$

ただし、 s ：貯蓄率

となる。したがって、ここではハロッドが想定したような不均衡は起こりようがない¹¹⁾。

2-2. 大西モデルと新古典派（近似点と相違点）

大西氏自身、ポスト・ケインジアンに反発し新古典派を高く評価する姿勢を見せている。経済理論にとどまらず、政治的立場においても、ポスト・ケインジアン立場は国家による市場への介入を必要とするものであり、それは国家主義につながるとして強く反発している¹²⁾。したがって、本来は、大西モデルと新古典派の関係は単なる数理モデルの近似性だけでなく多岐にわたって議論

しなければならないが、本稿では以下の点に限って両者の関係を考察することとする。

a. 限界効用概念

そもそも大西氏は、マル経では禁じ手とも言える、使用価値と効用を同義に考えている。

「マルクスは生産される商品には必ず「使用価値」が必要であると述べて、生産活動の目的が「使用価値」の生産であることを明確にしたが、これは消費者に「効用」を与えるものを作っているということであり、どちらの言葉を使っても意味は変わらない。」¹³⁾

ここに大西氏の労働価値説の根幹があるとも言える。

「たとえば太陽が穀物を育てるという法則を持つ自然界に対して、ある量の労働の投入をすればある量の効用が取得できるとの計算をして人間は労働投入量の決定を行なっている。したがって、ここでは自然界の法則・運動は所与のものであって、問題はそれにどれだけの労働を投入してどれだけの効用を取得するかということだけとなる。」¹⁴⁾

どの時代においても、共同体における再生産が順調に行われているのであれば、妥当な労働配分がなされていると考えられる。ただし、通常マル経における基準は社会的再生産であり大西氏の考えるような効用の最大化ではない。大西氏の考え方は、支出する労働の限界不効用＝取得する財から得られる限界効用の点で労働時間を決定するという、新古典派的発想であるともいえるし、古くは労働を労苦としたアダム・スミスの構想とも通じるものである。しかしマルクスは、生産力に応じた生産関係を基礎に議論を展開しており、そこにおいては労働時間を個人が自由に選択できるという発想はない。むしろ、マルクスが「自由の国」として述べた共産主義社会における人類像に近いものである。

このような労働価値説観が、二部門の生産関数を制約条件として総効用の最大化を目的とする大西モデルに結実している。なお、ミクロ経済学には、効用

極大化を目的とする消費者理論と利潤極大化を目的とする生産者理論が登場するが、両者は全く違う理論であり、市場において相対することで均衡点が見いだされる。大西モデルは、両者を一体化したモデルであり、その点では新古典派とは根本的に異なっている。

b. 資本の限界生産力逡減

これは非常に悩ましい概念である。投入要素として労働と機械を考えたとき、労働を一定に保ったまま機械だけを一方的に増やしていても機械の台数と比例して生産量が増えるわけではない、ということは容易に想像できる。そのような意味で資本の限界生産力逡減は当然の概念とも考えられる。しかし、どのレベルでそれを考えるのかによって全く違う結論が出る。たとえば、一工場を想定してみよう。12人の労働者が3台の機械を使用している時（つまり4人で1台の機械を使用している時）、機械を1台増やしたとする。その場合、4台めの機械はどうなるのだろうか。すでに12人の労働者が手が離せない状況であれば、4台めの機械は稼働すらしめない。その場合は限界生産力は逡減どころか0である。もし、3人の労働者で1台の機械を取り扱うことにすれば、4台めの機械も稼働するであろう。今まで4人で取り扱っていた機械はこれからは3人で取り扱うことになるので、その場合4台めの機械はそれまでの機械よりも生産力が落ちると想定できる。しかしこれは資本の限界生産力が逡減したわけではないことに注意しなければならない。機械1台あたりの労働者の数が減少したことによって生産力が落ちたのである¹⁵⁾。

ミクロ経済学のテキストでは、さまざまな生産関数において、資本で偏微分すれば資本の限界生産力が算出できるとされているが、これは数学上の話であり、上記のようにミクロの場合には意味がない。多くのマルクス派やポスト・ケインジアンが資本の限界生産力逡減という概念を拒否するのはそのためである¹⁶⁾。

しかし、マクロにおいては必ずしも空想的な概念ではない。実は、ソロー自身、「私は生来のマクロ経済学者」¹⁷⁾と述べており、資本の限界生産力逡減概

念についてもマクロの観点から説明している。以下は、雇用量と産出量の関係を述べた部分なので厳密には資本の限界生産力ではないが、同様に考えられる。

「雇用量がごくわずかなときは、最新の、もっとも効率のいい生産能力のみが用いられ、産出量は、その最新能力の1人当たり産出量にひとしい勾配で、雇用量に比例して増大していく。(中略)雇用量が最新ヴィンティッジの能力をすべて使いきる水準に達すると、それ以上の雇用はつぎに新しいヴィンティッジの能力にふり向けられねばならず、したがって総生産力曲線にはコーナーができる。」¹⁸⁾

教科書的にいえば、利潤が発生する限り劣等技術を持つ企業が参入することと似た概念として把握すれば分かりやすいだろう。マル経なら、差額地代の概念から想像してほしい、と言った方が分かりやすいかもしれない。重要なことは、それぞれのヴィンティッジの限りでは「ひとしい勾配で」産出量が増えていくということである。

このように考えると、大西モデルとソローモデルには、発想の根幹において異なっているということが出来る¹⁹⁾。

c. 資源の完全利用

この点は、先に上げた大西モデルおよびソローモデルともに明確である。大西モデルにおいては、生産財部門では $K + \delta K$ が産出されるが、資本家は消費しないので、そのまま K が次期の投資となっている。消費財部門では産出された Y がすべて消費されると想定されている。また、常に完全雇用が想定されているので、労働市場における不均衡も存在しない。これらはいずれも新古典派の想定と同じであり、独自の投資関数を持ち（つまり利潤と投資に別の理論が当てはめられる）、非自発的失業を想定するポスト・ケインジアンとは対照的である。そして、資源の完全利用が実現する背景に、貨幣の中立性が想定されていることも事実である。新古典派において完全雇用が前提とされるのは、失業が存在すれば実質賃金率が低下し雇用量が増加するからである。労働の限界生産力が逡減すると考える新古典派においては賃金コストは逡増することになるので、各企業は、限界費用 = 限界収入（完全競争市場においては外生的に

与えられた価格)において生産量を決定する。したがって、賃金が低下すれば限界費用曲線の傾きが緩やかになるので、雇用量を増やすことで生産量を増大させることとなる。

d. 総効用の最大化

大西モデルでは、消費者の効用を最大化するよう部門間の労働配分を変化させている。効用の最大化も新古典派の想定である。ソローは以下のように述べている。

「私は、成長経路の望ましさがつねに各時点での消費の大きさにのみ依存する、という仮定を採用していきたいと思う。そう仮定すれば、政府は経済を操っていく上で、消費と投資への産出量の配分のみを制御していけばいいことになる。」²⁰⁾

「0時点に任についた計画当局または政府が当面する問題は、形式上は

$$W = \int_0^{\infty} e^{-(a-n)t} U(c) dt$$

を最大化することである。当局には、可能な経路であるかぎり、どんな1人当たりの消費経路を選ぶことも許されている。その経済は、歴史として与えられた資本ストック量と、同じく所与の労働供給量、したがって所与の生産能力から出発する。」²¹⁾

この数式が、先に上げた大西モデルの効用最大化の式と同じものであることは明白である。大西モデルの場合 Y はすべて消費されるのに対し、ソローモデルでは、 Y は消費 C と貯蓄 S に分解されるので、効用は $U(c)$ と表される。違いといえばそれくらいである²²⁾。

単純な新古典派モデルは、1財モデルの生産関数で表され、労働、技術一定で組み立てられている²³⁾。

$$Y = AK^{\alpha}L^{\beta}$$

このモデルにおいて、限界的に逓減するものは「効用」と「資本」である。したがって、いずれ総効用の増大は限りなくゼロに近づくが、減価償却ないしは固定資本減耗 δK が想定されているので、 K の限界生産力がゼロになることはない。

そして、生産物をどのように消費と蓄積に分けるのかが問題となる。総効用を最大化するのであれば、 t 時点でわずかの生産物を消費に回しても蓄積に回してもそこから得られる効用は同様であると考えなければならない。したがって、

$$e^{-at}U'\{c^*(t)\} = \int_t^{\infty} e^{-as}r^*(s)U'\{c^*(s)\}ds$$

となる²⁴⁾。左辺は消費によって得られる効用であり、右辺は投資が次期以降に産出物を生みそれを消費することで得られる総効用である。 $r^*(s)$ は、 s 時点における資本の純限界生産力を表す。これはどの時点でも成立するため、上式は微分可能であり、

$$\frac{dU'/dt}{U'} = -\{r^*(t) - a\}$$

と示される。

「どの時点においても資本ストックの現存量は既知であり、また労働の供給量（完全雇用が維持されているから、これは労働の雇用量でもある）も分かっているから、資本の限界生産力の大きさも分かっている。それからまた計画当局には、一瞬前の1人当たりの消費がどれだけであったかも分かっている。そこで計画当局は、そのような資本の限界生産力を時間選好率と比較して、ちょうど1人当たりの消費の限界効用が r^*-a にひとしい率で逡減していくように、現時点での消費水準を選ばなくてはならない。そしてこのような消費量が選ばれば、それを現存の資本と労働がつくりだす純産出量の全体から差し引くことによって、現時点での純投資量が決まり、その結果つぎの時点での資本ストック量が決まって、計画当局はふたたび計画の手順を繰り返すことができるようになる。」²⁵⁾

大西モデルとソローモデルを比較すると、現在から将来に至る総効用を最大化するという目的は変わらないが、そのための手段が異なっていることがわかる。大西モデルにおいては、手段として部門間の労働配分を変化させているのに対し、ソローモデルでは、消費と貯蓄（投資）の割合を変化させている。また、大西モデルでは労働配分は「人類の操作変数」であるが、ソローモデルでは「計画当局」による操作とされている。

結語 大西モデルとマルクス学派

以上見てきたように、大西モデルと新古典派モデルは基本的に同じ構造を持っている。大西モデルは新古典派モデルを2部門モデルに拡張したものであるが、消費財部門は新古典派モデルと同じ生産関数で示される。また、効用を最大化するという目的も同様である。したがって、大西モデルの意義および問題点も、大枠においては新古典派モデルのそれと同様に論じることができる。実は、マルクス学派の中における大西モデルの位置は、不均衡論的アプローチをとる正統派マルクス経済学や置塩的な数理マル経に対して、均衡論的アプローチをとるものであるということができるところから、ちょうど、ポスト・ケインジアンと新古典派の対立になぞらえることが可能である。つまり、大西モデルの意義は、不均衡の累積過程や恐慌による揺り戻しを展開する従来のマル経に対して、原理的に均衡に集約する経路があることを支持したといえる。一方で、限界生産力逓減に依拠しており、ケンブリッジ資本論争の結論を無視しているという批判をすることが可能である。これらの観点は現在においても重要であるが、それこそポスト・ケインジアンと新古典派の間に無数の議論が存在するので、本稿ではこれ以上言及しないこととする。

本稿では、マルクス学派の議論に引きつけて大西モデルを概観し結論とした。不均衡論的アプローチにもとづく正統派マルクス経済学においては、資本主義経済の運動が不均衡の累積過程として位置づけられるので、その理論自体に資本主義の発生・発展・死滅の過程が組み込まれている。一方、均衡論的アプローチである宇野学派においては、周期的恐慌も均衡への回復過程として把握されるため、原理的には資本主義経済が永久に存続することとなる²⁶⁾。これに対し大西モデルは、均衡論的アプローチに立ちながら、その理論に資本主義の発生・発展・死滅の過程を組み込んでいる。経済成長が著しかった宇野の時代とは異なり、現在はさまざまな観点から資本主義経済の限界が議論されている。しかも、現実の日本経済は単なる需要不足あるいは不均衡ではなく、供給自体が長期に停滞している。大西モデルは、現在の資本主義経済を分析する上での1つの基礎となるものである。

一方、方法論的にはいくつかの課題があることも事実である。

すでに言及したように、資本の限界生産力逓減という考え方は現実には必ずしも当てはまらない。マルクスにおいては、資本規模の拡大は分業と協業の発展でもあるので、その意味では収穫逓増を意味している。もっともこれについては、先の生産関数であれば A の部分の増大であり K の限界生産力逓減とは両立する概念であるという主張もあろうかと思う。あるいはこの場合 K とともに L も増大しているのだから資本の限界生産力逓減とも両立すると主張されるかもしれない。しかし、 L の拡大には限界があるので資本主義経済の長期法則として限界生産力が逓減するというのが大西モデルの根幹である。先発国と後発国の比較において、常に後発国の経済成長率を高いものとしていることから、それは明らかである。しかし、先発国の生産力が上がらなくなるのは、独占による競争の制限があるからであり、単に資本規模が大きくなったからではない。独占理論が欠如しているところに大西モデルの問題点があると考えられる。

消費者の効用最大化を目的とする点にも問題がある。新古典派には予算制約下で効用を極大化する消費者理論が存在するので、これをマクロのレベルでも目的とすることは許されるが、マルクス派の消費理論はこれとは根本から異なっている。仮にミクロのレベルで消費嗜好があることを認めたとしても、マクロで見れば、基本的にその国が置かれている社会的・文化的・歴史的背景に基づいて賃金が（理論とは外生的に）決まり、その中で労働力の再生産が行われる。したがって、マクロのレベルで効用を最大化するために労働が配分されているとは考えられない。これは現実の経済を考えても同様の結論が出るのではないだろうか。もっとも、大西モデルでは消費財は1つしか存在しないので消費嗜好は存在せず、賃金はすべてその財の消費に使われる（労働者は貯蓄しない）と考えられる。したがって、効用を大きくすることは消費財の産出量を大きくすることにつながる。しかし、そこにおいても2つの問題が残る。1つは、時間選好率を使用して将来の効用を現在に割引いていることである。そもそもマルクス学派は主観を排除する傾向にあるが、限定的には主観を取り入れることもできる。上記でいえば、主観である効用を最大化することが、客観

である産出量を最大化することで示されるといった場合である。つまり、主観を何らかの客観的要素で示すということである。しかし、効用という主観に時間選好率という主観を重ねて考察することは困難である。ご飯にカレーをかけてカレーライスにして食べると、別々に食べるよりも効用が大きいとは言えるだろうが、別々に食べるよりも30効用が大きいとか効用が1.5倍になるなどとは言えないのと同様である。基数的効用と序数的効用の議論にもつながるものである。消費者が、現在から将来までの効用を時間選好率を使って現在の効用に割り引いて総効用を最大化するよう計算しているとは、現実的に考えられないであろう。2つめは、効用の最大化を目的に労働配分を行っているという点である。新古典派のように、将来のリターンにより重きを置くから現在は消費せずに貯蓄するといった程度であればギリギリ想定できなくもない。しかし、大西モデルのように、それに基づいて労働配分を行っているとは到底考えられない。

なお本稿では、新古典派モデルといってもソローモデルしか取り上げていない。同様にケインジアンといってもハロッドモデルしか取り上げていない。いずれも現在では古典に属するものなので、多くの読者が不満を抱くであろう。ソローモデルとルーカスモデルは根本的に違うとか、マルクス派なら階級対立を組み込んだカレッキアンモデルを取り上げるべきだとか、多くのお叱りを受けることも当然と考えている。非常に断片的な論文であるとあらかじめ言い訳をしておき、現代の新古典派やポスト・ケインジアンに関する考察は次稿の課題としたい。

注

- 1) 近経という言葉自体、現在はあまり使われないが、かつては、新古典派とケインズ学派あるいは当時の主流であった新古典派総合の経済学を、マル経と区別するために近経（近代経済学）と呼んでいた。
- 2) 『経済理論』第46巻3号（2009年）において、「経済学の数理的方法と記述的方法」という特集が組まれた。
- 3) 大西氏の好意により、今回、第4版に向けた正誤表をいただくことができた。もちろん出版前のものであるから（さらにいうと、大西氏はすでに慶應義塾大学を定年で退任されているので出版されることが決まっているわけではないとのことである）今後さらに変更されることが予想されるが、氏の現在の問題意識を知る意味でも興味深いものであった。とりわけ、ケンブリッジ資本論争において、一般的にはイギリスケンブリッジの側の「勝利」とされることが多いが、大西氏は反対の結論を導いている。
- 4) 大西（2020）、p.159
- 5) 同（2020）、p.141
- 6) 従来のマル経で使用される差分方程式であれば原材料（不変流動資本）が必要であるが、微分方程式で示す場合は、連続時間モデルになるため原材料は捨象される。
- 7) 大西（2020）p.159
- 8) 同 pp.157-158
- 9) 宇野は以下のように述べている。「私としては、マルクスの所説にしても、何等かの目的のためにこれを擁護しなければならぬというものではない。理論的に反駁を許さないような体系を完成してゆくことこそ、マルクス経済学を真に擁護することであり、また社会主義を真に基礎づけるものと、私は考えている。（中略）批評や反駁もあながちに排するわけではないが、『資本論』を修正することは絶対に許されないというのでは問題にならない（後略）。」（宇野（1962）pp.序2-3）
- 10) Solow（2000）p.4。なお、今回使用したものは第2版であり、初版は1970年に出版されている。また、ページ数は邦訳書のものである。
- 11) 新古典派モデルとポスト・ケインジアンモデルの対比については、浅野（1988）、鱈澤（1990）を参照されたい。
- 12) この主張は、大西（2018）において全面的に展開されている。むしろ大西氏の現在の興味・関心は長期法則が現実の資本主義経済あるいは現代の日本においてどのように貫徹しているのか、また、その解明を通して未来社会のあるべき姿を描き出すことにあるように思われる。
- 13) 大西（2020）p.9
- 14) 同（2020）pp.8-9

- 15) このような視点はカレッスキー以来のポスト・ケインジアン の伝統でもある。詳しくは Kalecki (1954) p.105参照。
- 16) ポスト・ケインジアンは、カレッスキー、カルドア、スラッフアの3名の流れを継承する学派に分類される(西(2014) p.15の分類に基づく)。この3派においては、スラッフア理論のリカード的な部分を特に強調するネオ・リカーディアンにおいて、技術の固定性の強調と限界生産力逓減の拒否の姿勢が見られる。また、カレッキアンは、不完全稼働を想定することにより、資本の限界生産力逓減を否定する傾向がある。日本においては、ポスト・ケインジアン の立場から塩沢が以下のように述べている。「農業生産はともかく、自転車や自動車のような機械工業の場合、部品表に必要とされる以上にある部品を増やすことで自転車や自動車がすこしだけ多く生産されるわけではない。新古典派的生産関数はじつは微分可能ですらない。」(塩沢(2019), p.8)
- 17) Solow (2000) p.4
- 18) *Ibid.*, p.77
- 19) 新古典派成長理論を提唱したソローと、それを発展させたその後の新古典派経済学者とは、モデル自体が異なっている。これはその根幹にある思想の違いでもあり、大西氏の発想はソローよりもその後の新古典派経済学者に近いものがある。
- 20) Solow (2000) p.110
- 21) *Ibid.*, pp.112-113
- 22) ソローが使用している時間選好率 a は大西モデルの ρ に相当する。
- 23) この想定はラムゼーまで遡ることができる。
- 24) Solow (2000) p.115
- 25) *Ibid.*, p.116
- 26) 「資本家的商品経済に特有なる矛盾とその現実的解決としての特殊の形態による運動とは、資本主義の発生・発展・消滅の過程そのものをなすわけではない。いわんや唯物史観にいう生産力と生産関係との矛盾やその解決としての「社会革命」の過程ではない。むしろ反対に資本主義社会は、その矛盾によってそれに特有な運動をなしながら、自律的に存続するものであることを明らかにされる。」(宇野(1962) p.158)

参考文献

浅野栄一『現代の経済学』, 中央経済社, 1988年。

Foley, D.& T.M. Michl, *Growth and Distribution*, Harvard University Press, 1999. (佐藤良一, 笠松学監訳『成長と分配』, 日本経済評論社, 2002年。)

- Kalecki, M., *Theory of Economic Dynamics; An Essay on Cyclical and Long-Run Changes in Capitalist Economy*, G. Allen & Unwin(London), 1954. (宮崎義一, 伊藤光晴訳『経済変動の理論: 資本主義経済における循環的及び長期的変動の研究』, 新評論, 1958年。)
- 鱒澤晃三『均衡と不均衡の経済学』, 高文堂出版社, 1990年。
- レーニン『帝国主義論』, 1916年 (副島種典訳, 国民文庫, 1961年)。
- 西洋『所得分配・金融・経済成長』, 日本経済評論社, 2014年。
- 野口真『現代資本主義と有効需要の理論』, 社会評論社, 1990年。
- 置塩信雄『マルクス経済学Ⅱ 資本蓄積の理論』, 筑摩書房, 1987年。
- 大西広編著『マルクス派数理政治経済学』, 慶應義塾大学出版会, 2021年。
- 大西広『長期法則とマルクス主義 右翼, 左翼, マルクス主義』, 花伝社, 2018年。
- 大西広『マルクス経済学 (第3版)』, 慶應義塾大学出版会, 2020年。
- Slow, R. M., *Growth Theory*, Oxford University Press, 1970; 2nd ed., 2000. (福岡正夫訳『成長理論』 (第2版), 2000年。)
- Steedman, I., *Marx after Sraffa*, NLB, 1977.
- 坂和愛幸「最適制御理論におけるポントリヤーギンの最大原理」, 『計測と制御』 (第1巻第4号), 計測自動制御学会, 1962年。
- 塩沢由典「生産性, 技術変化, 実質賃金」, 『経済理論』 (Vol.56, No.3), 2019年。
- 宇野弘蔵『経済学方法論』, 東京大学出版会, 1962年。

バンクシーという名の社会現象 (2023年編)

有 泉 正 二

0. 2023年最後のバンクシー

2023年12月22日正午頃、バンクシーが自身のソーシャルメディア・アカウントに写真を3枚投稿した。インスタグラムで新作を公開するのは3月以来約9ヶ月ぶりであったが、この新作はロンドン市南部の町ペッカムに設置されたためか場所もすぐに特定され、わずか1時間後にはこれまで通り「盗まれた」。2人組の男が「盗む」様子が動画撮影されるほど、現場にはバンクシーの新作(本物)見たさに人が集まっていた。言い換えれば、その場に居合わせる人が複数いる中で「犯行」が行われたことになる。「盗んだ」とされた2人組の男は、器物損壊と窃盗の容疑でロンドン警視庁に拘束されている¹⁾。その2人組が器物損壊と窃盗の容疑者となった理由は、今回の新作が盗みやすい作品だったことにある。

作品は、交差点にある赤地に白で STOP と書かれている一時停止の道路標識に、「軍用ドローン(無人機)」が3機貼り付けられているものだった。バンクシー作品の多くがそうであるようなステンシルによる壁画ではなかったため、その2人組は標識の柱に自転車を寄せ、一人が支える自転車に乗り立った状態でもう一人が工具を使って標識の金具を外し(器物損壊)、標識を持ち去ることができた(窃盗)。

彼らが容疑者として拘束されたのは、「盗んだ」ことがロンドン警視庁に通報されたからであるが、それはその場に居合わせ動画を撮影し、SNSで拡散した人々によるものではなかった。目撃者がPA通信に説明したところによれば、標識によじ登り、作品に手をかけた姿を見て「皆で男に『何をやっている

んだ?』と問いただしたが、実際のところどうしたらいいか誰にも分からなかった。ただ事態を見守っているしかなかった。全員が少し戸惑っていた²⁾。22日遅くに警察に通報したのはサザーク区議会であるが、彼らはいくまでも標識の返却を求めて通報している³⁾。つまり2人組の男は、バンクシー作品の器物損壊と窃盗ではなく、標識の器物損壊と窃盗の罪が問われていることになる。

しかし、容疑者2名を拘束したはずのロンドン警視庁は、作品の所在などについて情報提供を呼びかけており、「STOP ドローン」は行方不明であることが推測される。そしてこのとき、PA 通信は、作品の撤去にバンクシーが関与していないことを報じている⁴⁾。この報道は、バンクシーが自作自演で「事件」をでっち上げる可能性を想定しているとも考えられるが、「関与していない」とする情報源や根拠はどこにあるのか、実際バンクシー本人に問い合わせたのかなどの疑問があるものの、そもそもバンクシーが「関与していない」ことを報じる必要性はどこにあるのだろうか。言い換えれば、バンクシーが正体不明を維持しているという事実にとって、「作品の撤去にバンクシーが関与していない」と主張する私たちのこの行為は、「バンクシー」に対して何をしていることになるのだろうか。

1. 「作品媒介行為」と「仮名的匿名性」という視点

本稿では、「バンクシーという名の社会現象」、とりわけ2023年に「バンクシー」という名前でニュースとして報道され、記事になった出来事を観察する。そのとき、理論的手立てとして「作品媒介行為」と「仮名的匿名性」という二つの視点を用いて現象や出来事の説明を試みていきたい。

「作品媒介行為」という表現⁵⁾は、次のような観察の視点を含意している。一つは、作品を媒介として生じる行為を指すことになる。バンクシーのステンシル作品自体が媒介となって、バンクシー以外の私たちが行う行為であり、たとえば、今回の「STOP ドローン」の設置を受けて（そして SNS で公開されたことで）、作品（標識）を「盗む」という行為が生じたという説明が可能になる。

そしてもう一つ、本稿ではむしろ以下の視点を示す目的で「作品媒介行為」という概念を使用している。ここでは、作品を媒介している「モノ」に注目することになる。媒介するメディアがあることで、私たちがバンクシー作品に注目するきっかけが与えられたり、作品に対して発言する機会が生じたり、必要もないのにバンクシーを代弁したり、弁解や釈明までしている事実がある。2023年のバンクシーの記事は、この視点から整理することができる。

次に、「仮名的匿名性」という概念は、オンライン・コミュニティの秩序分析をしている森岡武史より借用している⁶⁾。森岡の議論の中で、匿名であっても仮名が付いていると個人をイメージさせるという点に注目することで、世界一有名な正体不明のグラフィティ／ストリート・アーティストとして、世界一有名な仮名を保持していると言っても過言ではない「バンクシー」という名の匿名性の実態とその特徴を考察することができる。それはたとえば、2023年に数多く出てきた「バンクシー」情報の多くが「バンクシー」だと認められないという事実にも考察の範囲を広げることにもなる。このとき私たちは、「バンクシー」という仮名的匿名性において「バンクシー」だと認められない理由を、「バンクシーが二人いてはいけないのか」という問いから整理することになる。

2. 作品媒介行為という視点で「バンクシー」を観察する

①冷蔵庫

2023年に作品の媒介となっていたメディアには、たとえば「冷蔵庫」があった。冷蔵庫は、2023年2月14日のバレンタインデーにあわせてバンクシーがイギリス南東端に位置する町マーゲートに描いた「バレンタインデー・マスカラ」というステンシル画で利用されている。女性へのDV批判と解釈されているこの作品は、まぶたと唇が腫れ上がり歯が欠けている主婦と見られる女性が、夫らしき人物を冷蔵庫に閉じこめた姿が描かれている。ここで報道が目目していたのは、本物の冷蔵庫が利用されていて、作品に使われたその冷蔵庫が撤去されたことの方であった⁷⁾。

借景を流儀とするバンクシーのやり方からして⁸⁾、その場に不法投棄されたものを利用したように見えるその冷蔵庫は、バンクシーが持ち込んだ可能性があるもののバンクシーの所有物には見えないだけでなく、DV 批判という作品の解釈にとってもそれほど重要な意味を帯びていない。しかし、作品の媒介物と認識されたことによって、作品媒介行為としての目撃者の証言は「当局のトラックが来て、冷蔵庫を運び去ってしまった」という、バンクシーの気持ちを代弁するような批判的ニュアンスが含まれた表現になっている⁹⁾。実際に冷蔵庫を撤去したマーゲードを管轄するサネット地区議会もまた、作品媒介行為として、「壁は私有地で冷蔵庫は共有地にあったため安全上の理由で回収した。冷蔵庫は現在保管されており、公共への安全が確保され次第、返却される予定」だと、言い訳めいた説明をしている¹⁰⁾。

②目隠し看板

次に、媒介されるモノがあることで作品が目目され、作品媒介行為としてバンクシーの代弁や釈明がなされている例として、「目隠し看板」があった。これは、2023年の1月に日本で記事になったものであるが、東京都渋谷区の表参道で電柱に付けられた看板を撤去したところ、その下から2019年東京都庁での展示でも話題になり、バンクシーが過去によく描いていた「Umbrella Rat (傘をさすネズミ)」のステンシル画が発見された。19日に発見されたそのステンシル画に対して、電柱を管理する東京電力パワーグリッドは、同月24日その電柱に目隠しをした。東京電力は、「現場の混乱回避と景観保護のために張り紙防止シートで被う対応をしました。こちらは通常の落書きへの対応と同様になります」とコメントで釈明している¹¹⁾。そして、この目隠し看板という媒介があることで、バンクシー本人から正式な許可を受けていないはずの「バンクシー展 GMO デジタル美術館」を主催する GMO インターネットグループの熊谷正寿会長兼社長が、「東電さん。これは心から残念です。バンクシーも悲しんでると思う」という代弁的なコメントをしている¹²⁾。

③重機（壁の解体その1）

3月14日にはイギリス南東部にあるケント州の海辺の町ハーン・ベイの農場で、バンクシーの壁画が描かれた築500年の廃墟が取り壊されて話題となった。バンクシーが自身のインスタグラムで公開した作品の写真には重機で取り壊された民家の様子も写されていたことから、バンクシーが解体の情報を事前に知っていて利用したとも推測されている¹³⁾。

作品は波状の金属板をカーテンに見立てたものであり、ステンシル画自体はカーテンを開けている少年と猫のシルエットだけという非常に単純なものであるが、解体された民家の写真（3枚目）に「朝が破壊された（Morning is broken）」というテキストが入れられ、取り壊される民家に重機が媒介していることで作品が目玉された。そして、イギリスのメディア KentOnline の取材に応じた解体請負業者は、「思いがけないことです。バンクシーの壁画があったと知って体調が悪くなりました……がっかりです。昨日から取り壊しを始めて、地主も私たちの作業を見ていましたが、知らなかったようです」と弁明している¹⁴⁾。

④ランドマーク（壁の解体その2）

同様に作品の描かれた建物の解体は、2023年12月にもあった。イギリスがEUからの離脱を国民投票で決定して間もない2017年に、EUへの玄関口として知られるイギリス沿岸部の町ドーバーに出現したその壁画は、青いEU旗に描かれた12個の星の一つを削り取る作業員が描かれた大作であった。その後2019年にすでに壁画は白塗りで消されてしまっているが、この土地を再開発地域に指定して建物自体を解体したところ、地元の自治体は弁明を求められることになる。CNNに宛てた声明でドーバー市議会の広報担当者は、「建物の解体を承認する前、また専門家から保存に関する助言を受けた上で、市議会はバンクシー作品について、相当のコストをかけなければ保存は実現できないと判断した。コストは地元の納税者が負担することになる。たとえ技術的に保存が可能だとしても、それが実情だ」と述べた。また、市議会は、オンライン上で公開した詳細な計画説明の中で、壁画の塗りつぶしへの関与を否定するなどの弁

解も余儀なくされている¹⁵⁾。壁画が白塗りされてから数年が過ぎているので、今回の記事の中にバンクシーの気持ちを代弁するコメントはなかったが、CNN は「今回の建物の解体について、本人から公のコメントは出ていない」と書き足している。

⑤観光地化（壁の解体その3）

バンクシーがノーコメントを貫いた例は他にもある。2023年5月、バンクシーによって自宅の壁に作品を描かれた夫婦が理不尽な選択を迫られているという記事が報じられた。その作品は、2021年にバンクシーがイギリスのサフォーク州にある民家の壁面に、ステンシルで6メートルに及ぶカモメを描いたものである。その民家を所有する夫婦は、Times 紙の取材に対して「壁画がバンクシーによるものだと発覚した時は、そんな凄いことがあるなんて！と興奮しました。しかしその後、その喜びは大きなストレスに変わっていきましました」と述べている¹⁶⁾。今回の場合、媒介は作品が描かれた自宅の壁そのものであるが、夫婦にとってそれは単なる「自宅の壁」ではなくなる。「観光地」としてメディア化してしまったその壁に対して、夫婦には作品媒介行為が強いられることになる。「観光地」になってしまったことで、ひび割れなどの劣化に対する保全だけでなく、上書きや盗難から守るために自費で夜間警備員まで雇って数多くのトラブルに対応していたという。そんな過酷な状況が続く中、今回サフォーク州議会から「莫大な負担」を強いられる選択を迫られることになった。それは、バンクシー作品の保存のために年間4万ポンド（約700万円）を負担し続けるか、それとも20万ポンド（およそ3500万円）を支払って壁を撤去するかという選択である。夫婦は壁画の撤去を選択し、この大工事にかかった費用20万ポンドを相殺するために壁の売却を考えてるが、22トンにも及ぶ壁画が市場で取引されるかはわからない。夫婦は「私たちは普通の人間です。だから、この作品の保護保存のために失ったものを取り戻したいのです」と述べ¹⁷⁾、「バンクシーは、家の所有者がこんな負担を強いられているなんて気づいていないのでしょうか。時間を戻せたらどんなにいいか……」と嘆くが¹⁸⁾、自身に起

因するこのような理不尽な被害を与えたことに対して、バンクシーからの謝罪や釈明は見当たらず、ノーコメントが貫かれている。

⑥標識・自転車・工具

本稿冒頭で取り上げたバンクシーの新作、「STOP ドローン」についても作品媒介行為という視点から改めて観察しておく。バンクシーの新作に対する報道の多くが、標識の柱に自転車を寄せ、サドルに立った状態で標識に手をかけている様子の写真を使用している。その場に居合わせた人々も、剥がされ持ち去られる標識の写真を撮っている。そして目撃者たちは作品媒介行為として、取材陣に対して犯人が使用していた工具を具体的に「ボトルカッター」だったと答える一方で、自分たちは「ただ事態を見守っているしかなかった」と、する必要のない弁明をしている。さらに、ロンドン警視庁もまた、器物損壊と窃盗の犯人を拘束して標識自体を取り戻したということでは事件を解決したにもかかわらず、しかも、制作者本人とされているバンクシーからの通報や依頼がないにもかかわらず、作品の所在を突き止めていないことの言い訳をするかのように、情報提供を呼びかけている。そして繰り返しになるが、作品媒介行為という視点から観察すれば、正体不明のバンクシーに問い合わせることができず、返答をもらえないはずの通信社が、バンクシーを代弁して「作品の撤去に関与していない」と言うってしまうのである。

3. 「バンクシーが二人いてはいけないのか」という問い

①バンクシーになりきった人たち：「バンクシー」からバンクシーの“偽者”へ

2023年6月15日から8月28日にかけて、スコットランド・グラスゴーにあるGoMA（グラスゴー現代美術館）で、バンクシーの展覧会「CUT & RUN」が開催された。2009年にイギリス・ブリストルで開催された「Banksy versus Bristol Museum」展以来、14年ぶりの公式に認可された展覧会とあって注目が集まった。写真撮影が不可だったため展覧会の様子を確認することはできな

いが、地元メディアのヘラルド紙によれば、バンクシーが「25年間のカード労働」と呼ぶ本展では、1998年以来25年間使用してきたステンシル作品の型紙が初めて公開されている。会場ではその他にもバンクシーのスタジオが再現され、パンフレットやポスターなどの収集アイテム、工芸品、実際に使っていたトイレなどの私物、さらに2018年の「シュレッダー事件」で額に仕掛けられた裁断機の模型も展示された¹⁹⁾。

近年、日本を含め世界各地でバンクシーの許可を得ていない「バンクシー展」が開催されてきたが²⁰⁾、今回の展覧会を機にバンクシーは「無許可のバンクシー展は、私のスタジオのごみに見せかけたものを展示しているが、『CUT&RUN』のものは本当に私のスタジオのごみだ」と語っている²¹⁾。

グラスゴーの街はもともと市議会のプロジェクトにより合法的な壁画が数多く見られる地域であるが、バンクシーの公式展開催中にストリートアートが急増し、都市の壁が非合法のグラフィティで埋め尽くされる事態に陥った。そのうちの1点、グラスゴーの大通りであるブキャナンストリートの建物の壁に描かれていた「手にマレットを握り穴の空いた太鼓を持って行進しているネズミ」の作品が、14年ぶりとなる個展を都市の中で完結させるためにバンクシー自身が描いたのではないかという憶測が飛び交った。ステンシルを使った技法やバンクシーの定番モチーフであるネズミであることと、ネズミの尾はネズミ捕りに引っかかっていて、そのエサにはイギリスのタブロイド紙「ザ・サン」が使われている（メディア界の重鎮でアートコレクターとしても知られるルパート・マードックがオーナー）などの風刺も効いていることから、多くの人が本物のバンクシー作品だと信じた²²⁾。

しかし、自分たちが「フェイク作品」として描いたと主張する2人組が現れた。BBC スコットランドの番組「ランチタイムライブ」の取材に対して、「ぼくらはバンクシー作品を徹底的に調査し、研究しました。そして、まるでバンクシーが描いた本物であるかのように見せかけながら、そこに自分たちのアイデアも加えたんです。バンクシーの心の中に入るだけでなく、バンクシーの手にもなりきったわけです。とても楽しい実験でしたが、バンクシーのように、いともたやすく描いたように見せるのはかなり挑戦的でもありました」²³⁾。

二人はまた、この実験は、バンクシーという著名アーティストの作品に対する人々の反応を検証するためのものだったと話している。彼らの予想通り「面白いのは、バンクシー作品ではないと確定した途端、同じ作品なのにすべての価値を——経済的な価値も芸術的な価値も——失ったことです。その時点で、もはや市議会にとってはただの目障りな落書きに成り下がりました」²⁴⁾。

人々がバンクシーの作品だと信じるほど「バンクシーになりきった」匿名のグラフィティ・アーティストが「バンクシー」という仮名の人物ではないと判明した途端、彼らは「バンクシー」という仮名で居続けることを許されず、彼らのグラフィティ行為は非合法的な逸脱的行為として扱われるようになり、評価されていた「作品」は「落書き」と見なされ、塗り消しと撤去の対象になってしまった。グラスゴー市議会の広報担当者は、「真のバンクシーを確認したいなら、GoMAの公式展を見にすればいい」と述べている²⁵⁾。

②真似ていないのに「そっくり」と呼ばれた「バンクシー風」な人

2023年2月22日には、「バンクシー、東京の自由が丘に出現？」というタイトルの記事がある。

東京都目黒区の自由が丘駅前にある書店に描かれた壁画が、バンクシーの作品にそっくりだとツイッター（現X）で話題を呼んだ。記事では、この壁画を描いたグラフィティ・アーティスト名 HYKRX（ヒャクラク）を紹介し、同月25・26日に開催される「自由が丘ねこまつり」に合わせて依頼された作品だとわかるが²⁶⁾、ツイッターでの表現が示している通り、街角の壁画だけでは、HYKRX という仮名的匿名性は「バンクシー」に回収されてしまっている。

作品は、猫と一緒に雲に乗った子どもが持つ釣りざおの先にハートが結ばれている図柄で、「そっくり」と言われた理由として考えられるのは、ステンシルの技法を使ってモノトーン中心で描かれている点や、バンクシーがよくモチーフにしている「子ども」「動物」「ハート」が使われている点であるが、バンクシー作品を調査・研究してフェイク作品を描いた2人組のように、「そっくり」というほど真似をしているようには見えない。同じ手法で関連するモチーフを使った作品であるがゆえに「バンクシー風」として認識され、そんな

作品を描く匿名のグラフィティ・アーティスト「バンクシー」が二人いてはいけ
ないせいで、仮名的匿名性で活動している HYKRX のアイデンティティ
(個性) も消失させられてしまったのである。

③ 「バンクシーを真似て」バンクシーだと思われてしまったが、 「自分はバンクシーじゃない」と言いたい人

X (旧ツイッター) で人気のインフルエンサー「レンタルなんもしない人」
が2023年10月20日に公開した依頼は、「誰にも話せないことを打ち明けたい」
というものだった。それは、2019年1月に東京都港区海岸にある日の出ふ頭付
近の防潮扉で発見され、バンクシーの本物だと言われた「Umbrella Rat (傘
をさすネズミ)」のステンシル画を描いたのは、バンクシーではなく自分だと
打ち明ける内容だった。

レンタルなんもしない人のツイート全文は、以下の通りである²⁷⁾。

「誰にも話せないことを打ち明けたい」という依頼。何年前かに港区でバンクシー
(そのへんの壁にスプレーで絵を描くスタイルで世界的に有名となった正体不明の
路上芸術家) をまねて壁に絵を描いたら、それがいつのまにか「バンクシーかもし
れない」と話題になり、東京都の判断で正式に展示されることになったとのこと。
知人と近くを通ったとき「このへんにバンクシーの絵があるらしいよ」と言われ
行ってみると自分がテキトーに描いたネズミの絵がめちゃくちゃしっかり囲われて
展示されていてヤベ〜ってなったらしい。当時のアート評論家たちが「この時期の
バンクシーの作風からすると本物の可能性がある」などとコメントしたり、付近で
働いていた清掃員から「10年くらい前からあったと思う」などの目撃情報が出たりも
したそうで「みんなテキトーなことばっか言ってる」と言っていた。壁への落書きは
犯罪なので誰にも話せないけど、あれを描いたのはバンクシーじゃなくて自分なん
だって、永遠に誰も知らないままなのか〜と思うと、誰かには本当のことを知って
おいてほしくなり、無関係な他人を借りて打ち明けてみることにしたらしい。話し
終えると「いやー！ 初めてひとに話しましたよ！」「めちゃくちゃスッキリしまし
た！ 罪滅ぼした気分です！」と気持ちよさそうに伸びをしていた。

依頼人の言う通り、確かに当時は小池百合子東京都知事が「あのバンクシーの作品かもしれないカワイイねずみの絵が都内にありました！ 東京への贈り物かも？ カバンを持っているようです。」と写真付きで投稿し、美術評論家たちの本物認定や清掃員の目撃情報などが報道され、その後防潮扉が撤去されて東京都庁で展示された経緯がある²⁸⁾。

先に引用した告白の中で、彼は「自分がテキトーに描いたネズミの絵」と言っている。しかし、依頼人が事実を告白しているのだとすれば、彼は非合法的グラフィティ行為ができる人で、ステンシルを利用したスプレー画の経験を持っていることになる。なおかつ、バンクシーを真似て型紙を作ったのか市販されている同じ図柄のシートを購入したのかは不明だが、ステンシル自体も持ち歩いていたことになる。それは言い換えれば、バンクシーがそうであるように、グラフィティ行為をするために、街を歩きながら壁や支持体、作品を媒介するメディアを物色しているような人＝「バンクシーのような人」だということになる。

しかし、ここでの関心事は依頼人の告白の真偽を問うことではなく、依頼人は自分の「テキトーに描いたネズミの絵」がバンクシーの作品と勘違いされているため、正体を明かさず仮名も付けず無名的匿名性²⁹⁾を貫かなければならないという点であるが、この関心を観察する手立てとして、「レンタルなんもしない人」のツイート文章に存在する「解釈の余地」に注目する必要がある。

注目点として、この問題を報じる記事では、「バンクシーを真似て描いたら話題に」という見出しになっているが³⁰⁾、「真似て描いた」という点の解釈について、もう一度ツイート原文に立ち戻ってみると、確かに「バンクシー……をまねて壁に絵を描いたら、それがいつのまにか『バンクシーかもしれない』と話題になり……」と書かれている。

しかし、作品が発見された2019年から2023年の今日まで、あの防潮扉にあったステンシル画を「限りなくバンクシー本人が描いた作品」と認識してきた私たちは、はたしてこの「バンクシーを真似た」という言葉をどのように評価するのだろうか。グラスゴーの例にあるような、バンクシーを調査・研究して

「バンクシーになりきった」とも違うし、自由が丘の例にあるような、真似ていないのに「そっくり」でもない。

また、依頼人本人の告白に見える心情を想像して解釈してみると、本人は「自分がテキトーに描いたネズミの絵がめっちゃくちゃしっかり囲われて展示されてヤベ〜ってなった」とあることから、「バンクシーを真似た」のは、バンクシーや他のグラフィティ・アーティストと同じように路上でのグラフィティ行為をやってみたくて、見よう見まねで「テキトー」に、そのへんの壁にスプレーで絵を描いてみたという意味での「バンクシーを真似た」とも考えられる。このとき、グラフィティの世界では皆、「バンクシー」と同じように匿名性を維持するための仮名（ライターネーム）で非合法的な行為を行うのであるが、私たちのほとんどがバンクシーという仮名的匿名性しか認識していないため、他のグラフィティ・アーティストたちは「無名的匿名性」として扱われていることがわかる。依頼人が自己表現のために路上で描くことにほとんど関心がなかったのだとすれば、「バンクシーを真似た」とは、あくまでも非合法的なグラフィティ行為自体のことであり、バンクシーは「そのへんの壁にスプレーで絵を描くスタイル」の代名詞に過ぎなかったことになる。

むしろ依頼人は、美術評論家たちの作品認定や目撃証言を「みんなテキトーなことばっか言ってる」と言い、「あれを描いたのはバンクシーじゃなくて自分なんだ」と知っておいてほしいがゆえに打ち明けているのであるから、彼は「バンクシーを真似た」うちの「バンクシー」という仮名的匿名性の部分を否定したいのである。依頼人は、あのネズミの絵から「バンクシー」という仮名的匿名性を消失させて、無名的匿名性の作品にしたい。それは自分が描いたものであるが、落書きは犯罪行為であるので、仮名的匿名性で自分の作品と主張するつもりもなく、誰にも話さず自分も無名的匿名性を貫こうとしている。

一方、「レンタルなんもしない人」のツイートを読んだ人々の反応もまた、「バンクシーを真似た」という認識を否定する内容となっているが、「バンクシー」という仮名的匿名性において両者は平行線をたどることになる。

閲覧者たちはこのツイートを媒介として、「背景情報の追加」というかたちでバンクシーを代弁する作品媒介行為を生み出し、以下のような投稿をしている³¹⁾。

本作品は、バンクシーが描いた作品である可能性が非常に高いです。

公式画集「Wall and Piece」での掲載。またバンクシー自身が監督を務めた映画「Exit Through the Gift Shop」内でも、本作が登場。

asahi.com/sp/articles/AS...

huffingtonpost.jp/entry/banksy-t...

※LA Weekly での記事は現在画像が削除されている

しかし、バンクシーは本作品が自分自身で描いたと明言してないため、あくまで“可能性が高い”。投稿者も、自分視点での事実であり、本作品の真偽は不明と補足している。

以上のことから、真偽は不明ながら、誤解を招く可能性がある投稿内容ではありません。

依頼人の告白に疑問を呈する人々は、バンクシーの作品集や映画といったメディアを根拠として、防潮扉の作品は「バンクシーを真似た」ではなく、あくまでも本人が描いた可能性が非常に高い「バンクシーらしき」であると主張している。

今回の告白によって、あのネズミの絵の制作者は、可能性としてバンクシー本人か告白をした依頼人かというだけでなく、全くの別人が描いた余地も残されることになるが、依頼人の告白を疑問視した閲覧者たちは、やはりあのネズミの絵には、「バンクシー」という仮名的匿名性が付着していないといけなさと考えている。

そして閲覧者たちは、依頼人が「バンクシーを真似た」としても、「バンクシーのふり」をしているわけではないことから、依頼人に対して「お前はバンクシーじゃない」と否定しているわけでもないし、バンクシー本人である証拠を見せると迫っているわけでもない。依頼人の告白と防潮扉へのグラフィティ行為の有無に否定的な内容ではあるものの、バンクシー作品であるとする彼らの主張には、バンクシーの代弁行為として「バンクシーは本当に他にいる」こ

とを示している。端的に言えば、この仮名的匿名性を利用する「バンクシー」がどこかにいなければならない、そして「バンクシーが二人いてはいけない」のである。

「レンタルなんもしない人」はこの依頼内容について、「自分だとわからない範囲でなら公開して大丈夫」と依頼人の了解を得ているという報道からもうかがえるように³²⁾、依頼人は、本人の意図とは違うかたちで、正体不明かつ仮名も付けず無名的匿名性を貫かなければならなくなっている。

④ 「バンクシーっぽい」 振る舞いをしたい人

2023年4月25日、神奈川県中井町のタウンニュースに「謎のボンクシー」という見出しの記事が掲載された³³⁾。記事によれば、子どもの交通安全を願って設置される滋賀県発祥の「飛び出し坊や」3体が中井町に寄贈された。制作者は、バンクシーならぬ「ボンクシー」を名乗る人物で、飛び出し坊やの足には「PONKSY」と書き込まれている。町長はこの計らいに感謝して小学校や公園周辺に「作品」を設置したが、「ボンクシー」はかつてのバンクシーのように代理人を通じて「子どもやお年寄りを交通事故から守りたい。注意喚起のため、製作した飛び出し坊や3体を提供します」という内容のメールを送り、仮名的匿名性を貫いている。そして制作者は、アートを通じて社会正義を実践するバンクシーと同じ振る舞いをしているにもかかわらず、「第二のバンクシー」や「中井町のバンクシー」などの仮名を使わず、「ボンコツバンクシー」を略して「ボンクシー」と名乗っているという。この仮名は制作者の個性を示す指標かもしれないが、バンクシーっぽくありたいが匿名性を示す仮名としてそのまま「バンクシー」を使わない、あるいは「使えない」という背景も透けて見える。「なりきり」でもなく「そっくり」でもなく「真似た」わけでもない彼が「バンクシー」と名乗っても、作品の真贋問題など不都合は生じないはずだが、やはり「バンクシーが二人いてはいけない」のだと言うほかない。

⑤見たことのある作品を巡って「バンクシーに違いない／バンクシーとは違う」と主張し合う人々

茨城県高萩市では、海岸にある防波堤などに描かれたステンシル画が、「バンクシーが描いたのでは」と話題になり、観光客が訪れるようになっていく。2023年8月現在、高萩海岸の防波堤やテトラポットに描かれていた作品は、2018年10月のシュレッダー事件で一躍有名になった「少女と風船」にはじまり、港区の防潮扉でも話題になった「Umbrella Rat（傘をさすネズミ）」や、バンクシーの初期代表作でパレスチナのベツレヘム郊外に描かれている「Love is in the Air（花束を投げる男）」、そしてメッセージボードを首からぶら下げているサルをモチーフにした有名な「Laugh Now」、さらにはバンクシーの出身地とされているイギリス・ブリストルやイーストロンドンでかつて見られ、キャンバスやカードボードなど様々な媒体に描かれてきた「爆弾を抱えている少女」が描かれている「Bomb Love」など、どれも「バンクシー」で検索すれば、バンクシーが描いた作品としてその画像が見られるものばかりである。

この話題では、民放テレビのニュース番組も現地取材を行って同月24日に放送している³⁴⁾。映像内では「絵を見にきた人」にインタビュー取材が行われているが、「絵を見にきた20代」として紹介されている女性は、「バンクシーの絵に憧れているので実際に見られてよかったなって思っています」とコメントしている。また、やはり「絵を見にきた60代」として紹介されている女性も、「バンクシーでしょ！バンクシー。落書きじゃないですよ！これ。芸術作品だと思いますけど」と答えている。インタビューを受けて実際に放映されたこの二人は、いずれもバンクシーという仮名の匿名性で活動している人物が「誰であるのか」（アーティストであること）を知っていて、防波堤やテトラポットの作品が「バンクシーに違いない」と認識しているように見える³⁵⁾。

一方で高萩市は、一連のステンシル画を作品ではなく「落書き」と認定した。その理由として市は、防波堤でステンシル画の「少女と風船」をはじめ確認した2019年にはまだ一つだったが、2023年に入ると六つにまで「バンクシーの作品」が増加した点、そして描かれた絵がこれまで見たことのあるものは

かりだったことから、一連の作品は「偽物」=落書きと判断したと説明している³⁶⁾。

そのため高萩市は、同年3月、「落書きは犯罪行為で、観光としてのPRはできない」として「落書き禁止の看板」を設置した。しかし、ここでまた、この「看板」を介して作品媒介行為が生じることになる。「バンクシーが描いたのでは」と話題になり報道された8月の映像を見ると、「落書き禁止」の文字の上には「BANKSY 以外の」と書き足されている。また、「落書きは犯罪です」の部分は「アート海岸指定地区」と書き換えられ、「Art in the City IBARAKI」と追加されるなど、看板自体への落書きが相次いだ。

そのためこの看板に対しても、ニュース番組では現地取材をしている。看板自体への書き足しや書き換えなどの「落書き文字」を、高萩市が書いたものだと「真に受けてしまう人」が紹介されている。

インタビュアー：「バンクシー以外」の文言、あれも落書きらしいですよ。

男性：あっそうなんですか!? じゃあだめってことですよね。

ナレーション：“バンクシーは落書き OK”と勘違い。

男性：この市はそれを OK してるんだとずっと思ってたんで。

このインタビューもまた、テレビ局の恣意的な編集であることも想定できるが、「絵を見にきた」人たちのコメントや「バンクシーは落書き OK」という認識が示す通り、観光客は防波堤やテトラポットのステンシル画をバンクシーの手による「バンクシーの作品に違いない」と認識している、またはそのように認識しがっていることがわかる。彼らが「バンクシー」の名前を挙げて「バンクシーに違いない」と主張できる理由は、どの図柄も私たちがこれまで見たことのあるものばかりのバンクシー作品と同じだからである。

そして繰り返しになるが、他方では、これまで見たことのあるものばかりであるがゆえに、「バンクシーとは違う」という見解に至ることができる。高萩海岸と同様のことが、2023年7月東京都足立区のもんじゃ焼き店でも指摘されている。同年2月のある日、この店の外壁にバンクシーの「少女と風船」が描かれ、ちょっとした話題になり写真を撮る人も多かった。同じ「少女と風船」

の出現で「バンクシーに違いない」と話題になったのは、高萩海岸とこのもんじゃ焼き店に加えて、千葉県九十九里町の漁港の護岸や茨城県水戸市のコインランドリー店の壁など、複数の場所と時期にまたがる。この現象に対してバンクシー研究者としてコメントを求められた毛利嘉孝は、バンクシー自身が所有するホームページやインスタグラムで日本各地の「少女と風船」画像を公開していない点に加えて、「『少女と風船』という過去の作品を東京に来て描くことは、状況的に考えにくい」ことを理由に挙げている³⁷⁾。

本来、ヴァンダルのグラフィティは、同じ図柄を様々な場所の壁に繰り返し出現させて話題を生み出すことで、匿名で活動するライターのアイデンティティを示すものである。また、バンクシーがグラフィティで利用するステンシルは、型紙にスプレーを吹きかけて描くだけなので、短時間で終わることができるため、最も作品を増殖させやすい方法とされている。実際、バンクシー自身もかつては作品を世の中に広める目的でステンシルを利用して、同じ図柄を複数の場所で出現させている。しかし、バンクシーの作品に精通している人々は、「バンクシー」というその仮名的匿名性を利用する制作者を、特定の一人を指す「個人」だと認識し、その「バンクシー」は、ちょうど画家のアート作品がすべて一品ものだと認識されているように、もはや新作しか描かない（そして必ず SNS で公開する）という理解に至っている。

だが、バンクシーと全く同じ図柄と手法であるのに、仮名的匿名性を持つ制作物に対して「バンクシーとは違う」と主張することができる私たちの認識のあり方には、もう少し留まって観察する必要がある。

バンクシーが手法として利用しているステンシルは複製が最も可能なメディアであることから、本来、オリジナルの概念は成立しづらいはずであるが、「バンクシーとは違う」という主張には「オリジナルのバンクシー」が想定されているのがわかる。そして、「オリジナルのバンクシー」を想定した場合、通常、対関係に位置するのは「バンクシーのコピー（あるいはコピーのバンクシー）」であるが、オリジナル＝コピーの関係性で言えば考える余地があるはずの「バンクシーの可能性」は否定されることになる。その理由として、私たちはオリジナルの対関係として、コピーではなく「レプリカ（複製品）」を想

定し、「オリジナルのバンクシー」があると考えるがゆえに、レプリカは、バンクシーという仮名的匿名性を持たない「無名的匿名性で存在する誰か」が描いたものと認識する。言い換えれば、バンクシーのレプリカを描く人物は、必ずバンクシーという仮名的匿名性を持つ人物であってはならないのであるから、その作品は偽物だと認定することになる。

また、「過去の作品を東京に来て描くことは、状況的に考えにくい」とき、人物としての「オリジナルのバンクシー」が同じ作品を描きに来日した可能性だけに留意する必要はない。オリジナルを描いた「バンクシー」でなくとも、同じ図柄のステンシルを利用して同じ作品を再現する「コピーをしている人物」もまた、オリジナル＝コピーの関係性では「コピーのバンクシー」であり、「バンクシー」という名の仮名的匿名性でもよいはずだが、高萩海岸をはじめとする「少女と風船」の「バンクシーとは違う」という否認は、またも「バンクシーが二人いてはいけない」ことを指し示している。

高萩海岸の管理事務局である茨城県高萩工事事務所は、「書いた本人に消してもらいたい」とした上で、落書きを消すことを検討しているという³⁸⁾。しかし、その「本人」とは、落書き禁止の看板に上書きされた言葉のように、明らかに「BANKSY 以外」を想定している。そしてまた、高萩海岸というこの場所で、「バンクシーが二人いてはいけない」という認識が別のかたちで表現されていることも見逃せない。

この高萩海岸は、Google マップ上で「ヴァンクシーの壁画」（景勝地）として紹介されている³⁹⁾。Google マップの一般的なガイドラインでは、リスティングは、実在する場所で、かつ公的に認められた場所であり、一般に公開されていることという条件がある。さらに、同じ名前でも何か所も追加するのは NG とされている⁴⁰⁾。しかし、Google マップ上で検索をかけたところ、「バンクシーの壁画」では何もヒットしなかった。「バンクシーの壁画」という景勝地が存在しないのに、登録した人はなぜ「バン」ではなく、あえて「ヴァン」にして「ヴァンクシー」にしたのか。バンクシーに「なりきり」で「そっくり」で「真似た」と判断された壁画は、最も「バンクシー」であってはならないレプリカ＝偽物であるから、「バンクシーが二人いてはいけない」ことを示す最

良のやり方は、「バンクシー」という仮名的匿名性の偽者だと最もわかりやすい仮名にして、「ヴァンクシー」としたのかもしれない。

4. 実名と肉声が「バンクシー」を再生する

イギリスの BBC ラジオ（ポッドキャスト）の人気シリーズ「The Banksy Story」で、今から20年前の2003年に収録されたバンクシーのインタビューが、ボーナスエピソードとして2023年11月21日に公開された。このシリーズ番組では、バンクシーがアーティストとして台頭する軌跡を描いており、その中では、アメリカの公共ラジオ局 NPR から発掘された2005年の未確認音声も紹介している⁴¹⁾。

2003年のインタビューは、当時 BBC のアート特派員だったナイジェル・レンチが、ロンドンで開催されたエキシビション「Turf War」の直前にバンクシーに対して行ったもので、今回番組を聴いたレンチが、インタビュー音源の未公開部分をポッドキャストの司会者ジェームズ・ピークと共有したことで放送が実現された。

やはり報道で話題になっているのは、バンクシーに対して行われたインタビューにおいて、レンチが当時うわさになっていたバンクシーの実名「ロバート・バンクス (Robert Banks)」なのかと尋ねたところ、「ロビー (Robbie) だ」と返答していたことにあった。だがこのラジオ番組は、バンクシーの匿名性を暴こうとしているわけではなく、司会者のピークもまた、「これは正しい名前か？ 気の利いた冗談か？」と問いかけて、ロビー・バンクスのような名前は語呂合わせだった可能性があることをほのめかしている⁴²⁾。

そして、シリーズで提供されたポッドキャストでは、2005年3月24日にアメリカの公共ラジオ局 NPR のニュース番組「All Things Considered」に応じたとされるインタビューから抜粋した録音も公開されている。司会者のミシェル・ノリスが放送の中で「私たちは、あなたが自称する通りの人物だと信じるしかないが、どうしたらそれを確かめることができるのか」と質問すると、バンクシーは「そんな保証はまったくない」と返答している⁴³⁾。

また、このインタビューの時期がメトロポリタン美術館でバンクシーが作品を無断で展示した数日後であったことから、自身を「ペインター兼デコレーター」と称したバンクシーに対して、「でも、あなたの行動は違法だ」と司会者が忠告すると、バンクシーは、「それが面白いんだ。卵を割らないとオムレツは作れない。私は頻繁に逮捕されることには興味がない。できるだけ長く続けることが重要なんだ。つまり、無思慮な破壊活動は、ほとんどの人が想像するよりもずっと考えることが必要なんだ」と返している⁴⁴⁾。

さて、このような20年前のインタビューは、何を物語っているのだろうか。バンクシーという仮名で匿名性を維持している人物と接触して目の前でインタビューをしている以上、視覚的な匿名性は解除されているはずであるのに、私たちは、バンクシーがバンクシーであることをバンクシーに確かめることができない。そして、バンクシーがバンクシーであることをバンクシーが保証することはない。仮名的匿名性において「バンクシーが二人いてはいけない」とは、そういうことである。一人存在しているから「二人いてはいけない」のではない。逆説的ではあるが、私たちが一人も確定できない以上二人目を認めることはしない、あるいはできないのである。だからこそ、一見実名を答えたように見える「ロビーだ」という返答もまた、その録音を耳にした私たちは、作品媒介行為として「気の利いた冗談」「語呂合わせ」だといった、仮名的匿名性を保持するような代弁的行為をとってしまうことにもなるのだ。

そしてもうひとつ、20年前のインタビューが物語っていることがある。バンクシーのコメントを聴いたとき、私たちはバンクシーが今語っているように聴いてしまうという点である。「あなたの行動は違法だ」と言われて「それが面白いんだ。……私は頻繁に逮捕されることには興味がない」と、「20年前の青年」が答えた。匿名のグラフィティ・アーティストとしてアイデンティティを誇示しようとするその青年の声を、「20年前のインタビュー」だと思って聴くと、この返答は非常にステレオタイプな反社会性を示しており、ありふれた表現に聞こえる。私たちの人生で、青年から20年が経過すれば中年になり、思考や態度が変化している可能性があっても不思議ではない。「若気の至り」という言葉もあるように、今とは違う当時を振り返って、私たちは「20年前のイン

タビュー」に驚き、懐古的な発見に出会い、微笑ましく思ったりする。しかし、20年後の GoMA での展覧会で、バンクシーは同じような内容の声明を出している。「私は、これらのステンシルを何年も隠してきた。器物損壊罪の証拠として使われるかもしれないと思ったからだ。でも、もうそのときは過ぎ去ったようなので、今回はアート作品としてギャラリーに展示する。どっちが罪が重いかわからない」⁴⁵⁾。

20年間を通じて、私たちの中でバンクシーは成長していないことになる。それが、社会の中で仮名の匿名性を維持しているということの意味なのだろうか。

〈註〉

- 1) <https://www.cnn.co.jp/style/arts/35213166.html> (最終アクセス日2024年1月25日)
- 2) <https://www.cnn.co.jp/style/arts/35213282.html> (最終アクセス日2024年1月25日)
- 3) <https://www.afpbb.com/articles/-/3497650> (最終アクセス日2024年1月25日)
- 4) <https://www.cnn.co.jp/style/arts/35213282.html> (最終アクセス日2024年1月25日)
- 5) 作品媒介行為という概念は、J.L.オースティンの言語行為論にある「発語媒介行為」から着想を得ている。また、J.ハーバーマスの『コミュニケーション的行為の理論』を参考にすれば、作品媒介行為という視点は、バンクシーの戦略的行為にも言及できるかもしれない。
- 6) 森岡武史「インターネットの匿名性による Deindividuation とオンライン・コミュニティの秩序」『日本社会情報学会全国大会研究発表論文集』22 (0), pp.138-141, 2007年。
- 7) https://www.huffingtonpost.jp/entry/banksy-valentine-s-day-mascara_jp_63ec1537e4b07f036b9fd7a8, <https://jp.reuters.com/article/idUSKBN2UP086/>など (最終アクセス日2024年1月26日)。また、3月になっても、別のバンクシー記事(廃墟の取り壊し)で「作品に使われた冷蔵庫が撤去される出来事があった」と、「冷蔵庫」のことを繰り返し書いている。<https://artnewsjapan.com/article/845> (最終アクセス日2024年1月26日)
- 8) 「借景」の指摘は、2011年の『ユリイカ 8月号』に掲載されたいとうせいこうと大山エンリコイサムの対談に出てくる。『ユリイカ 8月号』第43巻第9号, 45-55頁を参照。また、有泉(2017)でも、「バンクシーの語られ方」としてこの特徴を考察している。有泉正二「バンクシーという名の社会現象(前編)」『東京立正短期大学紀要』第45号, 4-9頁を参照。

- 9) <https://jp.reuters.com/article/idUSKBN2UP086/> (最終アクセス日2024年1月26日)。
CNN でも、12月にあったバンクシーの壁画解体記事にもかかわらず、本件が持ち出されて同様のニュアンスで「バンクシーが自らの作品だと確認したところ、ものの数時間でこの冷蔵庫は持ち去られてしまった」という表現を使用している。
<https://www.cnn.co.jp/style/arts/35212179.html> (最終アクセス日2024年1月26日)
- 10) <https://jp.reuters.com/article/idUSKBN2UP086/> (最終アクセス日2024年1月26日)
- 11) <https://www.j-cast.com/2023/01/24454749.html?p=all> (最終アクセス日2024年1月26日)
- 12) <https://www.j-cast.com/2023/01/24454749.html?p=all> (最終アクセス日2024年1月26日)
- 13) <https://news.yahoo.co.jp/articles/09fdec0f4daa9adc12e57fb9a22302922bd0058b> (最終アクセス日2024年1月26日)
- 14) <https://artnewsjapan.com/article/845> (最終アクセス日2024年1月26日)
- 15) <https://www.cnn.co.jp/style/arts/35212179.html> (最終アクセス日2024年1月26日)
- 16) <https://artnewsjapan.com/article/1073> (最終アクセス日2024年1月26日)
- 17) <https://artnewsjapan.com/article/1073> (最終アクセス日2024年1月26日)
- 18) <https://tabi-labo.com/306905/wt-banksy-living-nightmare> (最終アクセス日2024年1月26日)
- 19) <https://bijutsutecho.com/magazine/news/exhibition/27359> (最終アクセス日2024年1月26日)
- 20) 有泉 (2021) では、主に日本で開催された無許可のバンクシー展の特徴を観察している。有泉正二「肖像イメージとしてのバンクシーを観察する」『東京立正短期大学紀要』第49号、4-10頁を参照。
- 21) <https://artnewsjapan.com/article/1163> (最終アクセス日2024年1月26日)
- 22) <https://artnewsjapan.com/article/121> (最終アクセス日2024年1月26日)
- 23) <https://artnewsjapan.com/article/1212> (最終アクセス日2024年1月26日)
- 24) <https://artnewsjapan.com/article/1212> (最終アクセス日2024年1月26日)
- 25) <https://artnewsjapan.com/article/1212> (最終アクセス日2024年1月26日) [傍点引用者]
- 26) <https://www.asahi.com/articles/ASR2Q5HWLR2QOXIE00K.html> (最終アクセス日2024年1月26日)
- 27) <https://twitter.com/morimotoshoji/status/1714919765779890584> (最終アクセス日2024年1月26日)
- 28) 有泉 (2020) でも、冒頭でこのバンクシー作品の真贋問題に触れている。また、依頼人の「みんなテキトーなことばっか言っている」その内容は、毛利嘉孝 (2019) の285-286頁に記述されている。バンクシー作品の真贋問題自体については、有泉 (2019) で詳細に論じている。

- 29) 森岡が使用する「無名的匿名性」は、名前の欄が空白であったり「ゲスト」など個別性を持たない名前を名乗るインターネット上の参加者が想定されている。本稿では、「仮名的匿名性」とは対照的に、行為者を特定の個人に同定できないため「個人」としてのイメージが形成されないという点を踏襲して、この概念を利用している。森岡（2007）参照。
- 30) <https://www.sponichi.co.jp/entertainment/news/2023/10/20/kiji/20231020s00041000471000c.html>（最終アクセス日2024年1月26日）
- 31) <https://twitter.com/morimotoshoji/status/1714919765779890584>（最終アクセス日2024年1月26日）
- 32) <https://www.sponichi.co.jp/entertainment/news/2023/10/20/kiji/20231020s00041000471000c.html>（最終アクセス日2024年1月26日）
- 33) <https://www.townnews.co.jp/0606/2023/04/21/674996.html>（最終アクセス日2024年1月26日）
- 34) <https://news.ntv.co.jp/category/society/d825e36ee6234b0596b41826dfe71770>（最終アクセス日2024年1月26日）
- 35) テレビ局にも編集の意図が存在し、視聴者にも「バンクシーに違いない」と認識させようとしていることも考えられる。
- 36) <https://www.fnn.jp/articles/-/577655>（最終アクセス日2024年1月26日）
- 37) <https://www.asahi.com/articles/ASR75735WR6VOXIE04C.html>（最終アクセス日2024年1月26日）
- 38) <https://www.fnn.jp/articles/-/577655>（最終アクセス日2024年1月26日）
- 39) <https://www.fnn.jp/articles/-/577655>（最終アクセス日2024年1月26日）
- 40) <https://support.google.com/maps/thread/134850610/>（最終アクセス日2024年1月26日）
- 41) <https://www.cnn.co.jp/style/arts/35211853.html>（最終アクセス日2024年1月26日）
- 42) <https://www.cnn.co.jp/style/arts/35211853.html>（最終アクセス日2024年1月26日）
- 43) <https://www.afpbb.com/articles/-/3492572>（最終アクセス日2024年1月26日）
- 44) <https://hypebeast.com/jp/2023/7/banksy-artist-voice-bbc-radio-4-podcast-listen-stream-uk-graffiti>（最終アクセス日2024年1月26日）
- 45) <https://edition.cnn.com/style/banksy-glasgow-exhibition-tan/index.html>（最終アクセス日2024年1月26日）

〈参考文献〉

有泉正二「バンクシーという名の社会現象（前編）」『東京立正短期大学紀要』第45号，pp.1-18，2017年。

- 有泉正二「バンクシーという名の社会現象（続編）」『東京立正短期大学紀要』第47号，
pp.1-29，2019年.
- 有泉正二「グラフィティ／バンクシー研究の方法論的考察 —認識とイメージの分析に向けて」『東京立正短期大学紀要』第48号，pp.1-25，2020年.
- 有泉正二「肖像イメージとしてのバンクシーを観察する」『東京立正短期大学紀要』第
49号，pp.1-32，2021年.
- J.L.オースティン著，坂本百大訳『言語と行為』大修館書店，1978年.
- 森岡武史「インターネットの匿名性による Deindividuation とオンライン・コミュニ
ティの秩序」『日本社会情報学会全国大会研究発表論文集』22（0），pp.138-141，
2007年.
- 毛利嘉孝『バンクシー アート・テロリスト』光文社新書，2019年.
- 『ユリイカ 8月号 特集：バンクシーとは誰か?』第43巻第9号，2011年.

子どもへとつなぐレイチェル・カーソン 「センス・オブ・ワンダー」の軌跡 －自然との共存を目指す保育園での取り組みの一考察－

尾 近 千 鶴

第1章 はじめに

子どもが健やかに成長して行く為には、出来るだけ自然に触れさせることが大切と言われている。物があふれ、便利で何不自由ない豊かな社会に生まれてきた子ども達に、なぜ豊かな自然体験が必要なのか。「自然体験が豊かな子どもほど、道徳観や正義感が強く」、生きていく為の力が備えられるのではないかとされている¹⁾。一体、自然体験とは何なのか。人間として成長し、生きていくために必要なものは何なのか。

これらを明確にするために、レイチェル・カーソン（以下、カーソン）の思想につながる考え方のもとに保育を行っている A 保育園の活動を一事例として取り上げ、保育園の理念と検討を重ね視点とし、考察する。

保育園の理念は、「柔らかな感受性を持った子ども達が、体験を通して自分自身が心を動かして学んだこと、それが人間形成の基礎となり、子ども達の一生を貫いていく。」そして、「可能性豊かな子ども達を自然の中に解き放ち、季節を感じ、人にも物にも優しさを向けられる心を育てていきたい。」である²⁾。

カーソンは『沈黙の春』で、環境汚染の問題を告発し人間の将来へ警告を発するとともに、『センス・オブ・ワンダー』で、自然の神秘さや不思議さを感じ取る感性を育てることの大切さを説いた。センス・オブ・ワンダーを育み強めていくということは、「永続的で意義深い何かがある」と、カーソンは信じていた³⁾。そして、「地球の美しさに深く思いを巡らせることの出来る人は生

命の終わりの瞬間まで生き生きとした精神力を保ち続けることが出来る。」と語っている⁴⁾。現代社会のあり方を問い、「自然との共存」という別の道を見出す希望を幼い子ども達の感性の中に期待したと考えられる。

本研究は、レイチェル・カーソンの自然との共存という視点を手がかりに保育活動の取り組みを実証的に検討し、一事例として取り上げ考察する。レイチェル・カーソンの著作や関連著作を文献とする。また、保育園に関する資料は、入園パンフレット、クラス便り、園便り、卒園文集、父母の会便り、委員会便りなどである。懇談会での園長や教職員の話は、フィールドノートに記載した。これらの活用は、園長から教職員、保護者に事前に説明し、掲載の許可を得ている。

第2章 A 保育園

第1節 保育園の歴史、規模数

1928年、農村での夏季聖書学校の開設準備が始まった。4年後の1932年、農家の庭を借りて農繁期託児所が始まり、年々、託児数は増加したため、神社の境内を借りて自然の中で遊ぶ青空保育が、展開されていった。牧師は、託児所の中に、ブランコや滑り台、砂場などを手作りし、古木や古材木で木工細工を楽しむ工夫を子ども達に提供した。1942年、村人の切望に答え、某家の空き地を借用し、戦雲急を告げる4月に常設青空育園が開始された。これがA 保育園の創立である。A 保育園が掲げるテーマは「自分で考え 自分で遊ぶ 子ども達。」である。園庭に一步踏み込むと、森のように木々が茂っている。手作りのジャングルジムや滑り台、チャイルドシートで作られたブランコ、フィールドアスレチックのような様々な遊具。砂場や園庭を巡る造成された小川。そこでの泥遊び。うこっけいやヤギ、アヒルやウサギ等の小動物たち。放し飼いにされた犬。手作りのウッドデッキの上での絵本コーナーやランチコーナー、お昼寝コーナーなどがある⁵⁾。

定員は181名（0～5歳児）で、クラス編成は5歳児48名、4歳児48名、3歳児40名、2歳児24名、2歳児未満21名である。2018年度の家族数は135家族

である。職員は、園長1名、副園長1名、保育士25名、その他の職種をあわせ常勤と非常勤で総勢40数名である⁶⁾。

第2節 父母の会

A 保育園の特徴のひとつに、父母の会がある。A 保育園は、都市化の進む首都圏郊外に位置する。子ども達に緑豊かな四季折々の季節感を味わえる保育環境を、後世に渡って残していこうとの考えの下、父母の会とともに様々な活動を行ってきた。

半世紀以上に渡って、数多くの卒園児の父母達が残っていた「共に助け合う」という精神は、現在も引き継がれている。一人一人の個性を尊重しながら、出来ることから始め、お互いを支えあいながら活動する父母の会は、保育園にとってなくてはならない存在である。

父母の会の組織は、役員、会計監査、駐車場担当、地区委員、クラス委員、専門委員、花火師から成り立っている。

役員は、父母の会全体を統括・調整し、経費の出納の事務・管理・予算作成を担当する。また、父母の会に関する文書の記録や、委員会会議の議事録の作成、行事記録などの作成を担当する。

会計監査は、父母の会に関する出納状況が適正に実施されているかどうかを公正な立場から監査する。監査は、年2回実施される。

駐車場担当は、保育園・父母の会に対する駐車場に関する折衝窓口となる。駐車場の移持・運営・管理を行い、月極駐車場使用代金の算定や定期的な集金を行う。

地区委員は、父母が移住する各地区のまとめ役として、連絡事項の伝達やとりまとめ役を担当する。また、地区内の父母同士の親睦を図り、バザーなどでは地区会を開催し、地区活動の運営とりまとめを図る。

クラス委員は、クラス担任と父母とのパイプ役を果たす。各クラスのとりまとめ役として、クラスの親睦を図り、連絡事項を伝達する。

専門委員会は、6つの委員会に分かれて、活動している。図書委員会は、図書の貸し出し・管理を行う。さらに、新刊図書の購入や図書便りの作成及び発

行を行う。バザー委員会は、バザーの沿革・特色・目的・活動などの広報を行う。また、バザーの収益配分についての調整を行う。さらに、共同購入によって得た収益の調整も行う。講演会委員会は、保育園主催の講演会とは別に、父母の会の構成員が希望するテーマに関する講演会の企画・運営を行う。さらに、講演会便りの作成・発行や、講演会の録音テープの貸し出し・管理を行う。ボランティア委員会は、ボランティア便りの作成・発行をする。さらに、資源回収の企画・運営や資源問題・発展途上国への支援活動を行う。安全食品委員会は、安全な食品・生活雑貨のアピール及び共同購入の実施や食及び環境問題などに関する講演会・勉強会の実施、さらに、お便り・新聞の作成や発行を実施している。原発の恐ろしさを知る会は、原発の問題点などのアピールと他の原発関係団体との連絡を行う。また、原発問題に関する講演会の企画・開催やお便りの作成・発行を実施する。

花火師は、夏季に開催される花火大会の企画・運営に当たる。このように、父母の会は、子ども達に豊かな保育環境を残していくために、様々な活動を繰り返し広げている。

また、卒園しても父母の会 OB/OG が活動を続けている。例えば、子連れでの入場が可能なコンサートでは、スピーチで、父母の会 OG の仲間として10年以上その関係が続いていると紹介されている。また、保育園は借地という性質を持つ以上、その地代を捻出する必要がある。OB/OG 含めバザーを開き、その収益を地代に当てるが、そのためだけではない。園舎や園庭の維持だけでなく、地球に住まう他の人々にも目を向け、その人たちの持つ問題や苦しみを理解することに努め、自分達に出来ることは何かを考え、出来ることから始めるために様々な活動を、保育園とともに父母の会は繰り返し広げている。

第3節 講演会『センス・オブ・ワンダー』レイチェル・カーソン

父母の会の講演会委員会では、「レイチェル・カーソン日本協会」代表で、『センス・オブ・ワンダー』の翻訳者でもある上遠恵子氏（以下、上遠氏）を招いたことがあった。そこでは『センス・オブ・ワンダー』のビデオが上映さ

れ、その後、レイチェル・カーソンについて、また、子ども達とのかかわり方についてなど、講演が行われた。

上映ビデオには、著書『沈黙の春』で一躍脚光を浴びたカーソンの姿があり、上空から空中散布される農薬とともにその影響を受けた動物や鳥達の様子が映し出されていた。『沈黙の春』を通して、ついにカーソンの主張は第3章で紹介するが、当時の大統領に認められ、環境保護に向けての対策が講じられていくようになった。

ビデオの中で、上遠氏がアメリカのメイン州の森の中で、たたずんだり散策したりしながら、カーソンの『センス・オブ・ワンダー』を朗読する場面がでてきた。ビデオ上映の後、上遠氏はカーソンの控えめなその性格について語り、『沈黙の春』を執筆するに至った経緯について、また『センス・オブ・ワンダー』に託されたカーソンの子ども観や自分の子ども観について、語りかけた。今の子ども達は時間に追われすぎているのではないか、もっと子どもの時間に大人が歩み寄り、子どもと共にゆったりとした時を過ごす必要があるのではないかと、子どもとのかかわり方について、提案をした。子どもに対するかかわり方の姿勢は、大人の側からではなく子どもと同じ目線に立ったものと考えられる。

その子ども観は、子ども達が自身をよく知り生きていて幸福だと感じられるような教育を提案したルソーの「子どもの権利」「子どもの発見」と重なり合うと考えられる⁷⁾。

第3章 レイチェル・カーソン

第1節 レイチェル・カーソンの生育歴

レイチェル・カーソンは、1907年5月27日、アメリカのペンシルバニア州スプリングデールで3人兄弟の末っ子として誕生した。父親のロバート・ワルデン・カーソンは、1900年に町外れに土地を購入し、農場を経営していた。周囲には探索するに十分な自然があった。

カーソンは一日の大半を森や小川で過ごし、そこに住まう動植物について多くのことを学んでいった。友達との付き合いよりも、社会的な成功に対する野

心よりも、知的な野心と自身に対する価値観を大切にしよう母親から教育された。高校を卒業後、ペンシルバニア女子大学に入学し、学生新聞の部員になった。作家志望の彼女は英文学を専攻するが、2学年が終わる頃に生物学に夢中になった。最終的に専攻を動物学に変更した。最上級生になったとき、科学クラブの会長に選ばれた⁸⁾。

1928年に大学卒業後、動物学の修士号を獲得する為ジョーンズ・ホプキンス大学に入学した。夏期研修で訪れたマサチューセッツにあるウッズホール海洋生物研究所での日々は、『われらをめぐる海』の土台となる。大学在学中から様々な刊行物に詩を投稿し続けるが功を奏せず、最初の出版は1930年代、漁業関係の散文であった。

そんな中、1935年7月6日、彼女の父が急死した。あとに残されたカーソンは、自分と母の為に仕事を見つけなければならなかった。幸いなことにワシントンの漁業局で、放送の原稿を書く仕事に就くことができた。翌年の1936年、姉が40歳で亡くなりマジョリーとバージニアという10代の娘たちをひきとった。家庭の事情で、安定した収入を必要とし、「初級水産生物学者」採用の文官試験に最高の成績で合格した。1936年8月17日、正式採用された。放送の仕事も一年続き、その後海に関する一般的な内容のものを書くように要求された。そこで上司は、これは放送には適さないが、出版社に送ってみてはと、提案した。カーソンはその原稿を「アトランティック・マンスリー」に送り、受け入れられたのである。このことは、カーソンの文学上の重要な起点となった。

第2節 レイチェル・カーソンの著作

1937年9月、「アトランティック・マンスリー」に『海の中』という最初の随筆が掲載された。1941年の秋ようやくはじめての著書『潮風の下に』が出版された。初版の序文の中には、生命に対する思想が明確に表現されていた。海の生物達が生命を持っている存在であるということを人々に理解してもらう為、それら生物の行動を人間のそれと対比させる記述を試みた。たとえば、魚が敵を怖がっている、というように人間の心理状態を使って表現した。このような

試みは、人間以外の生命に対する深い愛情の表現であって、人々にすべての生命へ尊敬の念を抱いてほしいと願う思想の表れなのではないかと考えられる。

戦争中の数年間、カーソンは魚類・野生生物局の仕事に忙殺され、本を執筆する時間はほとんどなかった。終戦が近づくにつれ、本を執筆する時間を確保するため、辞職を考え始めた。そのときに書かれた原稿は、自分の身近なところにある自然に対する「驚異の感覚」を持つことのすばらしさを表している。これは後に、『センス・オブ・ワンダー』で垣間見ることができる。カーソンはメイン州ブースベイ近くにあるシープスコット川沿いにある家を借りてそこで自然と親しむ生活を送った。野外活動での調査は、政府刊行物のパンフレットとして、野生生物と自然の美しさを後世に残していく必要性を世に訴えていた。この自然保護への行動は、後の環境保護に影響を与えたと考えられる。

1951年7月2日、『われらをめぐる海』が発行され、ベストセラーになった。

第1章の「母なる海」では、「あらゆる生物や人類の血管の中に流れている体液は海水に含まれる成分とほぼ同じものである。」と記されている。「遠い祖先たちが単細胞から多細胞の生物へと進化し、はじめて体内に循環系が生まれたときから、私たちの遺産であり、その体内を流れる液体とは、たんに当時の海水にほかならない。」同様に、「骨の中の成分はカンブリア時代の海岸から受け継いだものである。」と記されている。カーソンは「生命の誕生は海からはじまり、私たち人間も子宮という海の中で生活のスタートを切る」と記されている⁹⁾。人は海辺に立ったとき、自らの起源をそれとなく見渡している。

人間は母なる海を陸地のように簡単には征服できない。人間は自ら作った人工物に囲まれていると、地球という水の惑星の真実や、自分達の瞬間にしか過ぎない存在のはかなさを時に忘れてしまうことがある。人間の住む地球は水の世界であり、地球を支配するものはこの惑星を一面に覆っている海なのである。人間は潮汐の動きですらコントロール不可能で、征服できないのである。陸地は海の中のほんの一部でしかもそれは、海の表面にほんのわずかな時間に宿を借りている土地に過ぎないと、彼女は自然の持つ力について語っている¹⁰⁾。

鳥々で長い年月をかけ進化してきた動植物は、独特で貴重な存在である。人間はこれらを自然がもたらしたかけがいのない財産として取り扱うべきである。

生命の連鎖反応に無知で、次に何が起こるのか予想できない人間は歴史からその罪を学ぶべきであると自然を保護する必要性について訴えている¹¹⁾。

1952年6月、カーソンは10数年の公務員生活にピリオドを打った。『海辺』を執筆するため、野外研究の旅にでたのだった。海岸で観察や採集をしているうちに、生物に影響を及ぼす重要な要因は気候条件や緯度ではなく、地域の環境によるものだということがわかってきた。本の内容は、地域の配置や地質学的な見地から環境がそこに住まう生物に与える影響を明確に示すというものになった。当初の出版計画である素人向けの入門書とはかけ離れたものになってしまったが、『われらをめぐる海』の後編としての性質をもつ本となった。

ベストセラー作家として経済的な成功を収めたカーソンは、1953年、メイン州・サウスポートのシープスコット湾を望む別荘を購入した。海の近くに住むという夢がかなったのであった。海辺について執筆するのに絶好の場所であり早朝から姪のマジョリーとその子ロジャーを連れて、渚に出かけていった。そこでの科学的な真実の発見とカーソンの熱意は、『海辺』という作品の中に、生き生きと描写され1955年に出版されると、ベストセラーとなった。

現存する生物を正しく理解し、かつ将来はどうなっていくかを予測するためには、まず過去を正しく知ることが重要だと説いた。過去から未来へと続く一貫した時の永続性は、カーソンの思想を知る上で重要な意味合いを持つのである。

『海辺』が出版された後、テレビ番組で放映される気象に関するフィルムの手稿を書くことになった。もっとも多く視聴者に問題を提供できる媒体だということもあって、多くの人に自然について感心を持ってもらいたかったため、カーソンはこの仕事をひきうけた。

『ウーマンズ・ホーム・コンパニオン』誌から出版が予定されている、甥のロジャーとの自然体験を語った原稿は後に『センス・オブ・ワンダー』として出版された。その原稿の題名は、「あなたの子供に驚異の眼をみはらせよう」だった。子供にとって自然のすばらしさに驚き感動することは永続的な意義がある、というテーマにもとづいて書かれている。大人の役割は知識を子どもに教えるのではなくて、一緒に自然のすばらしさについて再発見し、ともに感動

することである。自然の持つ偉大な力を感じ取れるような働きかけをすることであると考えられている。

1957年2月、姪のマジョリーが肺炎で亡くなったため、カーソンは甥っ子・ロジャーの母親役を担った。やがて50歳になろうとしていたが、ロジャーを養子に迎えた。そして、88歳の母親とロジャーとの生活のために、ワシントン郊外のシルバー・スプリングに家を購入した。

その合間をぬって、『われらをめぐる海』の子ども向けの編集に明け暮れた。

また、「ホリデー」誌から「アメリカの自然」に関する項目で、海岸にちなんだ短い随筆を依頼された。彼女は昔からの海岸そのままの保存の必要性を訴えるため、その仕事を引き受けた。1958年7月、「たえず変貌するわれらの浜辺」と題された短編が発行された。この本では、あるがままの自然を残すことは自然の働きそのものを知る重要な手がかりとなるというメッセージが、こめられていた。

また、カーソンの取り上げた問題は、殺虫剤の生態系に及ぼす影響についてであった。まだ魚類・野生生物局で働いている時から、当時殺虫剤として使用されていたDDTの安全性について疑問を抱いていたからである。『沈黙の春』が出版される11年前に、「リーダーズ・ダイジェスト」誌にDDTに対する警告の内容を記した手紙を送付したが、当時は同社の関心を引くことができずに終わってしまった。その数年後、その内容は発表された。カーソンは、当時ためらうことなく使用されている殺虫剤によって、生態系のバランスが崩れてしまうのではないかということを懸念していた。1957年、友人のハギンズ夫人から一通の手紙を受け取った。これが『沈黙の春』を書くきっかけとなった。この手紙には、マサチューセッツ州当局が蚊を撲滅する為に、薬剤の空中散布をし、多くの鳥類が犠牲になってしまったと書かれていた。しかも、次回は大量散布が計画されているということだった¹²⁾。

1962年に『沈黙の春』が完成し、同年6月から雑誌「ニュー Yorker」に掲載され、9月には単行本が出版され、全米中に大旋風を巻き起こした¹³⁾。『沈黙の春』が歴史的なものになった大きな要因は、カーソンの正確な科学的知識のみならず、人間の思考の転換を促しそれに成功したからと考えられる。科学

的な知識と真実を追究する真摯な態度と生命に対する深い尊敬の念や道徳観は、『沈黙の春』の中で見事に融合し、人間の将来に警告を発したと考えられる。

春になっても鳥が鳴かないという寓話から始まるこの本は、当時、日常生活で使われていた化学物質を用いた殺虫剤の大量使用の危険性を指摘し、自然の生態系への影響や遺伝子への影響、発ガンの危険性、さらに人類存続の危機、地球存続の危機を警告した。

地球上に生命が誕生するまで何億年という歳月を要しており、生命と環境は互いに影響しあいながら歴史を作り上げてきたと述べられている。いやむしろ、環境のほうが動植物の生態系を作り上げてきたという。それは、化学物質—自然界にもカルシウム・シリカ・銅などの化合物は存在したが長い年月をかけて生命は適応してきたのだった。時間こそが生命と環境の均衡を作り上げてきた構成要素だと考えられている。ところが、人類が誕生し20世紀というわずかな時間に、自然を変えようとする恐ろしい力を人間は手に入れた¹⁴⁾。

土や水、動植物や人間にどういう影響を及ぼすのか不明瞭なまま科学物質を使用し、子供達に安全を保障できるのか、彼女は未来に目を向け警告した。人間に必要なのは、動物個体群や、動物と環境との関係についての知識であって、それを知って始めて生態系のバランスを保てるのだと主張した¹⁵⁾。

1959年の人口統計局の発表では、学童の死因の第1位が癌だと公表された。年齢の幼い子ども達ほど化学物質の影響を受けているとカーソンは嘆いていた。生化学者・ブァールブルグは、以下のように指摘している。放射能や科学発ガン物質が少量ずつ体内に摂取されると細胞の呼吸作用が壊され、エネルギーが奪われ、傷ついた細胞はATPを大量に生産しエネルギーを補足しようと醗酵という変則的な呼吸をするようになる。醗酵という力が呼吸と同じエネルギーを生み出す力を持ったとき、正常な細胞は癌細胞に変化する。このことは長期にわたる化学物質の少量摂取の怖さを物語っている。また、細胞内のミトコンドリアは酸化反応を潤滑に行うためたくさんの酵素を併せ持つ。ところが、化学物質によってこの酵素が破壊されてしまい、結果的に酸化作用をストップさせてしまう。そして正常な働きが出来なくなった細胞は癌化する¹⁶⁾。カーソンは、これらの科学的な資料に基づいた化学物質の危険性について、こう警告し

ている。人類全体からみて、遺伝子はかけがえのない財産であり、私達はそれによって過去・現在・未来へとつながっている。遺伝子はもともと気の遠くなるような長い年月を経て今の姿をしているのだ。ところが現在は、いとも簡単に人工的なものでその姿が変化している。彼女はこれを「現代の脅威」として、遺伝子の突然変異が次世代に変化をもたらす危険性を訴えていた¹⁷⁾。

科学的データに基づいた事実を基に、なぜこのような化学物質が自分達の生活の中に浸透しているのかを分析した。それは、人間がより快適で楽な生活を望んでいること、このような生活様式を維持する経済性が化学薬品を製造させていることである。カーソンは、すべての化学物質を取り除けと主張しているのではない。生活に必要不可欠なものだけで充分であると述べていた。癌研究者の中には、環境中に含有する発癌性物質を極力削減することで、癌発病率も減少すると考えている人が少なくなかった。

自然界は、すべて繋がっている。その相互作用は複雑で体系化されたものである。人間はこの一部である。個体群は、生態学者が環境抵抗とよんでいるものによって制御されており生命の誕生から今日までバランスを保ち続けてきたのである¹⁸⁾。ところが、人間はこのバランスを崩す力を持ってしまったのだ。私達人間は、ある昆虫を殺傷したあとに、それらがある害虫の天敵で、その働きが環境抵抗だったのだと気づくのである。カーソンは、効果的な害虫防御は人間が作る科学物質ではなくて自然だと強調している。さらに人間の作った化学物質入りの殺虫剤は、すべての昆虫を殺傷してしまい、それが環境抵抗のバランスを崩し、ある種が異常発生する原因になると訴えている。自然からの逆襲を前に私達は認識不足を改めて、別の道を選択する余地が残されていると、提案している。今の科学的な方法よりも環境抵抗を生かした方法を求めようと語っている。それは人間が自然を支配するのではなくて、地球に住む生物達との共有を提案していたからである¹⁹⁾。

『沈黙の春』を巡り、カーソンと企業政府らと間に農薬に対する論争が巻き起こったが、当時の大統領・ケネディは科学顧問にその全貌を検討し報告するよう指示した。大統領科学諮問委員会の科学技術特別委員会は、農薬委員を設立し1963年5月15日に「農薬の使用」という報告書を公表した。この中で、委

員会は農薬会社や農務省を批判し、国民に農薬の価値や毒性双方の情報を提供するように報告した。カーソンに対しては、『沈黙の春』で、農薬の毒性についての知識を広く一般市民に知らせたということでその功績を称えた²⁰⁾。農薬会社らの実証主義すなわち危険が確かめられない限り使用しても差し支えないとする態度より、カーソンの使用前に安全性を確かめるべきだとする主張が公式に認められたのである。この報告書は、本質的な論題を確証しただけでなく、法律の規制にも影響を与えた。

『沈黙の春』は、アメリカ全土にとどまらず海外でも注目を浴びた。1963年に思想と理念を世に広く伝えた功績を称えられ、シュバイツァー・メダルが与えられた。その後、カーソンの思想は環境問題に関する重要な位置づけを示すことになった。

カーソンはその後、様々な賞を受賞するが、1964年4月14日、ワシントン郊外のシルバー・スプリングで帰らぬ人となった。56歳の生涯であった。

死後1年経った1965年に、メイン州でロジャーとの自然のふれあいを通しての体験を綴った『センス・オブ・ワンダー』が友人達によって発行された。この本は、1956年に、「あなたの子どもに驚異の目をみはらせよう」という題でウーマンズ・コンパニオンに掲載されていたエッセイをもとに作られたものである。カーソンは『沈黙の春』を完成した後、自分にはもう時間があまり残されていないことを悟り、最後の仕事としてこの本の完成に力をそそいでいたのであったが、志半ばで帰らぬ人となった。友人達は、その夢を果たそうとこの本を出版し、後にロジャーにこの本を贈った²¹⁾。

『センス・オブ・ワンダー』の中で、子どもと共に自然の中に出かけ、一緒に感動する感性を持つことの重要性を説いた。それは何も色々な動植物の名前を教えることではなくて、自然の持つ不思議な色や匂いといった感触を、五感を開き感じることを生涯忘れることなく持ち続けようと語っていた。カーソンのいうこの「感性」は、大人がともすると陥ってしまう人工物への執着に対するかわらぬ解毒剤になると語っていた²²⁾。カーソンは子ども達の感性の中に未来を期待していた。やわらかい感受性を持った子ども達に、知識だけを詰め込むのは彼ら自身の「なぜ？」と不思議に思う気持ちをなくしてしまうのではな

いかと考へ、子ども自身が自ら知りたいたいと思ふ道を周囲の大人が切りひらいてやることのほうがどんなに大切かと投げかけている²³⁾。

人間はまだ自然のすべてを知り尽くしているわけではない。渡り鳥や潮の満干の正確さなど自然の持つ偉大な力に「人間を超えた存在を認識し、おそれ、驚嘆する感性をはぐくみ強めていくこと」には永遠に続く重要な意味を持っていると考へていた²⁴⁾。

第3節 カーソンの思想

前節でのカーソンの著作を通してその思想について、考へる。

幼少のころ、母親との自然の触れ合いから影響を受けて成長してきた。その結果、生物学者となり、作家となった。著者には海にちなんだ供述が多く、生命の持つ無限の価値の重みを強調している。海の持つ現在尚も計測不可能な偉大な力のもとでは、個々の生物の短い一生は、そこで終わってしまうのではなく、大パノラマの中のほんの一場面であると述べている。そしてこの自然の持つ永遠のリフレインは、人類が誕生するはるか彼方から絶えることなく続いてきた。人間やその営みがいかににはかなく一時的なものに過ぎないかを知っていただけではなく、人間以外の生物にも尊敬の念を抱いていた。

実際に研究で採集した生物を注意深く元の場所に戻す作業を怠りはしなかった。著作の中で、人間に人間以外の生命への関心とそれに対する尊敬の念を抱いてほしいという願いが込められていた。また、それは自然と人間との関係に目を向けてほしいと思う願いもこめられていた。カーソンは、生物学者として真実の追究を怠らなかつた。自然の持つバランスや生態系を破壊する力を20世紀に持った人類に対し、収集されたデータを用いて科学的に分析しながら、自分達の生活向上や利便性の追求によって自然への影響を説明し、発想の転換を促した。

それは、自然を征服し、人間中心に世界を支配するという発想から、「自然との共存」を通して、未来のためにどう地球とかがわればよいのかを考へ、破壊へのスピードを少しでも遅くする考へを持とうと訴へていたのである²⁵⁾。地

球に住まう同じ生命あるものとして、人間以外の生命にも尊敬の念を抱き自然と共存していこうという思想は、シュバイツァーの影響を強く受けている。

シュバイツァーの「生命への畏敬」という思想は、彼がキス司祭に当てた手紙の中で「現代が陥る恐れのある非人間性から現代を助け出すべきもの」として、地球が平和であり続けるために重要なものであると語られている²⁶⁾。

第4節 環境保護におけるカーソンの位置

人類が誕生し環境に適応し生きていくために、自然を取り入れながら様々な工夫が施されてきた。18世紀に入りイギリスで産業革命が起こり、19世紀に入ると工業化が進むにつれて自然破壊が進み、人間の健康を損なう事象も出てきた。そこで人間の利益を優先するために、自然を保護しようという思想が出現したのである²⁷⁾。

ちょうどそのころ、アメリカ開拓が始まった。当時のアメリカはイギリスとは違って自然を保護するという認識はまだなかった。広大な土地という地理的な要素もあってアメリカは進歩し成長していくためには、自然を切り開いていくという思想しか持ち合わせていなかったのであろう。アメリカでようやく自然保護の動きが見られたのは、人間中心主義による国立公園の建設がきっかけであった。これらは、人々に猟などの娯楽の提供を目的に作られた。その後1890年代にイギリスでは、ソローを世に広く知らせたヘンリー・ソールトによる「人道主義者連盟」を、アメリカでは大自然を探求し続けたジョン・ミューアによる「シェラ・クラブ」が創設された。

ソローは、「アメリカの精神的自立」を説いたエマソンの弟子で、彼らは超絶主義と呼ばれ、自然に傾斜していった。カーソンは、床に着く前のお気に入りの一冊として、このソローの本を愛読していたという²⁸⁾。

1905年、市民運動の一端であった自然保護活動は、オーデュボン協会の設立によって、その活動のプロが誕生した。子ども達に野鳥のすばらしさについて教えたことがきっかけで協会は大きく成長していった。現在、レイチェル・カーソン協会はこのオーデュボン協会内にある。

1908年、飲料水不足から自然を守るのかダムを建設するかで論争が起きた。いわゆるヘッチヘッチー論争である。アメリカの自然保護運動が国民の問題として初めて取り上げられたのである²⁹⁾。

1950年、国家記念物にあるエコ・パーク内にダムを建設する方針が持ち出された。ヘッチヘッチーの失敗を繰り返さないためにと、いわゆるエコ・パーク論争が勃発した。そして1956年にコロラド川・開発事業法が成立し、国立公園や国家記念物内には、ダムが建設できないようになった。この法は、後にウィルダネス・アクト（原生自然法）につながる成果を上げることが出来た。

その後、アメリカの市民運動は大きく発展し、市民団体の合併や連合が行われ、自然保護団体の活動はさらに活発化していくのである。その背景には、「生態学の発展と共に人間と自然との関係を真摯に見つめる」態度があったといえよう³⁰⁾。

生態学（エコロジー）という共同体の倫理に野生生物生態学者のアルド・レオポルドは、1930年代に環境倫理の枠組みを見て取った³¹⁾。それまでの人間中心主義から、地球という共同体の中で自然の一部である人間のとるべき行動範囲はどうあるべきかを提唱したのである。彼は生態学の見地から、「大地の倫理」を導き出している。それは地球という大地とそれに住まう人間や動植物との関係についての倫理であり、人間は自然界の一部であって、地球上の一員である以上、その行動はおのずと制限されるべきだと説いている。人間からの立場で自然をとらえる従来の考えを批判し、自然といかに調和していくかという考えを人々は受け入れていくようになる。

6年の論争の末、アメリカは自然を破壊しすぎていたとして、開発に関してはより慎重になるべきで「あるがままの自然」を残そうという結論に達した。その後、「オーデュボン協会」「シェラ・クラブ」「ウィルダネス協会」などの、アメリカの環境保護団体が設立された³²⁾。

そして、レイチェル・カーソンの登場である。カーソンは生態学の発達と共に、科学的データを用いて1962年『沈黙の春』を世に送り出し、当時のアメリカの人々がもっていた人間中心の思想から、「自然との共存」へと思想の転換を促した人物であった。『潮風の下で』『われらをめぐる海』や『海辺』など

それらの著書の中で、海を中心とした大自然の持つコントロール不可能な偉大な力について述べ、人間はその大自然の中のほんの一部の存在であると語っている。海を軸とした生命の共同体に対し、尊敬の念を抱いていたのだった。

カーソンは、当時 DDT として広く使用されていた人間が発明した化学物質・殺虫剤に強い疑念を抱いていた。その薬を使用する人間の意識の中に、人間中心思想を垣間見たのである。すなわち人間にとって有益かどうかという視点で、人間以外の生物の生命が明暗を分けられてしまうのである。

『沈黙の春』の中で、殺虫剤の使用は人間にとって無害の生物まで死滅し、生態系全体から見て食物連鎖の頂点にいる人間自身の健康にも被害を生じさせ、子孫存続の危機にまで影響が及ぶと訴えた。昆虫に向けたはずの薬物は私達の住まう地球や自分達人間に向けられ、環境が破壊されているのだと強調している。この本の中で、当時の人々の人間中心思想に訴えかけた表現を数多く選択している。すなわち、自分達のしていることが結局は自分達に降りかかってくるといったように、人間がどうになってしまうのかという視点で描かれている。それは当時の人々を説得させるのに有効な手段であった。

その上でこの世で生きていくのに必要なのは、地球を他の生物たちと分かち合う事だと述べている。分かち合うのに必要なもの—それは、人間が中心となって自然を搾取し、その中から分け与えるという人間中心思想から脱却し、人間は自然の一部であるがゆえ、あらゆる生命あるものと共に地球に住まうという「謙虚さ」をもつことだと述べている。

カーソンは、生態系の論理を人間の道徳的倫理の中に取り入れた人物であったといえよう。人びとの意識を変えたといわれる画期的なこの本は、1970年4月に公害問題を含む環境保護を訴える大規模なデモ「アース・デイ」へとつながっていくのである。

アース・デイの成功は、その社会的背景によるところが大きい。ヒッピー達や反戦家、人権運動家たちが結集し、流れ込んできたのである。ヒッピーは、反都会、反物質の思想のもと環境問題に立ち上がった。アメリカでは、アース・デイの発端から、1970年に大気清浄法、1972年には水質公害法が成立され

た。また、カナダでは1971年に反核運動をスタートとして「グリーン・ピース」が設立されるなど、環境保護は大きな広がりを見せた。

地球を破滅へとすすむ現代社会の生活様式を見直すきっかけとして、そのあり方にブレーキをかけ、別の道を歩むことを提案したカーソンの「自然との共存」という思想は、現代の環境倫理学における基礎を確立したとして評価されるのではないかと考えられる。

第4章 A 保育園とカーソンの接点

第1節 保育理念とカーソンの思想との共通点

保育園の理念は、柔らかい感受性をもった子どもたちが自ら持っている豊かな感受性を、豊かな自然体験を通して開花させる。そして、子ども自身が体験を通し自分自身が心を動かし学んだこと、それが人間形成の基礎となり、子ども達の一生を貫いていく大きな力となって、生きていくための力となっていく。その生きていく力は、心を豊かに耕していくことが出来る。現代という自然と遊離しているこの時代に、可能性豊かな子ども達を自然の中に解き放ち、季節を感じ親しむことが出来、人や物にも優しさを向けられる心を育てていく一である³³⁾。

では、保育理念とカーソンの「自然との共存」という思想を「センス・オブ・ワンダー」の視点から、その接点を探る。

豊かな感受性をもった子どもたちが、体験を通し自身の心を動かし学ぶこと、センス・オブ・ワンダー、すなわち、普遍の法則をもつ自然に、生まれながらに備わっている五感を通して直接触れる（見たり、匂いをかいだり、聞いたり、触ったり、食べたり）時、柔らかい感性を持った子どもは、自然の持つ偉大な力に対する恐れおののき、あるいは驚嘆の感情がみなぎる。そしてその不思議さに対し、なぜ？という疑問が生じ、それについて想像力がかきたてられ、もっと知りたいと思うようになる。それは自然の中で開花させることが出来る。

直接体験を数多く経験した子ども達は、不思議に思うことがたくさんあって、それらについて周囲の大人に質問を投げかける。そうすることによって意志と

行動力が高められ想像力が膨らんでいく。そして、自分の言葉や絵などの表現を通して、周囲に自分の感じたことを投げかける。周囲の大人は、子どもに出来るだけ直接体験できるような環境を設定し、子どもと一緒に体験し、その体験を通して不思議さに目を見張る感性「センス・オブ・ワンダー」を持ち続け、子ども達の「なぜ？」と対話する態度を持ち続けていく必要がある。

あるがままのその時々自分の感情をさらけ出すことが出来、新しく出会ったことに対し時にどうすればよいのか迷いが生じた際に、常に周囲の大人が助け舟を出し、あるがままの今の自分を全面的に受け入れられた、すなわち愛情を感じた子どもは、自分の存在を認めることが出来、自信を持つ。そして、生きる喜びを感じる。生きていく自分を大切に思うことの出来る子どもは、自分以外の全てのものに対しても、同じような感情を持つことが出来る。様々な感情（喜びも悲しみも怒りも全て）を、充分にありのまま素直に表現できた子どもは、自分の内部と、自分を取りまく社会という外部とのつながりの間に信頼関係を結ぶことが出来る。その力は、人間形成の大きな基礎となり、揺ぎ無い土台として一生を貫いて宇宙の中の地球で生きていく大きな力そのものになる³⁴⁾。

—保育園とカーソンの接点はここに見られる。

センス・オブ・ワンダーをはぐくむことは、永続的で意義深い何かがあるとのカーソンの考えをもとに保育園は、自然とのかかわりの中で、子ども達は、内面的な喜びや満足感をたくさん味わうことが出来、それがこれからの自分の生きていく人生について、一生を通じて、新たな喜びを発見する道につながっていくと考え、保育理念としている。

次に、自然と遊離しているこの時代、どのように子どもを自然の中に解き放つことが出来るか。

カーソンは、それはたとえ都会の真ん中に住んでいても、台所においてある小さな植木鉢でさえも自然を感じる事が出来ると語っている。その神秘に、子どもと一緒に触れる機会を作るのは、一緒にいる大人の役割だという。

物事を抽象的に消化する能力が備わっていないうちは、子どもと自然の中に一緒に行き、子どもが知りたがるような道を切りひらくことが大切であるとカーソンは考えた³⁵⁾。

感受性を豊かに耕す最も有効な方法は、自然と触れ合いなのである。地球が誕生し、生命が生まれ、人類が誕生するまで、気の遠くなるような年月を経ている。自然の一部である私達は、自然にもっとも近い子ども達を、その中に放ち、自然の持つ不思議さに、感動する心を持ち続けられるよう、働きかけていく役割を担っているのではないか。

自分の心で感じた様々な思いは、想像力と共にさらに膨れ上がり、さらに心を動かす大きな力となっていくのである。意志と行動力、想像力を十分に働かせた子どもは、心を動かして感じた事柄をその不思議さをもっと知りたいと思うようになる。そして、それは子どもが成長した時、物事を正しく理解し、目に見える・見えないにかかわらず、真実はなにかを追究していく思考という力となると考えられる。

自然の中に解き放たれると、人間はその一部であることを認識していく。人間は、万物の頂点にいても、自然の征服者でもない。そう認識した時、人は自分以外の人や物にも、優しい目を向けることが出来るのではないか。そして、地球に住まう様々な生命とどう共存していくのかを考えていくことが出来るのではないかと考える。

周りにいる大人たちの役割—それは、子どもたち一人一人が、個性豊かに健やかに成長し人間だけでなく他の生命と仲間として共存していけるよう、暖かく愛情深く見守り、最高の環境作りを提供する努力を惜しまないこと—である。

保育理念とカーソンの思想の接点は、このように「センス・オブ・ワンダー」を持つことの重要性にもとづいて、「人間が生きていくのに、必要なもの。」を明示していると考えられる。

私たちは次世代のため持続可能な社会を目指し地球が直面している問題と向き合っていかななくてはならない。そのために自分にまず出来ることから始めていく姿勢を持つことが、大切なのではないか。そして、その小さな想いを子ど

も達にも伝えられたら、豊かさの持つ意味はなんなのかをもう一度考えるきっかけになるのではないかと思われる。

第2節 保育園でのカーソンの思想の実践

保育園で、これらの思想がどのように実践されているのか、一事例として取り上げる。

自然や仲間との触れ合いという直接体験を通して、不思議さに驚異の目を向ける「センス・オブ・ワンダー」を育てる保育が、展開されている。それは、四季折々の年間行事や毎日の保育で、園庭や保育室をはじめいたるところで見受けられる。

現在、保育園は移転したが、旧園には、様々な木々が植えられていた。創立以来、植樹し続け、その数は、数十種に至る。

園庭の周囲には、子ども達が、水遊びできるように小川が流れているが、その水の噴出し口の後ろにケヤキが、その次にはかしくみの木があって、クッキーの材料になっていた。大王松の葉は子ども達が「ラーメン」と呼んでおり、焚き火の時に使っていた。南側には、なつめの木がりんごに似た甘い実をつけ、その下には、季節と共に色とりどりの葉をつけるもみじがあった。ほかに、たくさんどんぐりを落としてくれるクヌギの木によじのぼっている藤や、石崖を下りる際に助けてくれるケヤキの木。クリスマス欠かせないもみの木、その新芽は次の季節に次々と枝を広げることが出来るように、真ん中の部分だけを摘んで、子ども達がおままごとをする時に使っていた。うこっけい小屋のそばには、楠、スジダイ、シイがあった。その裏には、ムクドリがその実を全部食べてしまうというピラカンサ、子ども達がぐるぐる回って遊ぶ回転塔そばの柏餅の木、そして、乳児クラスのサンルームの中にヒマラヤ杉が生えていた。園庭の真ん中には、こいのぼりの季節にピンクの花を咲かせるカイドウが植えられていた。

子ども達は、卒園記念として毎年記念樹を行っていた。

初夏には、口の周りを紫にした子ども達をたくさん見ることの出来る桑の実を成らす桑の木。6月下旬に風に吹かれ熟した実を落とす杏、もちろんこれも

子ども達の胃袋の中へ入った。園舎2階にある年長6歳児クラスの外階段近くにある、はなみずき。年中5歳児クラス、サンデッキ前にある木登りを楽しむけやき。それから、りんごの木。カリヨンを囲むように茂っているノンゼンカズラ。その幹を登れた子どもには、空飛ぶ船という乗り物や、ロープウェイという冒険遊びの場になる柳の木。他にやまぼうし、とちの木、きんかんなどが植えられていた。

周囲の大人・保育者は日々の保育を通して、子ども達に、周囲にある自然の恵みについて気づかせていた³⁶⁾。

縦割り保育を実施している保育園では、年長児は年少児を助けながらこれらの自然とのかかわりを持つことが出来た。年長児は、自分より小さい子を抱っこしたりしながら、豊かな自然に触れたり、匂いを嗅いだりしていた。また実を摘んできて分け合い食べて、感覚を全開にして、これらの木々とかかわり、楽しい思い出をしっかりと年輪のように心の中に刻んでいくのだった。

先ほども少し触れたが、園には、様々な手作りの遊具があった。シュタイナー教育を実践している保育園や幼稚園でもそうだが、そのほとんどが本物を使ったすなわち天然の素材の持ち味を生かしたものだった。A保育園では、例えば、木で出来たジャングルジム、スモーランド、自由に木材や工具を使うことの出来る木工コーナー、木で出来た小屋、縄で作ったロープ・ウェイ、岩で出来た石崖、お昼寝したりや絵本を眺めたり、食事を楽しんだりする木製のサンデッキ、夏の間、園庭の真ん中に水を張って池を作り、子ども達が泥だらけになって遊ぶ「じゃぶじゃぶ池」等があった。子ども達は、その年齢や成長に応じてルールを守りながら、色んな遊具に触れ、挑戦していた。高い所によじ登るのに滑らないようにする為や、砂や水・草木の感触を直接楽しむために、ほとんどの子どもは、裸足で一日の大半を過ごす。また、制服もなく、毎日泥だらけになって遊んだ。「手と足は、突き出た大脳」といわれているように、子ども達は、直接体験することによって、感覚が刺激され、全身の五感を通して物事を感じる事が出来るのだ。

園には、たくさんの動物達が住んでいた。放し飼いの犬、うこっけいに山羊、ウサギ、アヒル、亀、熱帯魚など、人間以外の動物を身近に感じ、その世話を

通して、生き物の命の大切さ、尊厳さ、それらのものとのかわり方を体験していく。また、様々な季節に応じた野菜作りを行っていた。食物がどのようにして種から成長しその実が得られるのか、その世話を通して、自分達の食生活がどのように成り立っているのかを体験していた。

さらに、園バスを使って、様々な地域へ出かけていた。雑木林を歩いてみたり、小高い丘を登ってみたり、池にいる鴨や様々な鳥をみたりと、子ども達に地域の身近な自然に親しみ、それらを感じる事の出来る場を提供していた。また、年長児は、登山や海辺でのキャンプを通して、不変の法則を持つ偉大な大自然のもつ力に触れる機会を持つ。ある卒園生はその母親に、「山の中で見た朝日が忘れられない。」と言ったという。そして、兄であるその子は、弟の登山の際、「あの朝日を絶対にみなくちゃだめだよ。」と母親にぜひ参加するよう勧めたそうである。

これら行事にかかわる教職員や父母の負担は相当なものである。保育園という性格上、父母の就労の合間をぬっての準備は時間的にも経済的にも小さくはない。自然を相手に天候も考慮しながらの野外活動は、その意義を十分に認識し賛同できなければ、参加できるたぐいのものではない。安全対策もしかりである。自然の持つ力は、人間には制御不可能であることは、前章でも述べたとおりである。決して楽しいことばかりではないことを、念頭に入れた上での活動でなければならない。何より子ども達の安全確保が第一であり、周囲の大人達の用意周到な環境設定があってこそ、これらの自然に触れる思想の実践は効をなすのである。自然を相手にするという事は、それだけ労力も大きいと考えられる。

実際、悪天候での登山を杞憂し、参加を見送る父兄もいると園長は言う。それは、それでその父兄の選択なのだ。そこまでして自然を感じさせなくても、よいと考える人もいるし自然の力の恐ろしさをも含め、体全体でそれを子どもに感じさせたいと考える人もいる。

どういう環境を設定するかは個々人の考えに基づいている。カーソンもメイン州の岩場の多い夜の海岸で懐中電灯を照らして、幼子連れて石の階段を

下って海に向かっていったとその著書に描かれているが、子どもに自然をどのように感じさせるのかは、大人の考えによるところが大きいと考えられる。

保育園とカーソンを結ぶものは、その他に環境問題が挙げられる。科学の発達によって様々な製品が開発され、自然を開拓し、それらによって人間は生活の質を向上させ、快適で安楽な日常生活を営むことが出来た。しかし、それらによって地球の生態系のバランスが崩れだした。カーソンのように破壊への道を猛スピードで突き進むのか、あるいは別の道を進むのか。人類にはまだ選択の余地が残されている。私たちに出来ること、それは、自然は単に人間が搾取する存在ではなく、他の生命と共存する場であって、人間の生活様式がこのままでいいのかを常に考え、どのようにバランスをとっていくかを考えることである。園での生活は常にそれらが問われると考えられる³⁷⁾。

保育園では、自然界には存在しなかった物質＝人間が作った化学物質をできるだけ使わない努力をしていた。その代表が、プラスチック製品を極力避けるということである。たとえ体内に入る量がわずかであっても、それが与える影響について完全に安全だといえるデータは、いまだ存在していない。人体にどのような作用を及ぼすのか明確でないものの使用は、極力避けるべきであるとのカーソンの科学的根拠に基づいた考え方を園では採用していた。そのため、遊具はもちろんのこと、食器類に至るまで、天然素材を選んでいった。自然界は、絶えず循環しそのサイクルを保っていたが、化学物質の登場によって様子が一変してしまったのは、前章で述べた通りである。地球を存続させるために、できるだけ自然界に還元できない、分解できない物質の使用を避けている。なぜなら現在、分解不可能な物品類はゴミ問題として、深刻な社会問題となっているからである。園内にあるものは、天然素材のものがほとんどで、リユースビンを使用するなど、リサイクルに努め、極力物を捨てる回数を減らしていた。

このような保育園でのカリキュラムによって得られる子ども達にとっての「よい作用」は、どうやって確かめられるか。それは、子ども達の表情や、自分自身の心を動かした後に発せられる「つぶやき」から、得られるのではないか。

七夕での短冊作りでは、子ども達の「願い」「意志」が、子ども自身の言葉で表される。「七夕の日にお空に行って大きな星をみたい。」「皆と海に行きた

い。」「ターザンプランコに乗って遊びたい。」など。「たなばたさま」を歌い、皆の願いは笹の葉に託され、近くの川まで皆で運び、橋の上から笹流しをして川から海、海から天へと流れ届くことを祈ったのだった。便利で機械に囲まれた生活を送っていても、目には見えないけれど信じることの出来る心を持つことは、カーソンのいう意義深いものがあると考えられる。

夏になると、園庭の中に通称「じゃぶじゃぶ池」が父親達の手によって作られる。その中にはジャングルジムやクレーンまで設置され、子ども達は、下着一枚になって大歓声を巻き起こし、水遊びを堪能する。保育者が「もうお昼ご飯の時間ですよ。」と声をかけても最後まで池にいた子は「ご飯食べたら、またじゃぶじゃぶ池入る。」とつぶやいた。

秋になると、園外保育の時に拾ってきたマテバシイどんぐりという、普通のどんぐりよりも大きなものを子ども達は園に持ち帰ってくる。「食べられるどんぐり」ということで、皆夢中で拾ってくる。クラスの中で、茹でてつぶして片栗粉と水を混ぜて、子ども達はお団子を作って自宅に持ち帰った。「このどんぐり、たべられるんだよ。おだんごにしたの。はい、おみやげ。甘くておいしかった。」「え？どんぐりって食べられるの？」「うん、食べちゃった。」子どもは直接体験したことを家庭でも自分の感じたとおりに表現していた。

第3節 父母の会の活動における子ども達とのかかわり

この園の特徴である父母の会の活動は、園の保育内容と関連している。第2章で活動の概要について紹介したので、ここでは、事例を述べる。

環境問題に関係するが、子ども達が戸外で活動する際、紫外線に注意が必要である。近年、フロンガスの影響により紫外線を成層圏で吸収する働きをしていたオゾン層に穴があき、現存する地球上の生命、特に幼弱な細胞、子ども達の遺伝子に大きな損傷を与える紫外線の中のUV-Bを浴びることになってしまい、専門家らがその対策を講じるようになった³⁸⁾。父母の会「安全食品委員会」は、紫外線に関する専門家を園に呼んで、講演会を開催し、委員会便りを発行して、紫外線の害に対する知識の普及に努めた。その結果、園庭には、日陰を作る木々のほかに、大きなサンシェードを張り巡らせ、直射日光から子ども達

を守ることが出来るようになった。外遊びをする時には、子ども達に帽子の着用を促し、海では長袖の着用を促すなど、出来るだけ紫外線を浴びないようにする工夫がなされている³⁹⁾。UV-B の遺伝子へ悪影響を軽減させるため、幼弱な細胞を持つ子ども達にまで、世界規模でフロン対策が進められている。子どもを守る政府の対応の例として、わが国では母子手帳から、「日光浴」という欄が削除された⁴⁰⁾。

父母の会ではその他、有害な化学物質を出来るだけ子ども達から遠ざけるため、無農薬や有機農法で作られた食品・日用品の販売、個人購入向けのパンフレットの案内、園庭の水道口に浄水器を設置するなど、生活に密着した活動を展開している。

カーソンがいうように、有害物質は人体に性急に影響が現れるわけではなく、むしろ時間をかけて慢性的に、その影響が現れてくるゆえに、実感がわきにくいことも否めないであろう。そこが、行動を選択する際に分かれ道になっているとはいえないだろうか。『沈黙の春』で、カーソンが彼女の意見に反対する科学者・専門家達と論争は、今も私たちに日常生活で何を選択するのかを投げかけていると考えられる。

父母の会のバザー委員会、ボランティア委員会では地球に住まう自分以外の人のために自分出来ることは何なのか、自分に与えられている使命はなんなのかを常に考え、相手のために何かすることが生きていくための本性であることを知っている人にとって、人のために何かをすることは、生きていくための喜びそのものなのである。「分かち合うことのできる」精神をもち、活動をしていると考えられる。

父母の会の活動は、バザーという保育園最大の行事を通して、大人も子供も人とのつながりの大切さを体得していくのである。

バザーの大きなテーマは「小さな力も 大きな愛に」である。保育園のバザーはOG・OBも参加する。卒園後、人とのつながりを保ち続けている。

第5章 子どもへとつなぐ自然との共存を目指す取り組みへの考察

カーソンの「自然との共存」をもとにした保育園での豊かな自然体験は、子ども達が成長して行く過程で何をもたらすのか。人間が生きていくために必要なものは何か。

人類は、物質的な豊かさを追求するあまり、地球規模で環境の変化が生じている。カーソンは、人々がその生活様式にブレーキをかけ、別の道を進む選択の余地が残されていること、子ども達に「自然との共存」「生命を大切にする」思想をもつことを期待した。

保育園では、日々の保育を通して豊かな自然体験や仲間と触れ合う機会を子ども達にもたらししていた。自然と触れ合う中で、子どもの内にもともと持っている自然の持つ驚異の力に恐れおののき、感嘆する感性「センス・オブ・ワンダー」が育まれていくと考えられる。子どもは成長するにつれ、自然は誰も変えることの出来ない普遍的な法則・真理を持つことを知る。そして人間は、自然の一部であることを知る。

紫外線対策が図られていたことは、幼弱な細胞への影響を考慮し、子どもが仲間と共に安全に戸外で遊べる環境を保証するために、必要不可欠な大人の役割であると考えられる。また、食器を含め摂取するものに留意し、なるだけ化学物質が体内に侵入するのを遠ざけることも、子どもの心身の健康保持に欠かせない配慮だと考えられる。

周りにいる大人たちの役割—それは、子どもたち一人一人が、個性豊かに健やかに成長し人間だけでなく他の生命と仲間として共存していけるよう、暖かく愛情深く見守り、最高の環境作りを提供する努力を惜しまないこと—であると考えられる。

「生きていく力」とは、子ども達が成長して行く過程で自然との対話を通して生きている喜びを発見し、真実は何かを追及することができること、物質的に満足するのではなく、他者とのつながりを持つことで、より善く生きていこうとする力であると考えられる。それは、精神的な豊かさにつながっていくのではないかと考えられる。

太古に、海から生命が誕生し、気の遠くなるような歳月を経てあらゆる生命体は環境に適応し続け、淘汰され、現存している。そして、生物は子孫を残し死に絶え、また海に戻っていく。周囲の大人は、次世代の子ども達に自然との共存を通して、生命あるものは永遠に続くリフレインを繰り返していることを伝えていく役目を担っていると考えられる。

それゆえ、人間が生きていくために必要なことは、自分以外のものを理解し、尊重しあい謙虚さを失わない「共存」の精神を持つことではないかと考えられる。あらゆる生命を大切に、未来へと持続可能なよりよい社会の構築への可能性を広げることが必要ではないかと考えられる。

研究にご協力くださったすべての皆様に感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 「道徳観や正義感養う 文科省調査」『日本経済新聞』夕刊、2002年8月16日、11ページ。
- 2) 社会福祉法人ともに生きる会(2019) 入園パンフレット 川和保育園案内
- 3) レイチェル・カーソン『センス・オブ・ワンダー』上遠恵子訳、新潮社、2001年、50ページ。
- 4) 同上、50ページ。
- 5) 川和保育園第63回生卒業記念文集ぎゅっとにぎって、2005年、116-120ページ。
- 6) 佐々木正美『子どもへのまなざし』福音館図書、1998年、314-317ページ。
- 7) ジャン・ジャック・ルソー『エミール』上 今野一雄訳、岩波文庫、2002年、6ページ
- 8) ポール・ブルックス『レイチェル・カーソン』上遠恵子訳、新潮社、2000年、28-33ページ。
- 9) レイチェル・カーソン『われらをめぐる海』日下実男訳、早川書房、1992年、20-21ページ。
- 10) 同上、25ページ。
- 11) 同上、30ページ。
- 12) 前掲書(8) 207-209ページ。
- 13) 前掲書(8) 287ページ。
- 14) レイチェル・カーソン『沈黙の春』青樹梁一訳、新潮社、2001年、22-26ページ。

- 15) 前掲書 (8) 33-41ページ。
- 16) 前掲書 (14), 225-230ページ。
- 17) 同上, 242-245ページ。
- 18) 前掲書 (8), 284ページ。
- 19) 同上, 288ページ。
- 20) 同上, 300ページ。
- 21) レイチェル・カーソン『センス・オブ・ワンダー』上遠恵子訳, 新潮社, 2001年, 56-57ページ。
- 22) 同上, 23ページ
- 23) 同上, 26ページ。
- 24) 同上, 50ページ。
- 25) 原強『「沈黙の春」の世界—レイチェル・カーソンを語り継ぐ』かがわ出版, 1994年, 117ページ。
- 26) H.W.ベール編『生命への畏敬—アルベルト・シュワイツァー書簡集 1905-1965』野村実監修, 曾津伸・松村國隆訳, 新教出版社, 1993年, 262ページ。
- 27) 鬼頭秀一『自然保護を問いなおす—環境倫理とネットワーク』ちくま新書, 1996年, 33ページ。
- 28) 岡島成行『アメリカの環境保護運動』岩波新書, 2002年, 47ページ。
- 29) 同上 92ページ。
- 30) 同上, 124ページ。
- 31) ナッシュ『自然の権利』153ページ。
- 32) 岡島成行『アメリカの環境保護運動』岩波新書, 2002年, 138ページ。
- 33) 前掲書 (2)
- 34) 佐々木正美『子どもへのまなざし』福音館図書, 1998年, 314-317ページ。
- 35) 前掲書 (21), 26-27ページ。
- 36) 川和保育園第63回卒業記念文集 ぎゅっとにぎって, 2005年, 34ページ。
- 37) 「Rachel.C」レイチェル・カーソン日本協会, 協会会報第28号, vol.28, 2001年12月, 45ページ。
- 38) 「母の友」7月号 福音館図書, 2002年10月3日, 28-32ページ。
- 39) 川和保育園父母の会 安全食品委員会 「安全食品だより」2002年4月12日。
- 40) 「子ども白書—人間回復のためのつながり めくもり」草土文化, 2002年版。

保育者養成校における 構成的グループ・エンカウンターの効果検討 ーループリック評価を用いた試みー

倉 持 ころ

要旨

本研究は構成的グループ・エンカウンター（以下、SGE）による効果を検討及び効果の可視化するためにループリック票を作成し検討することを目的とした。保育者養成校の学生33名を対象として、SGE を講義内で実施、振り返り及びループリックの記入を求めた。振り返りの記入においては、SGE のねらいに即した記述が出現した。ループリックにおいては、第1回と第5回の平均値に有意差は見られなかった。一方で、ループリックの平均点を参照するとSGE の進行につれて合計点数の増加が見られた。同じ大学に通う友人や顔見知り、あるいは今後も接触する機会が出てくる者どうしのSGE であっても、相応の効果が表れることが確認されている（水野、2011）ことから、保育者養成校の学生として、SGE を継続することで人間関係の構築と他者理解に繋がると考えられた。今後は、SGE における量的なデータと質的なデータの関連を見ていくことで、個人やワークを行うグループ内のプロセスを検討することも必要であろう。

1. 問題と目的

2020年3月初旬より新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19）感染拡大により全国の小・中・高等学校・特別支援学校が「臨時休校」となった。大学や専門学校においても休校又はオンライン授業、オンラインと対面のハイブ

リッド型授業等の変更を余儀なくされている。3年余りが経過し、2023年5月8日から COVID-19は、感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律（平成10年法律第114号）上の5類感染症に移行されている。2020年から2023年5月にかけて、オンライン授業によって学生が実際に対面してグループワークや話し合い活動を行う機会が減少していると考えられる。また、学校へ登校せず自宅でオンライン授業を行う関係で、対面して人と話す経験が不足しているのではないかと考えられる。

教育現場においては、不登校やいじめ等の学校不適応が社会問題になっており、文部科学省（2022）『令和3年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査』において、不登校の小学生、中学生は、20万人を超えている。この数は、前年度に比べ48,813人増加している。不登校問題やいじめ、非行などの学校不適応状況から児童生徒は学校生活に苦戦していることがわかる。文部科学省（2022）の調査において、大学（短大）、専門学校の学生は、調査対象ではないものの、コロナ禍における対人でのコミュニケーション不足から学校、日常生活に苦戦している可能性が考えられる。特に、保育や教育、福祉職を目指す大学生（短大生）、専門学生においては、日常から学校生活を支援する役割を担う。そのためにも、対人関係における関わり活動や話し合い活動が重要であると考えられる。

児童生徒や学生が、学校における仲間関係を良好にしていくためのグループワークとして「構成的グループエンカウンター（Structured Group Encounter, 以下、SGE）」や「対人関係ゲーム（Social Interaction Games, 以下、SIGs）」がある。SGE は、國分（1992）により提唱され、相互交流の中で人間としての生き方を学習する方法であり、カウンセリングの一手法として育ち、発展してきた心理教育的援助サービスである。また SGE は、主に教育の領域で実践が盛んに行われており、日本の学校で大きな問題になっているいじめ、不登校等の予防のために、また学級集団づくりや仲間づくりのために導入が行われている。鍋田（1991）は、思春期の対人恐怖症や登校拒否児への治療として構成的エンカウンター・グループを用いて効果をあげている。藤田・西川（2002）

は、児童の友達からの受容感が高まり、学校適応感が高まったこと報告している。

SIGs は、田上・内山（1993）の拮抗動作法をベースに、國分（1992）の開発した SGE のエクササイズのやり方を取り入れ、不登校児童生徒の学級復帰や選択性緘黙児への支援から始まった。SIGs は、田上（2003）によって提唱されたものであり、SGE を基礎として学級になじめない子に焦点を当てたプログラムであり、不適応を起こしている子どもが、対人行動を含んだ「遊び」によって、学級に馴染むための援助技法として開発された。大澤・田上（2015）によると人間関係をつくために SIGs を活用する報告が、小中高だけでなく、大学や教育センターから発信されるようになったと述べている。山下・窪田（2017）によると対人関係ゲームは、教育領域で実践されている心理教育的アプローチは、現在数多くあるが、対人関係に焦点を当て効果的に作用することが期待できると述べている。また、SIGs はソーシャルスキルを含んだ遊びで構成されているが、それを意識化させることはない。しかし、その定着を図るためには、スキルの意識化が求められるのではないかと考えると報告している（山下・窪田，2017）。

SGE と SIGs は、理論的背景や目標に違いが見られる。輿・下田（2002）は、SGE と SIGs についてエクササイズと呼ばれるものも、SGE が教室などの比較的狭い空間で行われるのに対し、SIGs は野外などの比較的広い空間で行われ、運動量も多いと述べている。なかでも大きな違いは、SIGs ではシェアリングを必ずしも重視しないという点である。しかし、望ましい人間関係の確立には同様の効果があると認められている（田上，1999）。

本研究では、対人関係における関わり活動や話し合い活動に重点を置き、振り返りでの共有を行うため、SGE による集団活動が相応しいと考え選択する。

SGE は、①インストラクション（活動の目的や方法の説明）、②ウォーミングアップ（取組前の緊張をほぐす、意欲を喚起）、③エクササイズ（心理的成長を意図して作られたグループ体験）、④シェアリング（体験を通して得た感情や思いを共有し、意識化する活動）の順で行われる。特にシェアリングにおいては、体験を通じた感情の共有や意識化を話し合う。

各 SGE 後に、学生が実際にどの程度参加したのかを可視化するため、ルーブリックでの検討が必要である。ルーブリックとは、「学修評価の基準作成方法であり、評価水準である『尺度』と、尺度を満たした場合の『特徴の記述』で構成される（中央教育審議会,2012）。また、2023年12月現在、保育者養成校における SGE に関するルーブリック評価に関する研究はなされていない。そこで本研究の目的は、保育者養成校の学生を対象として SGE を実施し、効果を検討する。また、効果を可視化するためにルーブリック票を作成検討する。

2. 方法

2.1 対象者

保育者養成校の学生

（短期大学：2年生，3年生，専門学校：1年生，合計33名）

2.2 実施時期

2023年9月から10月

2.3 実施方法

SGE を行う授業で実施した。講義内演習時間40分，SGE 概要の説明（10分）→演習（20分）→振り返り（10分）とした。プログラムを実践する約束事項として、「人の意見を否定しない」「人の話を最後まで聞く」の2点をあげ、毎回のSGE説明の際に提示し、確認をした。

SGE のルールの説明では、筆者が見本を見せた。その際、支援の必要なモデルとして視覚的にも提示できるように工夫した。

本研究において実施する SGE 概要を Table1に示す。講義回数5回目にあたる「バンガロー殺人事件」においては、ウォーミングアップを行わないものの、グループごとに自己紹介を行うものとした。

Table1 SGE 概要 (◎：メイン，○：ウォーミングアップ)

| 講義回数 | ゲーム名 | ねらい |
|------|------------------------------------|--|
| 1 | ○後出しジャンケン ○同時ジャンケン ◎いいところ見つけ | 関係性を作るワーク。(1) ワークに慣れること、(2) じゃんけんを通して不安・緊張を軽減し、多くの者と段階的に関わりを深め、仲間づくりの契機とすること、(3) 自分や友だちのいいところを知り、仲間関係の第一段階としての2人1組で交流を行うことをねらいとした。 |
| 2 | ○ラッキーセブン ◎私はわたし | 関係性を作るワーク。(1) 2人1組から集団へ繋がり、緊張をほぐすこと、(2) 他者の知らない一面を見ることができることをねらいとした。 |
| 3 | ○パスディチェン ◎人間コピー機 | 集団活動の楽しさを実感するワーク。(1) 集団としての一体感を感じること、(2) 各グループ内で協力し、目標を達成することをねらいとした。 |
| 4 | ○弟子のジャンケン ◎白雪姫からの相談 | 集団の構造・役割分担を実施するワーク。(1) 少人数から集団の構造・役割分担を体験し、群れを体験すること、(2) 目的を共有し、仲間と力を合わせることをねらいとした。 |
| 5 | ◎バンガロー殺人事件 | 集団の構造・役割分担を実施するワーク。(1) 集団の構造・役割分担を体験し、群れを体験すること、(2) チームを通して自分の役割を果たすようになること、(3) 仲間と助け合いながら目標を達成することをねらいとした。 |

3. 評価方法

3.1 学生の振り返り用紙への記入（自己評価）

SGE ごとに振り返り用紙（自由記述）を実施した。振り返り項目として、「体験にあたり意識したこと」「体験を通して気がついたこと」の記入を求めた。振り返り用紙においては、Microsoft forms を使用した。

3.2 自己評価に関するルーブリックの作成

自己評価に関しては、グループワーク・ルーブリックを作成し、講義ごとに記入し、終了後に、提出を求めた。ルーブリック作成においては、ルーブリックの4つの基本要素である「課題」「評価尺度」「評価観点」「評価基準」の順に作成した（Table2）。作成に当たり、SGE のねらいである「自己理解」, 「他者理解」, 「自己主張」, 「自己受容」, 「信頼体験」, 「感受性」を意識した。評価項目として「傾聴」「参加意欲」「気がついたこと」に分類し作成した。また、項目についての評価は、優（3）点から不可（0）点までの4段階で評価をした。

4. 結果と考察

4.1 学生の振り返り用紙への記入（自己評価）

各ワークについての学生の感想を把握するために Microsoft forms を使用して、「〇〇の体験にあたり意識した事を教えてください。（以下、質問1）」「振り返りとして、〇〇の体験で気がついた事、学べた事を教えてください。（以下、質問2）」の2点を質問し、自由記述で回答を求めた。これらの回答においては、KJ法を援用して分類を行った。分類対象者は、各回のグループワーク参加者とした。

4.2. 各回の振り返りの自由記述のカテゴリー分類の推移

各SGEにおけるカテゴリー分けとして、質問1「自分の言葉に意識」「相手の言葉に意識」「自分の行動を意識」「相手の行動を意識」、質問2「自分の気づき」「相手の気づき」「自分の考え」「相手の考え」のそれぞれ4分類した。分類対象者においては、提出が確認された学生を分類対象とした。

第1回は、分類対象者29名より、質問1、質問2それぞれ29件の回答を得られた。「後出しジャンケン」の質問1においては、「自分の言葉に意識」「相手の言葉に意識」「自分の行動を意識」「相手の行動を意識」の4カテゴリーが抽出された。質問2においては、「自分の気づき」「相手の気づき」「自分の考え」「相手の考え」の4カテゴリーが抽出された。「同時ジャンケン」の質問1においては、「自分の言葉に意識」「相手の言葉に意識」「自分の行動を意識」「相手の行動を意識」の4カテゴリーが抽出された。質問2においては、「自分の気づき」「相手の気づき」「自分の考え」の3カテゴリーが抽出された。「いいところ見つけ」の質問1においては、「自分の言葉に意識」「自分の行動を意識」「相手の行動を意識」の3カテゴリーが抽出された。質問2においては、「自分の気づき」「相手の気づき」「自分の考え」の3カテゴリーが抽出された。

第2回は、分類対象者29名より、回答を得られた。「ラッキーセブン」の質問1においては、「自分の言葉に意識」「自分の行動を意識」「相手の行動を意識」の3カテゴリーが抽出された。質問2においては、「自分の気づき」「相手

の気づき」「自分の考え」「相手の考え」の4カテゴリーが抽出された。「私はわたし」の質問1においては、「自分の言葉に意識」「相手の言葉に意識」「自分の行動を意識」「相手の行動を意識」の4カテゴリーが抽出された。質問2においては、「自分の気づき」「相手の気づき」「自分の考え」「相手の考え」の4カテゴリーが抽出された。

第3回は、分類対象者26名より、回答を得られた。「バースディチェーン」の質問1においては、「自分の言葉に意識」「相手の言葉に意識」「自分の行動を意識」「相手の行動を意識」の4カテゴリーが抽出された。質問2においては、「自分の気づき」「相手の気づき」「自分の考え」「相手の考え」の4カテゴリーが抽出された。「人間コピー機」の質問1においては、「自分の言葉に意識」「相手の言葉に意識」「自分の行動を意識」「相手の行動を意識」の4カテゴリーが抽出された。質問2においては、「自分の気づき」「相手の気づき」「自分の考え」の3カテゴリーが抽出された。

第4回は、分類対象者29名より、回答を得られた。「弟子のジャンケン」の質問1においては、「自分の言葉に意識」「相手の言葉に意識」「自分の行動を意識」「相手の行動を意識」の4カテゴリーが抽出された。質問2においては、「自分の気づき」「相手の気づき」「自分の考え」の3カテゴリーが抽出された。「白雪姫からの相談」の質問1においては、「自分の言葉に意識」「相手の言葉に意識」「自分の行動を意識」「相手の行動を意識」の4カテゴリーが抽出された。質問2においては、「自分の気づき」「相手の気づき」「自分の考え」「相手の考え」の4カテゴリーが抽出された。

第5回は、分類対象者29名より、回答を得られた。「バンガロー殺人事件」の質問1においては、「自分の言葉に意識」「相手の言葉に意識」「自分の行動を意識」「相手の行動を意識」の4カテゴリーが抽出された。質問2においては、「自分の気づき」「相手の気づき」「自分の考え」「相手の考え」の4カテゴリーが抽出された。

振り返りの自由記述からみる推移は、Table3の通りであった。

Table3 各回の振り返りの自由記述のカテゴリ分類

| | 質問1 | | | | 質問2 | | | |
|-----------|----------|----------|----------|----------|--------|--------|-------|-------|
| | 自分の言葉に意識 | 相手の言葉に意識 | 自分の行動を意識 | 相手の行動を意識 | 自分の気づき | 相手の気づき | 自分の考え | 相手の考え |
| 後出しジャンケン | 14 | 9 | 5 | 1 | 25 | 3 | 1 | 0 |
| 同時ジャンケン | 10 | 2 | 8 | 9 | 15 | 5 | 9 | 0 |
| いいところ見つけ | 9 | 0 | 11 | 9 | 17 | 5 | 7 | 0 |
| ラッキーセブン | 7 | 0 | 12 | 10 | 11 | 7 | 8 | 3 |
| 私はわたし | 8 | 4 | 12 | 5 | 10 | 11 | 7 | 1 |
| バースディチェーン | 5 | 1 | 11 | 9 | 12 | 2 | 10 | 2 |
| 人間コピー機 | 10 | 8 | 7 | 1 | 16 | 3 | 7 | 0 |
| 弟子のジャンケン | 11 | 1 | 11 | 6 | 15 | 4 | 10 | 0 |
| 白雪姫からの相談 | 13 | 5 | 6 | 5 | 12 | 7 | 9 | 1 |
| バンガロー殺人事件 | 5 | 5 | 11 | 9 | 13 | 9 | 7 | 1 |

各講義におけるグループワークを行うことにつれて、ねらいである要素が出現していた。以下に各講義の出現記述について考察していく。

第1回目は、「後出しジャンケン」「同時ジャンケン」「いいところ見つけ」を実施した。「後出しジャンケン」に関して「勝ってください、あいこにしてください、負けてください。というお題に答えられるように自分の動きと他者の動きを意識した。」とワークになれるための記述が出現した。「同時ジャンケン」においては、「相手のことをきちんと見て相手がどんな出し方をするのか意識して見た。同時だと何を出すのか分からないからこそ面白いなと感じたし、相手の言うお題通りにならない時がよくあって盛り上がると思った。」とワークを通して不安や緊張感、面白さを感じるとる記述が出現した。「いいところ見つけ」においては、「相手の普段良いと思っていることはもちろんだが、改めて相手の良いところをたくさん見つけ考えることができた。」「自分と相手との関わりの中で感じたことやその人の姿を思いながら、考えたことで、相手のことをよく考えて向き合うことができた。」とワークを通して仲間との関係性や普段の相手（友だち）を考えながら取り組んでいる記述が出現した。第1回の講義を通してプログラムのねらいが達成したと考えられた。

第2回目は、「ラッキーセブン」「私はわたし」を実施した。「ラッキーセブン」では、「全員の位置が見えるところに自分が立って、すぐ7になったか分かるようにした。」や「全員が協力して出したものを見やすいようにしたり、自分の出した後に全員の出したものが何かを見渡したりしていることに気づいた。」と関連性を作り、集団としての協力へつながる記述が出現した。「私はわ

たし」では、「意外とみんなのこと知らないところもあって、相手について興味を持って色々知れるのは面白いと思ったし楽しかった。」や「今まで知らなかったみんなのことを知ることができたし、知ってもらうことが出来た。グループワークを通してお互いをさらに知る機会になったと思う。」と他者の知らない一面に関する記述が出現した。

第3回目は、「バースディチェーン」「人間コピー機」を実施した。「バースディチェーン」では、「相手を見ることで相手がどう感じているのか何を伝えたいのか分かるなと思った。」や「伝えたいと思う気持ちが自然と伝わるなと思った。」と他者との伝え合いから集団につながるような記述が出現した。「人間コピー機」においては、「相手の話をよく聞いて、ジェスチャーもよく見た。」や「相手の言葉をそのまま素直に聞き、自分なりの解釈は入れずに図に表してみた。」、「思ったように伝わらない時にどうしたら伝わるか考えることが大切だと感じた。」、「伝えられる方も、この受け取り方で合っているか確認しながら行うとスムーズにできた」と各グループ内での協力や目標達成に向けての大切さに関する記述が出現した。

第4回目は、「弟子のジャンケン」「白雪姫からの手紙」を実施した。「弟子のジャンケン」では、「よく観察して2人の動きが等しくならないように気をつけ、自分の役割に気をつけた。」や「相手との意思疎通や連携感を感じることができた。」とグループの役割分担としての気づきや意思の疎通等の記述が出現した。「白雪姫からの手紙」では、「一人ひとりの意見を聞き、何がメリットで何がデメリットなのか明確にすることが大切だと感じたため、意見をまとめた。」や「自分が重視していた点と友だちが重視した点で、様々な考え方がある。」、「友だちの意見に納得して、自分が最初決めた時と意見が変化したため、どのような視点で何を重視することが必要なのかを見極めることが大切だと思いました。」と目的に向かい、仲間の意見を聞き納得して協力する記述が出現した。

第5回目は、「バンガロー殺人事件」を実施した。「バンガロー殺人事件」では、「グループワークを通して、同じ気持ちを共有し、同じ目標に向かって協力することの大切さを感じました。また、特定の人が意見を言うのではなくて

みんなが同じように意見を言えるような雰囲気を作ることも大切だと思いました。」や「グループで話し合うことで、自分だけの意見ではなくて、色々な人の意見や考えをきくことができたので、話を聞く姿勢や相手の意見を受け止める姿勢でグループワークに参加することができた。」、「グループ内で役割分担をした上で、お互いが協力、協働して課題に取り組む姿勢、人の話を聞く力、自分の意見を述べる力、決められた時間の中で問題を解決しようとする力、自分を主張し他人の意見を受け入れる力」とチームを通した役割を果たすことや仲間と助け合い目標に向かうねらいに関する記述が出現した。

各講義を通して、ワークのねらいに即した記述が出現したことが確認することができた。全体の記述に目を通すと、振り返り記述の対象が初めのうちは、自分に関する記述が見られたが、講義の進行とともに友人との協力や自分の役割への気づきへと変化が伺えた。

対人関係ゲームを通して、不安や緊張の少ない集団として、人と関わる楽しさの共有を重ね、自分自身と他者の尊重し、受け入れる考えが芽生えたのではないかと推察する。

4.3 グループワーク・ルーブリック評価票

グループワーク・ルーブリック評価票は、各講義終了後に学生が記入し、提出を求めた。また、次の講義で再配布及び記入、回収を5回行った。

第1回講義から第5回講義にかけてのグループワーク・ルーブリック評価の平均点を算出したところ上昇していることが確認することができた。講義回数を重ねるごとに、グループワーク内での「傾聴」「参加意欲」「気がついたこと」への取り組み姿勢が向上しているのではないかと考えられる。各講義のリアクションペーパーからもグループワークの回数を重ねるごとに友人との協力に関する記述が出現したことからもルーブリックの平均点上昇と一致しているのではないかと考えられた。

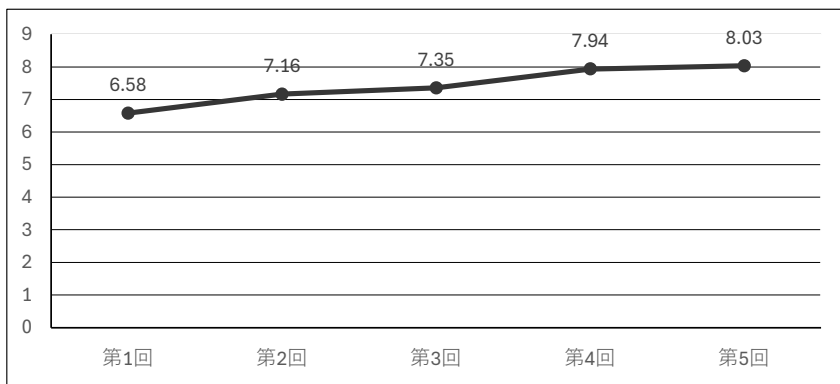


Figure 1 講義回ごとのグループワーク・ルーブリック評価平均点の推移

そこで、第1回と第3回の全体評価及び各項目の平均値、中央値、標準偏差を「傾聴」「参加意欲」「気がついたこと」の結果別に算出し Table4に示した。

Table4 第1回と第3回のグループワーク・ルーブリック評価の統計量

| 項目 | 講義回数 | 平均値 | 中央値 | 標準偏差 |
|---------|------|-------|-------|--------|
| 傾聴 | 第1回 | 7.750 | 4.500 | 10.404 |
| | 第3回 | 7.750 | 4.500 | 9.946 |
| 参加意欲 | 第1回 | 7.750 | 7.500 | 8.421 |
| | 第3回 | 7.750 | 6.000 | 8.180 |
| 気がついたこと | 第1回 | 7.750 | 6.000 | 9.394 |
| | 第3回 | 7.750 | 7.000 | 8.539 |

第1回と第3回の「傾聴」「参加意欲」「気がついたこと」の平均値を見るとそれぞれ差がないことがわかった。そこで、平均値に差が見られるのかを対応のある両側検定のt検定により検定を行い Table5に示した。

Table5 第1回と第3回の対応するデータの平均値の差の検定結果

| 項目 | 差 | 標準誤差 | 95%下限 | 95%上限 | t値 | p値 |
|---------|-------|-------|--------|-------|-------|-------|
| 傾聴 | 0.000 | 0.816 | -2.598 | 2.598 | 0.000 | 1.000 |
| 参加意欲 | 0.000 | 2.121 | -6.751 | 6.751 | 0.000 | 1.000 |
| 気がついたこと | 0.000 | 2.273 | -7.234 | 7.234 | 0.000 | 1.000 |

平均値の差の検定結果、それぞれ有意な差はなかった。第1回から第3回にかけてルーブリック評価の平均点は上昇しているものの、平均値差はなかった。今回平均値に差がなかった要因として、対象者の人数とルーブリック評価の回答項目が影響しているのではないかと考えられた。

第1回から第3回にかけての平均値に差がなかったため、次に第1回と第5回の全体評価及び各項目の平均値、中央値、標準偏差を「傾聴」「参加意欲」「気がついたこと」の結果別に算出し Table6に示した。

Table6 第1回と第5回のグループワーク・ルーブリック評価の統計量

| 項目 | 講義回数 | 平均値 | 中央値 | 標準偏差 |
|---------|------|-------|-------|--------|
| 傾聴 | 第1回 | 7.750 | 4.500 | 10.404 |
| | 第5回 | 7.750 | 5.000 | 9.465 |
| 参加意欲 | 第1回 | 7.750 | 7.500 | 8.421 |
| | 第5回 | 7.750 | 3.000 | 11.615 |
| 気がついたこと | 第1回 | 7.750 | 6.000 | 9.394 |
| | 第5回 | 7.750 | 6.000 | 8.382 |

第1回と第5回の「傾聴」「参加意欲」「気がついたこと」の平均値においても、第1回と第3回の同様、それぞれ差がないことがわかった。そこで、今回も平均値に差が見られるのかを対応のある両側検定のt検定により検定を行い Table6した。

Table6 第1回と第5回対応するデータの平均値の差の検定結果

| 項目 | 差 | 標準誤差 | 95%下限 | 95%上限 | t値 | df | p値 |
|---------|-------|-------|---------|--------|-------|----|-------|
| 傾聴 | 0.000 | 0.707 | -2.250 | 2.250 | 0.000 | 3 | 1.000 |
| 参加意欲 | 0.000 | 3.894 | -12.394 | 12.394 | 0.000 | 3 | 1.000 |
| 気がついたこと | 0.000 | 3.629 | -11.548 | 11.548 | 0.000 | 3 | 1.000 |

第1回と第5回においても平均値の差の検定結果、それぞれ有意な差はなかった。第1回から第5回にかけてもルーブリック評価の平均点は上昇しているものの、平均値差は見られなかった。

ルーブリック評価の第1回と第5回の平均点の差は、1.45点あった。参加学生の評価点が上昇している要因として、各SGEのねらいとして学生の取り組みが出来ていることが言える。

第1回と第5回において、平均値の差における有意差はないものの、学生の振り返りの記述を合わせて考えると、各SGEのねらいに即した記述が出現した。このことから、SGEを実施とルーブリックを行うことで、学生間の人間関係や自己理解、他者理解、信頼体験等が身につくことが確認された。また、同じ大学に通う友人や顔見知り、あるいは今後も接触する機会が出てくる者どうしのSGEであっても、相応の効果が表れることが確認されている（水野，2011）ため、継続することでより親密な関係性が育まれると推察した。

5. まとめと今後の課題

本研究の目的は、保育者養成校の学生を対象としてSGEを実施し、効果を可視化するためにルーブリック票を作成し、実践することであった。

SGEを行う講義を全5回実施し、各SGEについて学生に振り返りを求めた。SGEの講義の進行につれて、学生の振り返り用紙の記述に、第1回「仲間との関係性」、第2回「お互いを知る必要性」、第3回「目標達成に向けた大切さ」、第4回「仲間の意見を聞き、互いに納得する」、第5回「仲間と助け合い目標に向かう」が出現した。各講義の振り返りから、各SGEのねらいに即した記述が見られていることが確認された。全体の記述に目を移すと振り返りの

対象となっている相手は、「SGE を行うと一人の仲間について」、「関わる楽しさについて」が見られたが、SGE の進行とともに「SGE を行うグループの仲間」と対象が移っていること確認することができた。今後は、対象として「SGE を行うファシリテーターとして実施した際の振り返り」と「参加者としてSGE を実施した際の振り返り」を比較することで、それぞれのSGE に対する視点や関わりについて検討を行いたい。

ループリックにおいては、グループワーク・ループリック作成し実施した。今回のグループワーク・ループリックにおいては、「課題」「評価尺度」「評価観点」「評価基準」の順に作成した。各講義回ごとのグループワーク・ループリックにおける平均点は、第1回と第5回で1.45点あり上昇していることが確認された。第1回と3回、5回においては、対応のある両側検定のt検定を実施し、それぞれ有意さは見られなかった。有意差が見られない要因として①対象とした学生数、②グループワーク・ループリックにおける「評価観点」が影響しているのではないかと考えられる。学生数においては、対象とした人数が33名ということもあり、正確さに欠ける可能性がある。グループワーク・ループリックにおいては、「評価観点」について各項目の見直しが必要と考えられた。特に評価について、今回のグループワーク・ループリックにおいては、「優」に付ける学生が多く推移していた。今後の課題として、各評価の観点の修正を試み、より正確なグループワーク・ループリックの作成が望まれる。

最後に、保育者養成校の学生（短期大学：2年生、3年生）20名を対象に、「SGE の講義で一番印象的だった講義回は何ですか、理由も教えてください」、「今回のSGE の中で、保育者として実践したいと感じたものは何か全て教えてください（複数回答可能）」、「第1回から第5回におけるSGE を通して身についたことを具体的に記入してください。」の4項目をMicrosoft forms を用いて自由記述で質問を実施した。「SGE の講義で一番印象的だった講義回は何ですか、理由も教えてください」については、第4回（5名）、第5回（7名）と後半の講義が印象的であり、理由として「グループ内での意見が分かれて、最終的にグループとしての答えを出すのに結構話し合いをしたから印象に残っている。」や「仲間で1つのことに協力して頑張ったため、一番効果が感じら

れたから。団結力や協調性をさらに身につけることができた。」等のSGEを通して身につく内容の記述が見られた。一方で、「今回のSGEの中で、保育者として実践したいと感じたものは何か全て教えてください（複数回答可能）」においては、第1回の講義にて実施した「いいところ見つけ」を選択した学生が最も多く選択された。「いいところ見つけ」が最も多く選択された理由として、説明が容易であり、低年齢から高齢まで幅広く実施できる内容のSGEであるからだと推察される。第1回から第5回におけるSGEを通して身についたことを具体的に記入してください。」においては、「自分の意見を言うことも大切だけれども、相手の意見を聞き、お互いが聞き合うことで答えを導き出すことができた。」や「自分の意見と仲間の意見を擦り合わせていく中で、時には自分の意見を一部譲ったり合わせたりすることが身に付いた。」等の回答が出現した。これは、各SGEについて学生に振り返りを求めた結果と同様、SGEのねらいと今回設定したねらいと合致していることが確認することができた。

今回の研究を通じて、保育者養成校の学生におけるSGEとループリックにおける可視化により、対人関係職としての人との関わりや活動に必要な不可欠ではないかと推察された。

引用文献

- 藤田正・西川潔（2002）構成的グループ・エンカウンター導入による他者からの受容感の変容. 教育実践総合センター研究紀要11, 69-73.
- 国分康孝（1992）構成的グループ・エンカウンター. 誠信書房
- 興幸雄・下田好行（2002）特別活動における関係づくりの試み：学級活動での構成的グループ・エンカウターの可能性. 信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 教育実践研究 3, 11-20
- 厚生労働省（2023）新型コロナウイルス感染症（COVID-19）に係る新型インフルエンザ等感染症から5類感染症への移行について.
<https://www.mhlw.go.jp/content/001091810.pdf>
- 水野邦夫（2011）構成的グループ・エンカウンターが自己概念の変容および個人・グループ過程に及ぼす影響に関する追試的検討. 聖泉論叢. 18. 149-161

- 文部科学省（2023a）5類感染症への移行後の学校における新型コロナウイルス感染症対策について. https://hsfs.mext.go.jp/wp-content/uploads/2023/05/0502_01.pdf (2023年10月1日閲覧)
- 文部科学省（2023b）：令和4年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について.
https://www.mext.go.jp/content/20231004-mxt_jidou01-100002753_1.pdf (2023年10月4日閲覧)
- 鍋田恭孝（1991）構成化したエンカウンター・グループの治療促進因子について—思春期の神経症状態とくに対人恐怖症および慢性不登校児に対する治療
- 大澤靖彦・田上不二夫（2015）対人関係ゲームの動向と展望. 東京福祉大学・大学院紀要第6巻第1号
- 田上不二夫・内山喜久雄（1993）身体運動反応による情動反応の消去手続きに関する研究. 行動療法研究19, 110-115.
- 中央教育審議会（2012）新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて：生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ（答申）.
https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_3.pdf (2023-12-16) "
- 山下陽平・窪田由紀（2017）小学3年生を対象とした対人関係ゲーム・プログラムの効果の検討—対人不安傾向・ソーシャルスキル・学級集団の凝集性に着目して—. カウンセリング研究50（3.4）, 121-132

保育観の変容を目的とした園内研修のあり方 －園内研修の研究動向から－

鈴木 健 史

I 本研究の目的

近年、保育の質の確保・向上が求められている。たとえば、厚生労働省子ども家庭局における、「保育所等における保育の質の確保・向上に関する検討会」の「中間的な論点の整理」¹⁾では、各保育現場が継続的に保育の充実や改善を図り、質の確保・向上に取り組むことが今後の具体的な検討課題の一つに位置づけられた。保育の質の確保・向上には、保育者の専門性向上が求められる。小櫃・矢藤²⁾は、教育者に求められるスキルを基に、保育者に求められるスキルについて考察している。それによると、保育者のスキルは、「テクニカル・スキル」「コンセプチュアル・スキル」「ヒューマン・スキル」の3つがある。「テクニカル・スキル」とは、保育者として身につけることが求められる知識と技術である。具体的には、保育の原理、子どもの理解、子どもの学びを促す方法や内容、言葉のかけ方や見守り方、絵本の読み聞かせや音楽活動・造形活動・身体表現などの実技、教材の準備や環境の構成の知識と技術などである。「ヒューマン・スキル」とは、人とかかわる力、コミュニケーション力、気持ちに寄り添い、聴くことができる力である。「コンセプチュアル・スキル」とは、保育者の実践を支える概念、考え方、理論などを指す。これには、子ども観、保育観など、保育者の持つ価値観である。

子ども観とは、保育者が子どもをどのような存在として捉えるかという子どもの見方である。ニュージーランドの乳幼児教育カリキュラムであるテ・ファリキの冒頭には、「子どもは有能で自信に満ちた学び手である」という宣言が置かれ、「私たちの見方が、私たちの子どもへの働きかけ方に影響を及ぼす」、

「私たちの見方が、子どもたちの『自分は自信に満ち有能である』という感覚に影響を及ぼす」という2つの文が続いている³⁾。どのような「子ども観」を保育者が持っているかによって、保育のあり方は変わってくる。無能な子ども観を持っていれば、保育者は積極的に子どもに「教える」「導く」という教授的なアプローチをすることになる。一方、有能な子ども観を持つ保育者は、子どもの主体性を尊重し、子ども理解に基づいた援助を行う。子ども自身が見出したねらいにそって、子どもが主体的に学んでいくことのできる豊かな環境構成をすることになる。

保育観に関しては多くの先行研究があるが、その定義については定まっていない⁴⁾。ただし、その重要性については多くの研究で言及されており、保育者の持つ価値観が保育に及ぼす影響は多大であることが示唆されている。専門性向上に関して近年特に注目されているのが園内研修であるが、先行研究を概観すると、専門性の一つとしての保育観を捉え、その変容を直接的な目的とした研修を行っている研究はあまりない。そこで本研究では、2002年～2022年の20年の間に発表された論文の内容を分析することで、保育者の保育観の変容を目的とした園内研修のあり方を探ることを目的とする。

Ⅱ 研究方法

電子ジャーナルデータベース CiNii を使用して保育観の変容に触れられている園内研修に関する論文を対象に文献検索を行った。文献検索では、「保育観」というキーワードを入力し、保育観の自覚や変容について論じられている論文の中から本研究のテーマに沿った論文を選出し、計15本の論文を分析の対象とした。

Ⅲ 結果

選出した論文の中から保育者の保育観の変容に関する園内研修の「研修方法・研修内容」「研修効果」について整理し、表にまとめた (Table1)。「研修

方法・研修内容」「研修効果」については、保育観の変容に関わる箇所を主に抽出した。なお、「研修効果」についてはインタビューや質問紙等で分析をしている研究がある一方で、執筆者や講師が研修の参加者の様子から推測している論文もあったが、本論文の目的は保育観の変容に関する園内研修の可能性を探ることであるため、あえて区別はせず分析対象とした。

Table1 各論文における研修方法・内容と研修効果一覧

| No | 論文名 | 研修方法・内容 | 研修効果 |
|----|--|---|--|
| 1 | 園内研修初期段階における保育実践の変容とその諸相: 特別に配慮を必要とする子どもへの注目を契機として ⁵⁾ | 週1回(全28回)クラス担任から提出された週日案や、その日の保育を省察することを目的にエピソードや環境図を書き、保育者間で内容の検討を行う。特別に配慮を必要とする子どもに注目し、保育者間で対話を通して保育を省察する。 | 実践に反省と考察を加えることで、省察の内容が深まる。省察内容に保育者の自己および人格の吐露が加わり、省察や内省が深化した。 |
| 2 | 保育者の資質の向上をめざす園内研修の試み —M 保育園での研修を手がかりに— ⁶⁾ | 保育者の先入観や手だて、省察などについて、『保育の一日とその周辺』(津守真、フレール館、1989)を毎月1回、計7回輪読することによって共通理解を図る。輪読のテーマを「子ども理解の方法」に焦点化して討議をする。 | 自分の保育の見直しや、意味付けができ、実践と理論のつながりを見出すことができた。また、保育を振り返り、構築していく方法を習得することができた。それぞれの保育観が異なっていることが明確になってきた。 |
| 3 | 保育者勉強会の効果を可視化する試み —概念マップから見る保育者の学びの変容と熟達モデル— ⁷⁾ | 幼稚園・保育所に勤務する現役の保育者と保育者を志望する学生を対象に、幅広い領域のテーマの選出し、22回の勉強会を実施。講師の講演を刺激とし、保育者の抱える保育の問題をディスカッションし共有する。 | 一方向の支援者集団から双方向の視点が可能支援者集団、漠然とした保育観をもつ集団からより具体的に主体的な保育観をもつ集団、という学びの効果が考えられる。 |
| 4 | 対話型アプローチによる保育研修に関する基礎研究 ⁸⁾ | 保育者および養成校教員を対象に、ワールドカフェを実施。「幼児の発達と課題」というカフェテーマ(全体テーマ)のもと、3つのラウンドテーマを立て、4～5名でテーブルを囲んで1回30分程度の対話を行う。 | 実施後には保育者省察尺度と集団雰囲気尺度の得点に差が見られ、改めて保育の重要性を認識し、カフェによる研修にポジティブな雰囲気を感じたことが示された。 |
| 5 | 継続的カンファレンスで対話を重ねることによる保育者の意識の変化 ⁹⁾ | 法人内の複数の保育所が一堂に会した研究会において、職員15名を対象に全8回の定期研究会を実施。ワールド・カフェによる導入後、定期的かつ継続的に実施されてきたエピソード記録を用いたカンファレンス、ビデオカンファレンス、フォトカンファレンスを行い、職員間の対話を重ねる。 | 日々の振り返りの変化と、職場内の職員同士の関係やチームワーク、振り返りを通じた子どもへの気づき、子どもや保育の見方の広がりや深まり、職員全員が子どもへの一貫した対応をおこなうようになってきたことなどが変化として感じられていることが示唆された。 |
| 6 | インシデント・プロセス法による保育カンファレンスが新任保育士の専門的発達に及ぼす効果 ¹⁰⁾ | 園内研修としてインシデント・プロセス法(事例提供者の短い象徴的な出来事をもとに、参加者が質問することによって事例の概要を明らかにし、その原因と対策を考えていくカンファレンスの方法)による保育カンファレンスを1ヶ月に1回、3年間継続して実施。 | 保育カンファレンスに参加し保育者同士のコミュニケーションをとっていったことが、保育者の専門的成長に対して重要な役割をしていたと考えられる。特に1. 困っていることを話せること、2. 他の保育者の質問から新たな視点を得ることの2点が重要なポイントになったと思われる。 |

| No | 論文名 | 研修方法・内容 | 研修効果 |
|----|--|--|---|
| 7 | 写真を活用した保育の振り返りと園内研修の手法の提案—アクティブ・ラーニング型園内研修の1つとして— ¹¹⁾ | 保育場面の子どもの様子や保育室環境などの写真を使ったアクティブ・ラーニング型の園内研修。 参加者同士が「考えたことを発表しあう」「感じたことを伝え合う」「振り返りを行う」というプロセスを組み込む。保育の振り返りや園内研修において写真を活用する。子どもの内面の読み取りから、5領域を結びつけて理解を深めたり、保育環境の持つ意味を考え、次への保育の構想に活かす。 | 参加者のクラスの写真を使うことによって、参加者自身が自分の保育を振り返りながら、主体的・能動的な気づきや学び—とくに、子どもの理解や遊び理解、そして保育環境の理解—が促進されるだけでなく、職員同士の協同的気づきや学びを引き出すことができ、ある場面の多様な捉え方が共有できることが期待される。また「学び・気づきの内面化」につながると考えられる。 |
| 8 | 保育者の意識変容と保育内容の改善を目指した園内研修—気付き・意欲・同僚性に注目して ¹²⁾ | 保育の相互参観を行い自身の保育を開示し、保育参観後にはカンファレンスを行い、保育者や園内全体の成果と課題を可視化し確認し合う園内合同研修会を行う。そして、チェンジエージェント的な役割として外部講師が介入する。保育者の「気付き」「意欲」「同僚性」に働きかける約2年間における計27回の園内研修を実施。 | 保育者は、「子どもの活動の成果」や「保育者の言葉がけにどのように反応するか」という意識から、子どもの「声を聴く、興味・関心に寄り添う、共に考える」と子どもの側から保育を捉え直す意識へと変わっていった。そのことを通して、保育内容も「保育者主導」から「子ども主体」へと変化が見られた。 |
| 9 | 保育記録による園内研修と保育への振り返り：選抜研修がもたらす保育者の変容と園内への学びの広がり ¹³⁾ | 幼稚園教諭と保育所保育士合同の交流研修を行う。各園から2名の保育者が参加しラーニング・ストーリーによる記録の採集を行い、他園で採録した観察記録を用いて園内研修を実施し、子どもの育ち・学びの共有を行う。保育者に、子どもが熱中・挑戦する姿とそれを支援する保育者の関わり方を省察させた。また、報告書の提出を義務づける。報告書では保育者による子どもの育ち・学びの共有を契機に、園内の保育者間の子ども親や保育親への振り返りをねらいとし、①学んだこと、②感想、③今後の教育・保育に活かす方法、という3点からまとめる。 | 子どもへの共感的なまなざしをもたらした。保育記録に基づいた園内研修を通して、①保育者のかかわりと子どもの活動の一連の流れ、その過程における成果をつぶさに採取することの必要性、②保育者間の学び合いが子ども理解の共有と保育の質を保證する保育者の成長を生み出す契機となることの認識、を園内に広げた。 |
| 10 | 「機能する保育」実践のための研修プログラム開発の可能性：構造構成学によるアプローチ ¹⁴⁾ | 講師がパワーポイントを使用した60分間のプレゼンテーションで、小山ら（2013）による5つの「保育を見直すポイント」を提示し、受講者に保育を見直すきっかけを提供する。 | これまでの保育実践を見直す必要性が生じ、本講習会が「保育親見直しの契機」になった。「保育親」の生かし方が伝わったことで、自身の保育実践を見直す契機につながったと思われる。 |
| 11 | 保育実践の省察から生まれる教職員相互・集団の質の向上に関する一報告 ¹⁵⁾ | 園内研究の一環として、同園を修了したクラスについて、入園から修了まで、3年間の保育を振り返る協議を行う。一事例をきっかけに具体的な場面を出し合う形ですすみ協議した。幼児の関係性をつなぐことを考えた際、環境構成や遊びへのかかわり方が各年齢で適切だったかについて議論した。個々の教員がどのような考えをもち、その時保育を担っていたか、具体的な意見を交換した。 | それぞれの保育に対する考え方を、園内で意外に共有していない実情を感じる時間となった。目指す保育が共通か、互いの「保育観」を共有する機会をあまりもっていないことが、課題として認識された。そもそも保育観をどの程度同じにする必要があるのか、異質な保育観が存在することの意義の検討も認識された。 |
| 12 | 多様性の尊重とインクルーシブ保育—継続的な園内研修が保育者に与える影響— ¹⁶⁾ | 年度内に2回～3回の研修を、筆者らが講師を務め実施。研修内容は講師により異なるが、発達障害や障害が心配され、気になる子どもの援助と保育の繋がりを柱とした。共通のテキストを各園に配布した。 | 気になる子どもの「個別理解と支援」のステージから、障害の有無や気になる気にならない等の区別なく、「子ども一人ひとりの主体性を重んじる保育実現」ステージへと意識が変容するプロセスを推測できた。 |

| No | 論文名 | 研修方法・内容 | 研修効果 |
|----|---|---|--|
| 13 | 保育施設間の学び合いによる実践・対話研修会の効果 ¹⁷⁾ | 著者が所属する園の教育・保育を他園に紹介する実践・対話研修会を実施。研修会は、講義と演習に分かれており、所属する園の概要、「援助型」の保育の方法、職員研修の実践について50分間の講義（園の概要、乳児保育の重要性、育児担当制、保育の見直し、援助型の保育、保育者の力量・経験の差、価値観の多様さ、保育内容の継承、伝達の必要性、保育理念の具現化、子どもに対するかかわりの統一等）を行う。その後、30分間の質疑により著者と保育者の対話を行う。その後、第2著者のコーディネートにより、研修会での学びを踏まえ、今後の保育実践をテーマとした保育者間の対話による演習を行う。 | 日々の自身の保育の振り返りにより、子どもの主体性を重んじる姿勢や、子どもの見方への意識を振り返る省察につながっていることが推察される。日頃の園内研修と同様、自身の振り返りを促す機会につながることを示唆された。日頃の保育を違った視点で見つめ直す機会であったと考えられる。他園の具体的な保育内容と方法を自身の保育と照合させ、保育への活用の可能性を探索しながらも、自園の保育に適合するかを判断していたものと捉えられる。保育に対する複数の選択肢が提案され、自身の保育と照らし合わせながら種々選択できる機会であることが示唆された。 |
| 14 | 保育の質向上と保育者の成長を支える往還型研修 —実践と研修の往還がもたらす新たな意味と価値の創造過程— ¹⁸⁾ | 園内の同僚や保護者と、子どもの姿を共有し、対話を深め、保育の展開を協働的に構想していくための具体的な方法（カンファレンスや保育ウェブ、ドキュメンテーション等）について学ぶグループワークが組み入れられ、次の研修までに、自園でそれらを活用した取組みを行う課題が出される。自園の保育の質を向上するために、年間を通して取り組みたい課題を「テーマ」として設定し、各回の課題は、そのテーマに即して園内で取り組むためのツールとして活用することとなっている。次の研修では、その成果や工夫をグループワークにて共有し合い、改めて、その過程で見えてきた手応えや課題について振り返るという外部研修での学びと園における実践とが往還するプログラム。公開保育の実施園は、研修に参加している保育者が同僚とともに、保育を公開するクラスを選定し、日常の子どもたちの主体的な遊びの充実を図り、保育を公開する。その過程においては、本研究メンバーを含む講師がアドバイザーとして各園に1名ずつ配置され、公開保育までの数ヶ月の間、定期的な園を訪問し、保育観察と園内研修を行う。 | 外部の研修における講師や他園の保育者との語り合いは、多様な他者の視点や自園と異なる保育観や保育実践との出会いとなり、公開保育における他者の見方や他園の保育実践に触れる機会には、保育者にとって、自らの保育観や子どもを見るまなざしの枠組みに気づき、それを問い直す契機となることが見出された。外部の第三者であるアドバイザーや公開保育の際の参加者からの自園の保育のよさや価値の指摘が自分たちの保育の意味や価値を再発見する機会になった。公開保育の参加者や研修で出会う同じグループの他園の保育者との語り合いを通して、自分たちの実践に関する気づきや省察が生まれていた。 各保育者には、改めて、子どもの姿や自らの（また、自園の）保育のもつ意味と価値を問い直す省察（自己内対話）が生まれていた。さらに、そのような保育者の学びは、自園の実践の中に、新しい意味や価値を創造していくこととなり、結果として、園全体の保育実践の変容へと繋がっていている様子も確認された。 |
| 15 | 保育実践のリフレクションの意義に関する一考察: 保育観の問い直し ¹⁹⁾ | 保育中の出来事における保育者の行為の基盤となっている感情、感覚についてコルトハーヘンの8つの窓を用いたリフレクションを行い、事例をさらに深めていく。 | 保育者側の感情への気づきがリフレクションを深め、さらにその意味への問いへとつながるきっかけとなる。各自の行為の基盤となっている保育観（行為と保育観との結びつき）が次第に明らかになってくる。 |

(論文の著者や出版年等詳細については引用文献を参照)

1 研修方法・内容について

堀ら²⁰⁾は、組織的な研修を、「知識伝達型」、「問題解決型」、「省察型」の3つ型に分類している。本研究で選出した論文の「研修方法・内容」を3つの型で整理し傾向を見ていく (Table2)。

Table2 各論文における研修の型分類一覧

| No | 論文名 | 知識伝達型 | 問題解決型 | 省察型 |
|----|--|-------|-------|-----|
| 1 | 園内研修初期段階における保育実践の変容とその諸相: 特別に配慮を必要とする子どもへの注目を契機として | | ○ | ○ |
| 2 | 保育者の資質の向上をめざす園内研修の試み -M 保育園での研修を手がかりに- | ○ | ○ | |
| 3 | 保育者勉強会の効果を可視化する試み -概念マップから見る保育者の学びの変容と熟達モデル- | ○ | ○ | ○ |
| 4 | 対話型アプローチによる保育研修に関する基礎研究 | | | ○ |
| 5 | 継続的カンファレンスで対話を重ねることによる保育者の意識の変化 | ○ | ○ | ○ |
| 6 | インシデント・プロセス法による保育カンファレンスが新任保育士の専門的発達に及ぼす効果 | | ○ | ○ |
| 7 | 写真を活用した保育の振り返りと園内研修の手法の提案 -アクティブ・ラーニング型園内研修の1つとして- | | | ○ |
| 8 | 保育者の意識変容と保育内容の改善を目指した園内研修 -気付き・意欲・同僚性に注目して | ○ | ○ | ○ |
| 9 | 保育記録による園内研修と保育への振り返り: 選抜研修がもたらす保育者の変容と園内への学びの広がり | | ○ | ○ |
| 10 | 「機能する保育」実践のための研修プログラム開発の可能性: 構造構成学によるアプローチ | ○ | | ○ |
| 11 | 保育実践の省察から生まれる教職員相互・集団の質の向上に関する一報告 | | ○ | ○ |
| 12 | 多様性の尊重とインクルーシブ保育 -継続的な園内研修が保育者に与える影響- | ○ | ○ | ○ |
| 13 | 保育施設間の学び合いによる実践・対話研修会の効果 | ○ | ○ | ○ |
| 14 | 保育の質向上と保育者の成長を支える往還型研修 -実践と研修の往還がもたらす新たな意味と価値の創造過程- | ○ | ○ | ○ |
| 15 | 保育実践のリフレクションの意義に関する一考察: 保育観の問い直し | | ○ | ○ |

知識伝達型とは、「集まって一斉に講義を受ける学校スタイル」であり、「必要な知識を効率的に伝達できる」というメリットがある²⁰⁾。選出した論文で紹介されている研修では、講師がパワーポイントを使用し「保育を見直すポイント」についてプレゼンテーションを行うことで、保育観を見直すきっかけを提供している。また、講義の代わりに保育の書籍を輪読したり、共通のテキストを配布したりすることで保育観について共通理解を図っているケースもある。しかし、本研究で選出した論文で紹介されている研修では、知識伝達型であっても、日常の保育の省察を促したり、新たな視点での問題解決を促す契機として講義を位置づけている。たとえば1回の研修であっても、前半は講義で、後半は講義内容に関するテーマについて討議や演習を行い、問題解決や省察に近づけている。

問題解決型とは、「具体的な問題に対して、自らの体験と考察をもとに試行錯誤を繰り返しながら問題解決をしていく学習法」である。「参加者が主体と

なって学習する」ことができる²⁰⁾。保育者の抱える保育の問題を議論することで共有したり、子どもの姿を共有し対話を通して保育の展開を協働的に構想したり、保育場面を取り上げ原因と対策を考えていく保育カンファレンスなど、問題解決を目指した研修が実施されている。外部研修での学びと園における実践とが往還する研修では、自園の保育の質を向上するために、年間を通して取り組みたい課題を「テーマ」として設定し、次の研修でその成果や工夫をグループワークにて共有し合い、その過程で見えてきた課題や手応えについて振り返るという問題解決のプロセスそのものを体験から学ぶ研修も実施されている。

省察型とは「自分を振り返り、批判的に見つけることで自己変容を促そうというもの」である。「他者と対話することで相互作用を起し、考え方そのものを革新」させていくことができる、「参加者同士の相互作用を活かせる」学び方である²⁰⁾。省察の素材は、週日案や、エピソードや環境図、ラーニング・ストーリー、保育場面の子どもの様子や保育室環境などの写真、ビデオなど多様である。幼稚園教諭と保育所保育士合同の交流研修では、他園で採取した観察記録を用いて園内研修を実施しているケースもある。それらの素材を用いて、保育者間の対話を通して省察を行う。対話の形はワールドカフェや、エピソード記録を用いたカンファレンス、ビデオカンファレンス、フォトカンファレンスにより対話を重ねている。省察の期間は、日常の保育の瞬間を切り取っている場合が多いが、入園から修了まで3年間の保育を対象とするなど長期間の振り返りを行っている事例もある。また、省察の視点や内容も多様である。子どもの内面の読み取りから、5領域を結びつけて理解を深めたり、保育環境の持つ意味を考えたり、子ども同士の関係性や、保育者の環境構成や遊びへのかかわり方が適切だったかについて、保育中の出来事における保育者の行為の基盤となっている感情や意図についてなど、多様な視点で省察を行っている。また、研修報告書の項目を工夫することで、省察を促している事例もある。

研修では、保育者の省察を促した後、今後の保育の構想や、問題解決について議論をするという流れが見られる。また、実際に研修では問題解決まで行わなかったとしても、保育者が研修において省察を行うことで、その後日常の保

さらに「研修効果」を要素ごとにラベルにし、KJ法により分類を行い、意味のまとまり毎にサブカテゴリー名をつけた。さらにサブカテゴリーをまとめ、カテゴリー名をつけた。カテゴリーは計7個、サブカテゴリーは計29個となった（Table3）。

Table3 研修効果のカテゴリー・サブカテゴリー一覧

| カテゴリー | サブカテゴリー | 研修効果 |
|----------------|-----------------|--|
| 1: 保育方法・内容の変化 | ①保育の見直し | <ul style="list-style-type: none"> ・自分の保育の見直し ・自身の保育実践を見直す契機につながった ・自分たちの実践に関する気づきや省察が生まれていた |
| | ②意識の変容 | <ul style="list-style-type: none"> ・気になる子どもの「個別理解と支援」のステージから、障害の有無や気になる気にならない等の区別なく、「子ども一人ひとりの主体性を重んじる保育実現」ステージへと意識が変容するプロセスを推測できた。 |
| | ③保育者の姿勢の変化 | <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの主体性を重んじる姿勢 |
| | ④保育実践の変化 | <ul style="list-style-type: none"> ・保育内容も「保育者主導」から「子ども主体」へと変化が見られた。 ・園全体の保育実践の変容へと繋がっていている様子も確認された |
| | ⑤子どもへの一貫した対応 | <ul style="list-style-type: none"> ・職員全員が子どもへの一貫した対応をおこなうようになってきた |
| 2: 子ども理解の変化 | ①子どもへの見方の変化 | <ul style="list-style-type: none"> ・子どもへの共感的なまなざしをもたらした ・子どもの見方への意識を振り返る ・子どもを見るまなざしの枠組みに気づき、それを問い直す契機となる |
| | ②省察による子ども理解の深まり | <ul style="list-style-type: none"> ・振り返りを通した子どもへの気づき ・子どもの理解や遊び理解、そして保育環境の理解-が促進される |
| 3: 保育の省察方法の習得 | ①保育の省察の促し | <ul style="list-style-type: none"> ・自身の振り返りを促す |
| | ②省察の深まり | <ul style="list-style-type: none"> ・省察の内容の深まり ・実践に反省と考察を加えることで、省察や内省が深化した ・実施後には保育者省察尺度の得点に差が見られる |
| | ③保育の省察方法の習得 | <ul style="list-style-type: none"> ・保育を振り返り、構築していく方法を習得することができた ・日々の振り返りの変化 |
| | ④保育の省察の重要性の認識 | <ul style="list-style-type: none"> ・保育者のかかわりと子どもの活動の一連の流れ、その過程における成果をつぶさに採取することの必要性 ・これまでの保育実践を見直す必要性が生じた |
| 4: 保育実践の意味付け | ①保育実践の意味や価値の創造 | <ul style="list-style-type: none"> ・意味への問いへとつながるきっかけとなる。 ・自園の実践の中に、新しい意味や価値を創造していく |
| | ②実践と理論のつながりを見出す | <ul style="list-style-type: none"> ・意味付けができ、実践と理論のつながりを見出すことができた |
| 5: 保育観への気づきと変容 | ①保育観の異なりを知る | <ul style="list-style-type: none"> ・それぞれの保育観が異なっていることが明確になってきた ・それぞれの保育に対する考え方を、園内で意外に共有していない実情を感じる時間となった ・自園と異なる保育観との出会い |

| | | |
|--------------|-------------------|---|
| | ②保育観の明確化 | <ul style="list-style-type: none"> ・漠然とした保育観をもつ集団からより具体的で主体的な保育観をもつ集団，という学びの効果が考えられる ・各自の行為の基盤となっている保育観（行為と保育観との結びつき）が次第に明らかになってくる。 ・自らの保育観に気づき，それを問い直す契機となる |
| | ③保育観の変化 | <ul style="list-style-type: none"> ・一方向の支援者集団から双方向の視点が可能な支援者集団，という学びの効果が考えられる ・保育者は、「子どもの活動の成果」や「保育者の言葉がけにどのように反応するか」という意識から，子どもの「声を聴く，興味・関心に寄り添う，共に考える」と子どもの側から保育を捉え直す意識へと変わっていった。 |
| | ④保育観の見直しの契機 | <ul style="list-style-type: none"> ・保育観見直しの契機になった ・目指す保育が共通か，互いの「保育観」を共有する機会をあまりもっていないことが，課題として認識された。 |
| | ⑤保育観の共有の意義についての検討 | <ul style="list-style-type: none"> ・そもそも保育観をどの程度同じにする必要があるのか ・異質な保育観が存在することの意義の検討も認識された。 |
| | ⑥保育の意味や価値の再発見 | <ul style="list-style-type: none"> ・改めて保育の重要性を認識した ・自分たちの保育の意味や価値を再発見する機会になった ・各保育者には，改めて，子どもの姿や自らの（また，自園の）保育のもつ意味と価値を問い直す省察（自己内対話）が生まれていた |
| | ⑦保育観の生かし方 | <ul style="list-style-type: none"> ・「保育観」の生かし方が伝わった |
| 6: 学ぶ姿勢の変化 | ①保育者の自己開示 | <ul style="list-style-type: none"> ・省察内容に保育者の自己および人格の吐露が加わる |
| | ②関係性向上とチームワーク | <ul style="list-style-type: none"> ・集団雰囲気尺度の得点に差が見られた ・職場内の職員同士の関係やチームワーク ・困っていることを話せること |
| | ③協働的な学び | <ul style="list-style-type: none"> ・他の保育者の質問から新たな視点を得ること ・職員同士の協働的な気づきや学びを引き出すことができた ・保育者間の学び合いが子ども理解の共有と保育の質を保证する保育者の成長を生み出す契機となることの認識，を園内に広げた |
| | ④保育者の主体的な学びの姿勢 | <ul style="list-style-type: none"> ・主体的・能動的な気づきや学び |
| | ⑤研修に対する前向きな評価 | <ul style="list-style-type: none"> ・カフェによる研修にポジティブな雰囲気を感じたことが示された |
| 7: 学び・気づきの促進 | ①学び・気づきの内面化 | <ul style="list-style-type: none"> ・「学び・気づきの内面化」につながると考えられる。 |
| | ②感情への気づき | <ul style="list-style-type: none"> ・保育者側の感情への気づきがりフレクションを深める |
| | ③視野の広がり | <ul style="list-style-type: none"> ・子どもや保育の見方の広がりや深まり ・ある場面の多様な捉え方が共有できる ・日頃の保育を違った視点で見つめ直す ・多様な他者の視点との出会い |
| | ④多様な保育のあり方への気づき | <ul style="list-style-type: none"> ・他園の具体的な保育内容と方法を自身の保育と照合させ，保育への活用の可能性を探索しながらも，自園の保育に適合するかを判断していたものと捉えられる。保育に対する複数の選択肢が提案され，自身の保育と照らし合わせながら種々選択できる機会であることが示唆された ・自園と異なる保育実践との出会い |

以下、カテゴリーは【 】, サブカテゴリーは [] で示し、研修の効果について各カテゴリーの詳細についてサブカテゴリーを用いてストーリーラインを作成した。

【1：保育方法・内容の変化】

研修を通じて、保育者に『①保育の見直し』が起こり、『②意識の変容』や『③保育者の姿勢の変化』、『④保育実践の変化』が生じた。また、園全体で『⑤子どもへの一貫した対応』につながった。

【2：子ども理解の変化】

研修を通じて、保育者の『①子どもへの見方の変化』や『②省察による子ども理解の深まり』が生じた。

【3：保育の省察方法の習得】

研修を通じて、保育者の『①保育の省察の促し』や『②省察の深まり』が生じた。また、『③保育の省察方法の習得』と、『④保育の省察の重要性の認識』につながった。

【4：保育実践の意味付け】

研修を通じて、『①保育実践の意味や価値の創造』や『②実践と理論のつながりを見出す』ことにつながった。

【5：保育観の変容】

研修を通じて、保育者間の『①保育観の異なりを知る』ことや、『②保育観の明確化』や『③保育観の変化』が生じた。『④保育観の見直しの契機』となり、『⑤保育観の共有の意義についての検討』と『⑥保育の意味や価値の再発見』がなされた。また、『⑦保育観の生かし方』について学ぶことができた。

【6：学ぶ姿勢の変化】

研修を通じて、『①保育者の自己開示』や保育者間の『②関係性向上とチームワーク』が生まれ、『③協働的な学び』や『④保育者の主体的な学びの姿勢』と『⑤研修に対する前向きな評価』へとつながった。

【7：学び・気づきの促進】

研修を通じて、『①学び・気づきの内面化』や『②感情への気づき』、『③視野の広がり』、『④多様な保育のあり方への気づき』が生じた。

Ⅳ 考察と今後の課題

本研究の目的は、保育者の保育観の変容を目的とした園内研修のあり方について検討することであった。15本の論文を分析した結果、保育観の変容を目的とした研修は、「知識伝達型」、「問題解決型」、「省察型」の3つ型を組み合わせ実施しているということが分かった。また研修自体は「知識伝達型」であっても、日常の保育の省察を促したり、新たな視点での問題解決を促す契機として位置づけており、その後に演習やカンファレンスを行ったり、研修後に報告書を提出させるなどして、保育者が省察や問題解決を体験できるような工夫や仕組みが見られた。研修は保育者の保育観変容の機会となるが、同時に変化を促進する工夫や仕組みも重要だということであろう。

保育者の子ども観や保育観は研修等を通じて明確化していくと同時に複雑化していくことが先行研究で示唆されている¹³⁾。本研修で分析対象とした論文については、複数回を数ヶ月～数年に渡って実施している研修が多かった。つまり、保育観の変容には、継続的にかつ日常的に保育を振り返る機会があることの重要性が示唆されたと言えるだろう。

研修効果として保育観の変容があったという論文は多数あったが、保育観の変容そのものを目的とした研修はあまりなかった。保育観の重要性については先述した通りだが、保育観の変容を目的とした園内研修はほとんど実施されていないことが推測される。園内研修の傾向として、具体的な保育方法や内容という「テクニカル・スキル」が扱われる傾向があるのではないだろうか。

今回は論文のみを分析対象としたが、園内研修を取り扱った書籍や、小学校以上の校内研修等、価値観を重視する心理療法や心理教育等の文献についても参考とし、保育観の変容を目的とした園内研修のあり方について研究していきたい。

引用文献

- 1) 厚生労働省 (2020). 議論のとりまとめ「中間的な論点の整理」における総論的事項に関する考察を中心に、保育所等における保育の質の確保・向上に関する検討会。
- 2) 小櫃智子・矢藤誠慈郎編著 (2018). 改訂版 保育教職実践演習 これまでの学びと保育者への歩み—幼稚園 保育所編. わかば社, 125
- 3) Margaret Carr (2001). Assessment in Early Childhood Settings Learning Stories SAGE Publications of London (大宮勇雄・鈴木佐喜子訳 (2013). 保育の場で子どもの学びをアセスメントする:「学びの物語」アプローチの理論と実践. ひとなる書房, 48-86)
- 4) 松本佳代子 (2019). 保育者の保育観に関する研究動向. 国立女子大学家政学部紀要, 65, 143-154.
- 5) 入江礼子, 内藤知美, 太田佐恵子, 井上紀子, 水澤典子, 三浦加奈子, 杉崎友紀. (2002). 園内研修初期段階における保育実践の変容とその諸相: 特別に配慮を必要とする子どもへの注目を契機として. 鎌倉女子大学紀要, (9), 1-10.
- 6) 小川圭子. (2004). 保育者の資質の向上をめざす園内研修の試み—M保育園での研修を手がかりに—. 大阪信愛女学院短期大学紀要, 38, 33-41
- 7) 細川美幸, 梅崎高行. (2010). 保育者勉強会の効果を可視化する試み—概念マップから見る保育者の学びの変容と熟達モデル—. 紀要visio, 40, 47-58.
- 8) 音山若穂, 井上孝之, 利根川智子, 上村裕樹, 河合規仁, 和田明人. (2013). 対話型アプローチによる保育研修に関する基礎研究. 群馬大学教育実践研究, 30, 211-220.
- 9) 利根川智子, 和田明人, 音山若穂, 上村裕樹. (2014). 継続的カンファレンスで対話を重ねることによる保育者の意識の変化. 会津大学短期大学部研究紀要, 71, 33-59.
- 10) 原孝成. (2014). インシデント・プロセス法による保育カンファレンスが新任保育士の専門的発達に及ぼす効果. 鎌倉女子大学紀要, (21), 43-54.
- 11) 瀧川光治. (2016). 写真を活用した保育の振り返りと園内研修の手法の提案—アクティブ・ラーニング型園内研修の1つとして—. 大阪総合保育大学紀要, (10), 287-298.
- 12) 三好年江. (2016). 保育者の意識変容と保育内容の改善を目指した園内研修-気付き・意欲・同僚性に注目して. 新見公立大学紀要, 37, 107-114.
- 13) 橋川喜美代. (2016). 保育記録による園内研修と保育への振り返り: 選抜研修がもたらす保育者の変容と園内への学びの広がり. 兵庫教育大学研究紀要, 49, 9-18
- 14) 瀧澤聡, 渡部良子, 田中謙. (2017). 「機能する保育」実践のための研修プログラム開発の可能性: 構造構成学によるアプローチ. 北翔大学短期大学部研究紀要, 55, 107-119.

- 15) 小谷宜路, 庄司康生. (2017). 保育実践の省察から生まれる教職員相互・集団の質の向上に関する一報告. 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 16, 143-149.
- 16) 三宅浩子, 久保田真規子. (2021). 多様性の尊重とインクルーシブ保育 —継続的な園内研修が保育者に与える影響—. 宮崎学園短期大学紀要, 13, 109-117.
- 17) 五十嵐久美子, 齊藤勇紀, 宮路絵里. (2021). 保育施設間の学び合いによる実践・対話研修会の効果. 京都女子大学生生活福祉学科紀要, 16, 53-58.
- 18) 高嶋景子, 岩田恵子, 松山洋平, 三谷大紀, 大豆生田啓友. (2021). 保育の質向上と保育者の成長を支える往還型研修—実践と研修の往還がもたらす新たな意味と価値の創造過程—. 保育学研究, 59 (3), 23-34.
- 19) 村井尚子, 坂田哲人. (2022). 保育実践のリフレクションの意義に関する一考察：保育観の問い直し. 京都女子大学発達教育学部紀要, 2022, 18, 33-43.
- 20) 堀公俊・加留部貴行. (2010). 教育研修ファシリテーター. 日本経済新聞出版社, 21-23.

幼稚園における室内環境の変遷（1）

－室内装飾・壁面に着目して－

福 田 篤 子

1. 問題の所在と背景

幼稚園教育要領（2008）、第1章総則では、「幼児期における教育は（中略）幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする」と示されており、このことは現在の幼稚園教育要領にもおいても変わりはない。環境とは幼児を取り巻くすべてのものだと言える。しかし、1980年保育とカリキュラム10月号の特集「保育環境の工夫」の中で、高杉自子が「壁面構成が環境構成と思っている人がいる。そういう考えが長く続いている」と指摘しているように、環境を整えるときに、壁面を飾り、都度変えていくのが当たり前であるという考えが根強く残っている。このことは、塚本（2018）が教員・保育者に実施した壁面構成に関するアンケートの「壁面構成」の必要性についての項目で、83%の教員・保育者が必要であると回答していることや、岡谷（2020）による教員・保育者への壁面構成に関するアンケート調査においても「必要である」と答えた保育者が半数を超えていることからも見取れる。また、必要かどうか分からないという意見が3割程度あることも分かり、疑問をいだきながらも製作している現状も見えてきている。保育の現場で多く取り入れられている環境構成の一つである壁面構成は、一体いつごろから、どのような目的で作られるようになったのか、室内装飾と壁面の歴史を振り返ることにより、現在そしてこれからの室内環境としての室内装飾と壁面の在り方を検討していくこととする。

2. 先行研究の検討

鈴木（1997）は、昭和31年の幼稚園設置基準まで必須教具として記されている黒板と、壁面装飾と同義で使われることの多かった装飾ということばを手掛かりに論を進めている。黒板には図絵が描かれることが多く、直接的な指導の補助としてではなく画自体を目的として使われていたこと、また黒板画は、すぐに消さずに残すことを考えて描かれ、黒板画を保育室の装飾に用いたことが壁面構成に繋がっていくのではないかとしている。また、当時は幼稚園らしい環境を模索していた時期でもあり、特に東基吉は小学校風幼稚園を批判して、園に相応しい雰囲気を尊重しており、保育の見直しが促されたことや、義務教育でないが故の柔軟性もあって、幼稚園独自性が意識され保育環境にも反映していったとしている。さらに、欧米のインテリア文化を取り入れようとしていたが、保育室に相応しい装飾を施すことが難しく、戸惑いの中で掛図、黒板画、絵画などの扱いやすいものが装飾として用いられたとしている。鈴木（1998）の研究では、大正時代の児童中心主義の影響をうけて変化していった様子を示している。明治期、黒板に絵を描くのは保育者であったが、大正期には児童に変化していったこと、随意画が増えたことを指摘している。しかし、室内装飾は保姆の仕事であって、子どもが作った作品を飾ることは稀であったとしている。室内装飾に子どもの作品の入り込む余地がなかったという。その後、現在の多用されている壁面のポピュラーな手法となったのは、大正6年の『婦人と子ども』フレール会の中で紹介されている、大阪の幼稚園の実践報告であり、今までの四季に合わせた額に入れた絵では子どもが満足しなくなってきたので、実生活を表した等身大の子どもや動物を中心に保育室の壁に装飾をしたという。先行研究は以上の2点であり、大正期以降の室内環境と壁面の様子についての研究は存在していない。その他、文献をもとに壁面構成の歴史の変遷から現状と今後の役割や方向性について検討した研究が存在しているが、保育実践史をもとに壁面構成の歴史の変遷を調査しているものは存在していない。よって、本研究では幼児教育実践史の視点から幼稚園の創設期から現在までの室内装飾と壁面の変遷をたどっていくことにする。

3. 本研究の意義

本研究の意義として、幼児教育実践史のうえでも位置づけることが出来ると考えている。歴史研究では制度史・思想史が中心であり、実践にまつわる研究が少ないことが指摘されている。田中（1998）・小山（2012）。また、史料の発掘・収集が困難であり、対外的に触れる機会の少ない園で保管されていた史料を発表することは、実践史研究の発展に貢献できると考える。

4. 本研究の目的

本研究では幼稚園の室内環境のなかでも、室内装飾と壁面の歴史を振り返ることにより、現在そしてこれからの室内装飾と壁面の在り方を検討する手がかりとしていきたいと考えている。そこで、まず、室内環境がどのように変化してきたかを、室内環境の特徴から時代区分を見出し、その時代ごとの特徴を明らかにすることによって、室内環境にどのような要素を取り入れていたかを明らかにしていくことを目的とする。

5. 本研究における定義

現在の保育では室内環境、室内装飾、壁面という用語に対して明確な定義づけがなされていない。そこで、本研究では先行研究を整理し、以下のように定義づけを行った。

- (1) 室内環境とは：「保育室（開誘室）」、遊戯室（ホール）」、「縦覧室」とする。
廊下、玄関ホール、トイレ等は含まない。創立当初 T 幼稚園で保育の場として意識されていた場所のみに限定することとした。
- (2) 室内装飾とは：壁、床面、空間、天井、窓、黒板、掲示板、棚などの上を美しく飾ること。またはその飾りそのものを言う。
塩川（1990）が示した装飾場所、五箇所のうち、その園で

しか存在していない場所を除く4箇所、新たに装飾が可能な場所を検討して、4箇所を追加して定義とした。

- (3) 壁面とは : 室内の壁、掲示板、黒板などの広い面を利用して構成された、子どもや保育者の絵や作品とする。鈴木(1997)が使用している定義を踏まえ独自に作成した。

6. 研究方法

(1) 対象園の選定

設立の背景や地域の異なる園の室内装飾と壁面の変遷を見ることで、日本の幼稚園の室内装飾と壁面の変遷の全体像の解明により近づくと考え対象を選定した。

- ① 国立 T 幼稚園：明治9（1876）年設立
（日本で最初に設立され、各園の模範となった園である）
- ② 公立（当時）O 幼稚園：明治25（1892）年設立の
（T 幼稚園を模範とし、全国で2番目に設立され、全国の模範的な幼稚園を目指した園が前身である）
- ③ 私立 A 幼稚園：明治34（1901）年設立
（T 幼稚園に範をとり、子守学校がその前身で仏教寺院関係者が設立した。仏教寺院の幼稚園では最も古い園の一つ園である）

(2) 研究対象の選定

① 対象場所

本研究において、室内環境とは、保育室（開誘室）、ホール（遊戯室）、縦覧室である。よって対象場所は、「保育室（開誘室）」と「ホール（遊戯室）」と「縦覧室」とする。

② 対象アイテム

本研究対象は「室内装飾」と「壁面」である。よって本研究で定義づけした、室内装飾である、壁の面、床面、室内空間、天井、窓、黒板、掲示板、棚などの上を美しく飾っている物と、壁面である、壁、掲示板、黒板などの広い画面を利用して構成された、子どもや保育者の絵や作品である。対象アイテムの例の一部を以下に示す。



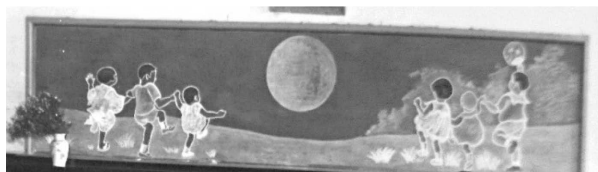
室内装飾の例1（絵や写真）



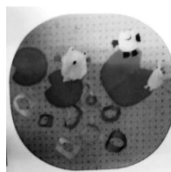
室内装飾の例2（空間飾り）



室内装飾の例3（植物）



壁面の例1（黒板画）



壁面の例2
(形で切り抜いた作品)

(3) 調査日と収集枚数・アイテム件数

3園合計：写真枚数357枚、対象アイテム897個

① T 幼稚園

調査日：2015年11月7日

収集写真枚数9枚 対象アイテム23個

明治9（1876）年～昭和8（1933）年

※昭和9（1944）年以降のデータなし

② O 幼稚園

調査日：2015年2月27日、2015年4月17日、2015年7月16日

収集写真枚数319枚 対象アイテム785個

大正10（1921）年～平成26（2014）年

※大正9（1920）年以前，昭和19（1944）年～昭和24（1949）年のデータなし

③ A 幼稚園

調査日：2015年2015年6月18日

収集写真枚数29枚 対象アイテム89個

明治36（1903）年～平成27（2015）年

7. データの収集方法・取り扱い

T 幼稚園の記念誌の写真，O 幼稚園の卒園アルバムの写真，A 幼稚園で保管されていた写真と記念誌の写真を使用した。収集方法は，デジタルカメラで記録した後でデータ化した。データの限界として記念誌やアルバムからの収集ということで，誰かが選択した結果といえる。しかし，記録媒体は時間の経過や出来事の変化を見つめるには有効であり，本研究の目的に対しては有効と考えられるため使用した。なお，データ分析は保育学の研究者二名の指導を受け，分析結果の妥当性・信頼性の確保に努めた。

8. 倫理的配慮

写真データの取り扱いに関しては，対象が室内環境であることから，個人が特定されないものであり，園長に趣旨を説明の上了承を得て使用した。

9. 分析方法

① 対象の選定

記念誌、卒園アルバム、写真の中から、対象アイテム一つずつに対して、写真撮影時期、掲示場所、掲示方法と内容、素材、作成者、作成方法、読み取れることの7つの項目について丁寧に読みといていく。

② 分析枠組みの作成

先行研究を検討した結果、本研究に使える適切な分析枠組みが存在していないことが分かった。よって、対象の選定より導き出した129個のアイテムを、KJ法にてまず、25の小カテゴリーに、その後、11の大カテゴリーとしてまとめ、本研究における独自のカテゴリーを生成して、表1の分析枠組みを作成した。

③ 分析の手順

選定した写真より、生成したカテゴリーと年別にカウントしていく。次に対象園ごとに年毎の分析を実施し特徴を見出す。その後、特徴より時代区分を見出し、時代ごとに多く取り入れられていた要素を見出していく。

表1 本研究における分析枠組み（対象カテゴリー：玩具と掲示物を省く9カテゴリー）

| | |
|-------------------|------------------------------------|
| ① 黒板画・白板画・窓絵（壁面） | 絵が描いてある黒板，白板，窓。 |
| ② 黒板画・白板画・窓絵（その他） | 文字や図形が書いてある，黒板，白板，窓。 |
| ③ 立体作品（壁面） | 壁，黒板，掲示板，窓の広い画面を利用して構成されている立体の作品 |
| ④ 立体作品（その他） | 棚や机の上や紐にぶら下げて保管されている立体の作品。 |
| ⑤ 形に切り抜いた作品（壁面） | 画用紙や折り紙で形を作ったり，絵を形に切り抜いたりして作った作品。 |
| ⑥ 植物（装飾） | 花瓶に生けた花や，観葉植物。 |
| ⑦ 絵や写真（装飾） | 額に入った絵や写真，ポスター。 |
| ⑧ 空間飾り（装飾） | 旗，くす玉，モールなど空間を飾っているもの。 |
| ⑨ 玩具（装飾） | ぬいぐるみ，こいのぼり，人形など飾ってあるもの。 |
| ⑩ 平面作品（その他） | 版画，あい染め，画用紙に描いた絵などの作品 |
| ⑪ 掲示物（その他） | 清潔検査表，お当番表，お手紙，新聞，カレンダーなど掲示してあるもの。 |

10. 調査結果

(1) 量的分析・分析結果 1

① T 幼稚園の分析結果

| | 黒板画等 壁面 | 黒板画等 その他 | 立体作品 壁面 | 立体作品 その他 | 形に切り 抜いた | 植物 | 絵や写真 | 空間飾り | 玩具 | 平面作品 | 掲示物 |
|------|------------|-------------|------------|-------------|-------------|-----|------|------|-----|------|-----|
| M9 | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 2% | 98% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| M19 | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 75% | 25% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| M45 | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 100% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| T3 | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 17% | 83% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| T11 | 100% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| T13 | 50% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 50% | 0% | 0% |
| 大正末期 | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 100% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| S5 | 100% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| S8 | 100% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% |

図1 T 幼稚園（年別分析結果） M：明治 T：大正 S：昭和 を示す

T 幼稚園の分析結果より、図1より、カテゴリーと時期的変容をみると次のような特徴が読み取れる。【植物（装飾）】明治と大正の写真から確認ができ、中村正直、明治9（1876）年『幼稚園論』に花や植物を備えるようにと示されており、それに沿って飾っていたと思われる。【絵や写真（装飾）】明治9（1876）年から大正末期まで継続されている。中村正直、明治9（1876）年『幼稚園論』に絵や図を備えるようにと書かれており、創設当初から環境に取り入れていたと思われる。【黒板画等（壁面）】大正11（1922）年から描かれており、昭和8（1933）年まで継続されている

② O 幼稚園の分析結果

| | 黒板面等 壁面 | 黒板面等 その他の | 立体作品 壁面 | 立体作品 その他 | 形に切り 抜いた | 植物 | 絵や写真 | 空間飾り | 玩具 | 平面作品 | 掲示物 |
|-----|------------|--------------|------------|-------------|-------------|------|------|------|-----|------|-----|
| T10 | 14% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 36% | 36% | 0% | 0% | 0% |
| T13 | 6% | 0% | 0% | 6% | 0% | 0% | 50% | 25% | 0% | 13% | 0% |
| T14 | 17% | 0% | 0% | 17% | 0% | 0% | 50% | 17% | 0% | 0% | 0% |
| T15 | 17% | 0% | 0% | 25% | 0% | 0% | 25% | 33% | 0% | 0% | 0% |
| S2 | 7% | 0% | 0% | 27% | 0% | 0% | 40% | 20% | 0% | 7% | 0% |
| S3 | 31% | 0% | 0% | 15% | 0% | 0% | 46% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| S4 | 25% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 100% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| S5 | 25% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 25% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| S6 | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 14% | 57% | 29% | 0% | 0% | 0% |
| S8 | 33% | 0% | 0% | 0% | 17% | 33% | 0% | 0% | 0% | 0% | 17% |
| S9 | 10% | 0% | 0% | 10% | 0% | 30% | 20% | 15% | 5% | 10% | 0% |
| S10 | 22% | 0% | 0% | 11% | 0% | 22% | 44% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| S11 | 22% | 0% | 0% | 0% | 0% | 11% | 44% | 11% | 0% | 11% | 0% |
| S12 | 14% | 0% | 0% | 0% | 0% | 36% | 21% | 14% | 0% | 7% | 7% |
| S13 | 8% | 0% | 0% | 23% | 0% | 0% | 31% | 0% | 8% | 23% | 8% |
| S14 | 6% | 0% | 0% | 0% | 13% | 25% | 19% | 13% | 6% | 13% | 6% |
| S15 | 15% | 0% | 0% | 0% | 0% | 25% | 20% | 0% | 25% | 10% | 5% |
| S16 | 20% | 0% | 0% | 0% | 0% | 20% | 20% | 0% | 10% | 20% | 10% |
| S17 | 29% | 0% | 0% | 0% | 0% | 43% | 29% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| S18 | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 100% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| S25 | 27% | 0% | 0% | 0% | 18% | 0% | 9% | 9% | 9% | 18% | 9% |
| S29 | 0% | 10% | 0% | 0% | 0% | 25% | 50% | 10% | 0% | 20% | 10% |
| S27 | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 100% | 0% |
| S28 | 0% | 0% | 0% | 0% | 17% | 17% | 42% | 0% | 0% | 17% | 8% |
| S29 | 0% | 0% | 30% | 0% | 20% | 0% | 20% | 10% | 20% | 0% | 0% |
| S30 | 8% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 25% | 8% | 25% | 17% | 17% |
| S31 | 14% | 0% | 0% | 29% | 0% | 0% | 14% | 0% | 7% | 29% | 7% |
| S32 | 0% | 0% | 11% | 0% | 22% | 0% | 22% | 11% | 11% | 11% | 11% |
| S33 | 10% | 0% | 0% | 0% | 20% | 0% | 20% | 0% | 10% | 30% | 10% |
| S34 | 9% | 0% | 0% | 18% | 13% | 23% | 0% | 0% | 0% | 18% | 0% |
| S35 | 20% | 0% | 10% | 0% | 10% | 10% | 20% | 10% | 20% | 0% | 0% |
| S36 | 17% | 0% | 0% | 0% | 0% | 33% | 17% | 0% | 17% | 17% | 0% |
| S37 | 13% | 0% | 0% | 0% | 0% | 13% | 13% | 0% | 17% | 33% | 13% |
| S40 | 20% | 0% | 0% | 7% | 7% | 27% | 0% | 0% | 33% | 0% | 7% |
| S41 | 33% | 17% | 0% | 17% | 0% | 17% | 0% | 17% | 0% | 0% | 0% |
| S42 | 13% | 0% | 13% | 13% | 0% | 13% | 0% | 0% | 0% | 13% | 38% |
| S43 | 0% | 17% | 0% | 17% | 0% | 17% | 80% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| S44 | 23% | 0% | 13% | 13% | 0% | 13% | 13% | 0% | 0% | 13% | 13% |
| S45 | 0% | 0% | 0% | 0% | 50% | 0% | 50% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| S46 | 6% | 0% | 6% | 6% | 6% | 18% | 6% | 59% | 0% | 0% | 0% |
| S47 | 10% | 0% | 0% | 10% | 10% | 30% | 20% | 0% | 10% | 0% | 10% |
| S48 | 0% | 0% | 33% | 0% | 33% | 0% | 33% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| S49 | 10% | 5% | 5% | 10% | 5% | 5% | 5% | 14% | 10% | 29% | 0% |
| S50 | 0% | 17% | 0% | 17% | 17% | 0% | 17% | 17% | 0% | 0% | 17% |
| S51 | 18% | 0% | 6% | 6% | 28% | 12% | 12% | 0% | 6% | 8% | 12% |
| S52 | 9% | 0% | 0% | 0% | 83% | 27% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| S53 | 14% | 0% | 0% | 0% | 36% | 7% | 14% | 0% | 7% | 7% | 7% |
| S54 | 0% | 0% | 13% | 4% | 17% | 0% | 9% | 9% | 48% | 0% | 0% |
| S55 | 0% | 11% | 11% | 0% | 11% | 0% | 11% | 0% | 0% | 11% | 44% |
| S56 | 14% | 0% | 0% | 0% | 14% | 0% | 0% | 0% | 43% | 29% | 0% |
| S57 | 13% | 6% | 0% | 0% | 25% | 0% | 19% | 6% | 31% | 0% | 0% |
| S58 | 0% | 0% | 0% | 0% | 33% | 17% | 0% | 0% | 0% | 33% | 17% |
| S59 | 11% | 0% | 18% | 0% | 56% | 0% | 22% | 0% | 0% | 0% | 11% |
| S60 | 0% | 0% | 33% | 0% | 67% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| S61 | 0% | 0% | 33% | 0% | 50% | 17% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| S62 | 13% | 0% | 13% | 13% | 50% | 0% | 0% | 13% | 0% | 0% | 0% |
| S63 | 20% | 0% | 20% | 20% | 20% | 0% | 0% | 0% | 20% | 0% | 0% |
| H1 | 11% | 0% | 11% | 0% | 22% | 0% | 0% | 0% | 56% | 0% | 0% |
| H3 | 0% | 0% | 0% | 0% | 67% | 0% | 17% | 0% | 17% | 0% | 0% |
| H4 | 25% | 0% | 13% | 0% | 33% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| H5 | 0% | 0% | 0% | 0% | 73% | 0% | 13% | 0% | 0% | 0% | 13% |
| H6 | 0% | 0% | 20% | 0% | 40% | 0% | 0% | 0% | 0% | 40% | 0% |
| H7 | 33% | 0% | 0% | 0% | 33% | 0% | 0% | 0% | 0% | 33% | 0% |
| H8 | 0% | 0% | 0% | 0% | 80% | 0% | 0% | 0% | 0% | 20% | 0% |
| H9 | 22% | 0% | 0% | 22% | 11% | 11% | 0% | 0% | 0% | 22% | 11% |
| H10 | 11% | 0% | 11% | 0% | 78% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| H11 | 18% | 0% | 18% | 0% | 36% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 18% |
| H12 | 0% | 0% | 33% | 0% | 67% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| H13 | 0% | 33% | 0% | 0% | 33% | 0% | 33% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| H14 | 40% | 0% | 20% | 0% | 40% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| H15 | 0% | 31% | 31% | 19% | 19% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| H16 | 0% | 0% | 0% | 0% | 100% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| H17 | 0% | 0% | 0% | 13% | 39% | 0% | 0% | 0% | 0% | 13% | 25% |
| H18 | 0% | 33% | 0% | 0% | 33% | 0% | 33% | 0% | 0% | 33% | 0% |
| H19 | 0% | 0% | 25% | 0% | 50% | 0% | 0% | 25% | 0% | 0% | 0% |
| H20 | 13% | 0% | 13% | 0% | 25% | 0% | 0% | 0% | 13% | 25% | 13% |
| H21 | 0% | 0% | 20% | 0% | 60% | 0% | 0% | 0% | 0% | 20% | 0% |
| H22 | 17% | 0% | 17% | 0% | 67% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| H23 | 8% | 0% | 0% | 8% | 31% | 0% | 0% | 0% | 0% | 8% | 46% |
| H24 | 25% | 0% | 25% | 0% | 50% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| H25 | 27% | 0% | 0% | 0% | 27% | 0% | 9% | 0% | 0% | 0% | 36% |
| H26 | 6% | 0% | 6% | 6% | 36% | 0% | 0% | 6% | 0% | 13% | 25% |

図2 O 幼稚園 (年別分析結果) M: 明治 T: 大正 S: 昭和 を示す

○ 幼稚園分析の結果、図2より、カテゴリーと時期的変容から次のような特徴が読み取れる。【植物（装飾）】昭和になって多く取り入れられるようになったが、昭和59（1984）年以降に減少していく。【絵や写真（装飾）】大正10（1921）年から昭和50（1975）年ごろまで多く取り入れられている。その後、減少するが平成26年（2014）年にまで継続的に取り入れられている。【黒板画等（壁面）】データが存在する大正（1921）10年から平成26（2014）年まで、継続的に存在している。【形に切り抜いた作品（壁面）】昭和25（1950）年より増えはじめ昭和50（1975）年以降は多用されている。【立体作品（壁面）】昭和29（1954）年より見られるようになった。その後、昭和59（1984）年までは時々見られ、昭和60（1985）年以降になってから増加していく。特に平成10（1998）年以降になると継続的に見られるようになっていく。【空間飾り（装飾）】大正10（1921）年から昭和3（1928）年に集中して見られ、昭和3（1929）年以降あまり見られなくなる。【平面作品（その他）】昭和13（1938）年から昭和44（1969）年までの期間に多く見られる。平面作品は本研究において対象アイテムである、室内装飾と、壁面に属していなかったが、特徴が顕著にでていくこと、平面作品が減っていく時期と形に切りに抜いた作品が増えていく時期が調度重なっており、平面作品から形に切り抜いた作品への移行との関連性が捨てきれないことから対象アイテムとして検討していくこととする。

③ A 幼稚園の分析結果

| | 黒板画等 壁面 | 黒板画等 その他 | 立体作品 壁面 | 立体作品 その他 | 形に切り 抜いた | 植物 | 絵や写真 | 空間飾り | 玩具 | 平面作品 | 掲示物 |
|-----|------------|-------------|------------|-------------|-------------|-----|------|------|----|------|-----|
| M36 | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| T12 | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 100% | 0% | 0% | 0% |
| T13 | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 100% | 0% |
| S3 | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 100% | 0% | 0% | 0% |
| S16 | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 20% | 40% | 40% | 0% | 0% | 0% |
| S26 | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 11% | 33% | 0% | 56% | 0% |
| S36 | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 13% | 13% | 63% | 0% | 0% | 13% |
| S44 | 0% | 0% | 0% | 0% | 50% | 25% | 0% | 0% | 0% | 0% | 25% |
| S46 | 0% | 0% | 2% | 0% | 27% | 22% | 0% | 24% | 0% | 2% | 22% |
| S50 | 0% | 0% | 75% | 0% | 0% | 0% | 25% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| S56 | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 100% | 0% | 0% | 0% |
| H4 | 0% | 0% | 13% | 0% | 13% | 0% | 0% | 13% | 0% | 0% | 63% |
| H27 | 0% | 0% | 0% | 0% | 100% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% |

図3 A 幼稚園（年別分析結果） M：明治 T：大正 S：昭和 を示す

最後に、A幼稚園の分析の結果、図3より、カテゴリーと時期的変容から次のような特徴が読み取れる。【植物（装飾）】昭和16（1941）年から昭和45（1970）年頃までに多く見られる。明治期、大正期、昭和50（1950）年以降については、今回得られた写真からは抽出できなかった。【絵や写真（装飾）】昭和16（1941）年から昭和50（1975）年まで見られる。植物と同様、明治期、大正期、昭和50（1950）年以降については、今回得られた写真からは抽出できなかった。【形に切り抜いた作品（壁面）】昭和44（1969）年から平成27（2015）年にかけて継続的に取り入れられている。【立体作品（壁面）】平成4（1992）年ごろから壁の広い画面を構成して貼られるようになっている。【空間飾り（装飾）】大正12（1922）年から平成4（1992）年まで継続的に扱われている。【平面作品（その他）】大正13（1923）年から昭和26（1951）年まで見られ、A幼稚園でも平面作品が減った後に、形を切り抜いた作品が増えている。

④ 量的分析・分析結果1のまとめ

三園を比較した結果、分析枠組み11カテゴリー中、対象カテゴリー9カテゴリーのうち6カテゴリーで以下のような類似性が確認できた。類似性が確認できた6カテゴリーは、植物（装飾）、絵や写真（装飾）、黒板画等（壁面）、平面作品（その他）、形に切り抜いた作品（壁面）、立体作品（壁面）である。

類似性の内容は①「植物」は昭和初期から昭和50年代ごろまでが一番多く取り入れられていること。②「絵や写真」の設立当時から現在まで続いていること。③「黒板画等」は大正10（1921）年ころから始まっていること。④「平面作品」は大正13（1924）年ころから昭和（1975）50年ごろまで飾られることが多いこと。⑤「形に切り抜いた作品」は昭和25（1950）年ごろから始まり、平面作品の掲示に変わって昭和50（1975）年ごろから多用されていること。⑥「立体作品」は昭和30（1955）年ごろはじまり、平成になってから、壁に構成して貼ることが多くなっていること。以上である。そこで、3園のデータを合計して時代区分を見出すこととする。

④ 三園合計の分析結果

| | 高級園等 発表 | 高級園等 未発表 | 立派作品 発表 | 立派作品 未発表 | 他に切り 抜いた | 植物 | 絵や写真 | 空間飾り | 玩具 | 平面作品 | 地所物 |
|-----|------------|-------------|------------|-------------|-------------|------|------|------|-----|------|-----|
| M | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 2% | 96% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| M18 | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 70% | 29% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| M25 | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 100% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| T | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 36% | 64% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| T10 | 100% | 0% | 0% | 14% | 0% | 0% | 0% | 36% | 0% | 0% | 0% |
| T11 | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| T12 | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 100% | 0% | 0% | 0% |
| T13 | 11% | 0% | 0% | 5% | 0% | 0% | 42% | 21% | 0% | 21% | 0% |
| T14 | 17% | 0% | 0% | 17% | 0% | 0% | 59% | 17% | 0% | 0% | 0% |
| T15 | 17% | 0% | 0% | 20% | 0% | 0% | 23% | 23% | 0% | 7% | 0% |
| S | 2% | 0% | 0% | 2% | 0% | 0% | 45% | 20% | 0% | 7% | 0% |
| S2 | 29% | 0% | 0% | 14% | 0% | 7% | 43% | 7% | 0% | 0% | 0% |
| S4 | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 100% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| S5 | 40% | 0% | 0% | 0% | 0% | 20% | 40% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| S6 | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 14% | 57% | 29% | 0% | 0% | 0% |
| S8 | 43% | 0% | 0% | 0% | 0% | 14% | 29% | 0% | 0% | 0% | 14% |
| S9 | 10% | 0% | 0% | 10% | 0% | 30% | 20% | 15% | 0% | 10% | 0% |
| S10 | 22% | 0% | 0% | 11% | 0% | 22% | 44% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| S11 | 22% | 0% | 0% | 0% | 0% | 11% | 44% | 11% | 0% | 11% | 0% |
| S12 | 14% | 0% | 0% | 0% | 0% | 38% | 21% | 14% | 0% | 7% | 7% |
| S13 | 0% | 0% | 0% | 23% | 0% | 0% | 31% | 0% | 0% | 23% | 5% |
| S14 | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 12% | 19% | 13% | 0% | 12% | 8% |
| S15 | 19% | 0% | 0% | 0% | 0% | 20% | 20% | 0% | 29% | 10% | 5% |
| S16 | 13% | 0% | 0% | 0% | 0% | 20% | 27% | 13% | 7% | 13% | 7% |
| S17 | 29% | 0% | 0% | 0% | 0% | 43% | 29% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| S18 | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 100% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| S22 | 27% | 0% | 0% | 0% | 18% | 0% | 9% | 9% | 0% | 16% | 0% |
| S23 | 0% | 2% | 0% | 0% | 0% | 17% | 0% | 21% | 0% | 27% | 5% |
| S27 | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 42% | 0% | 100% | 0% |
| S28 | 0% | 0% | 0% | 0% | 17% | 17% | 0% | 0% | 0% | 17% | 8% |
| S29 | 0% | 0% | 30% | 0% | 20% | 0% | 20% | 10% | 20% | 0% | 17% |
| S30 | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 29% | 8% | 29% | 17% | 0% |
| S31 | 14% | 0% | 0% | 29% | 0% | 0% | 14% | 0% | 7% | 29% | 7% |
| S32 | 0% | 11% | 0% | 0% | 22% | 0% | 22% | 11% | 11% | 11% | 11% |
| S33 | 10% | 0% | 0% | 0% | 20% | 0% | 20% | 0% | 10% | 20% | 10% |
| S34 | 0% | 0% | 0% | 18% | 18% | 27% | 0% | 8% | 0% | 18% | 0% |
| S35 | 29% | 0% | 0% | 10% | 10% | 10% | 20% | 10% | 29% | 0% | 0% |
| S36 | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 19% | 27% | 9% | 9% | 0% |
| S37 | 13% | 0% | 0% | 0% | 0% | 13% | 13% | 0% | 17% | 33% | 13% |
| S40 | 29% | 0% | 0% | 7% | 7% | 2% | 0% | 0% | 33% | 0% | 7% |
| S41 | 33% | 13% | 0% | 17% | 0% | 17% | 0% | 17% | 0% | 0% | 0% |
| S42 | 13% | 0% | 13% | 13% | 0% | 13% | 0% | 0% | 0% | 13% | 33% |
| S43 | 0% | 17% | 0% | 17% | 0% | 17% | 50% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| S44 | 17% | 0% | 8% | 8% | 17% | 17% | 8% | 0% | 0% | 8% | 17% |
| S45 | 0% | 0% | 0% | 0% | 50% | 0% | 50% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| S46 | 2% | 0% | 2% | 2% | 21% | 21% | 2% | 33% | 0% | 2% | 17% |
| S47 | 10% | 0% | 10% | 10% | 10% | 33% | 33% | 10% | 0% | 0% | 10% |
| S48 | 0% | 0% | 33% | 0% | 33% | 0% | 33% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| S49 | 10% | 5% | 5% | 10% | 5% | 5% | 5% | 5% | 14% | 10% | 29% |
| S50 | 0% | 0% | 40% | 10% | 10% | 0% | 20% | 10% | 0% | 0% | 10% |
| S51 | 18% | 0% | 0% | 8% | 29% | 12% | 12% | 0% | 8% | 8% | 12% |
| S52 | 0% | 0% | 0% | 0% | 27% | 0% | 27% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| S53 | 19% | 0% | 0% | 13% | 13% | 19% | 7% | 14% | 0% | 7% | 0% |
| S54 | 0% | 0% | 13% | 4% | 17% | 0% | 17% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| S55 | 0% | 11% | 11% | 0% | 11% | 0% | 11% | 0% | 0% | 11% | 44% |
| S56 | 12% | 0% | 0% | 0% | 12% | 0% | 0% | 18% | 3% | 24% | 0% |
| S57 | 13% | 6% | 0% | 0% | 25% | 0% | 19% | 6% | 31% | 0% | 0% |
| S58 | 0% | 0% | 0% | 0% | 33% | 17% | 0% | 0% | 0% | 33% | 17% |
| S59 | 11% | 0% | 0% | 0% | 59% | 0% | 22% | 0% | 0% | 0% | 11% |
| S60 | 0% | 0% | 33% | 0% | 67% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| S61 | 0% | 0% | 33% | 0% | 50% | 17% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| S62 | 13% | 0% | 13% | 13% | 50% | 0% | 0% | 13% | 0% | 0% | 0% |
| S63 | 20% | 0% | 20% | 20% | 20% | 0% | 0% | 0% | 20% | 0% | 0% |
| H1 | 11% | 0% | 11% | 0% | 22% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| H2 | 0% | 0% | 0% | 0% | 97% | 0% | 17% | 0% | 17% | 0% | 0% |
| H3 | 67% | 0% | 0% | 0% | 33% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| H4 | 13% | 0% | 13% | 0% | 25% | 0% | 6% | 6% | 0% | 0% | 33% |
| H5 | 0% | 0% | 0% | 0% | 73% | 0% | 9% | 0% | 0% | 0% | 18% |
| H6 | 0% | 0% | 20% | 0% | 40% | 0% | 0% | 0% | 0% | 20% | 0% |
| H7 | 33% | 0% | 0% | 0% | 33% | 0% | 0% | 0% | 0% | 33% | 0% |
| H8 | 0% | 0% | 0% | 0% | 90% | 0% | 0% | 0% | 0% | 20% | 0% |
| H9 | 75% | 0% | 0% | 0% | 20% | 11% | 11% | 0% | 0% | 22% | 11% |
| H10 | 11% | 0% | 11% | 0% | 78% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| H11 | 18% | 0% | 18% | 0% | 36% | 0% | 0% | 0% | 0% | 9% | 18% |
| H12 | 0% | 0% | 33% | 0% | 67% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| H13 | 0% | 33% | 0% | 0% | 33% | 0% | 33% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| H14 | 40% | 0% | 20% | 0% | 40% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| H15 | 0% | 20% | 20% | 0% | 18% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| H16 | 0% | 20% | 20% | 0% | 100% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| H17 | 0% | 0% | 0% | 13% | 50% | 0% | 0% | 0% | 0% | 13% | 25% |
| H18 | 33% | 0% | 0% | 0% | 33% | 0% | 0% | 0% | 0% | 33% | 0% |
| H19 | 0% | 0% | 25% | 0% | 50% | 0% | 0% | 25% | 0% | 0% | 0% |
| H20 | 13% | 0% | 13% | 0% | 25% | 0% | 0% | 0% | 0% | 20% | 13% |
| H21 | 0% | 0% | 20% | 0% | 60% | 0% | 0% | 0% | 0% | 20% | 0% |
| H22 | 17% | 0% | 17% | 0% | 67% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| H23 | 8% | 0% | 0% | 8% | 31% | 0% | 0% | 0% | 0% | 8% | 48% |
| H24 | 25% | 0% | 25% | 0% | 50% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% |
| H25 | 27% | 0% | 0% | 0% | 27% | 0% | 9% | 0% | 0% | 0% | 38% |
| H26 | 0% | 0% | 6% | 6% | 38% | 0% | 0% | 6% | 0% | 13% | 25% |
| H27 | 0% | 0% | 0% | 0% | 100% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% | 0% |

図4 三園合計（年別分析結果）M：明治 T：大正 S：昭和 を示す

(2) 量的分析・分析結果 2

三園全体を合計して分析した結果、図4より、特徴ごとに「明治期～大正期」：明治9（1876）年～大正15（1926）年、「昭和初期から戦前」：昭和2（1927）年～昭和18（1943）年、「戦後から平成」：昭和25（1950）年～平成27（2015）年と3つの時代区分が出来ることが分かった。そこで時代区分ごとの量的分析を実施しその特徴を示し、室内環境に何が求められていたかを検討していく。

(3) 量的分析・分析結果 3

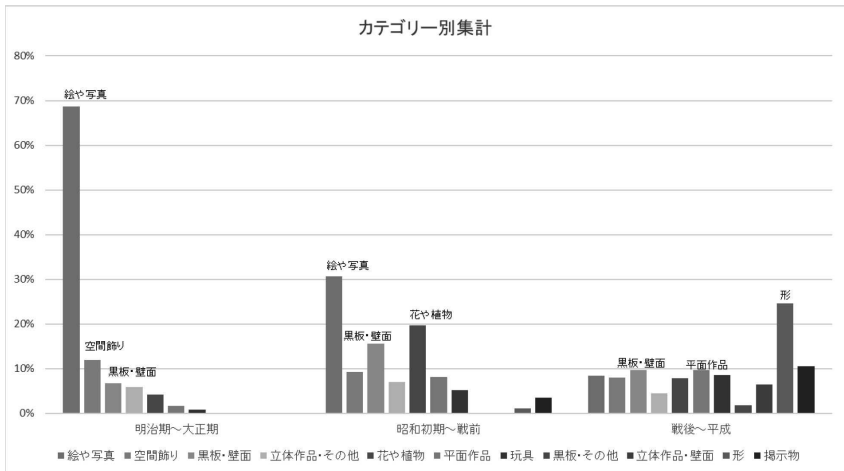


図5 時代区分と特徴



図6 時代区分ごとの装飾と壁面の割合

① 明治期から大正期：明治9（1876）年～大正15（1926）年の特徴

図5より、絵や写真（装飾）が69%と他と比べて多く見られた。次いで空間飾り（装飾）が12%、黒板画等（壁面）7%の順で多く取り入れられていた。

装飾と壁面の割合は図6より85%が装飾で、壁面は7%であり、室内環境として装飾への意識が高かったと言える。

② 昭和初期から戦前：昭和2（1927）年～昭和18（1943）年の特徴

図5より、絵や写真（装飾）は31%と明治期から大正期と同様一番多く取り入れている。次いで、花や植物（装飾）が20%であり、他の時代区分と比較しても室内環境に多く活用されていたことが分かる。また、黒板画等（壁面）が16%に増え、さらに、形に切り抜いた作品（壁面）が1%となり、初めて取り入れられるようになった。一方で空間飾り（装飾）が9%に減っている。しかし、図6より、装飾と壁面の割合は、装飾が65%、壁面が17%とまだ装飾が多く取り扱われている。

また、明治期から大正期と比較した場合、平面作品（その他）と立体作品（その他）の幼児の作品は明治期から大正期の7%から15%と増えてきており、この時期の特徴的なカテゴリーの一つといえる。

③ 戦後から平成：昭和25（1950）年～平成27（2015）年の特徴

戦後から平成の特徴は、図5より形に切り抜いた作品（壁面）が25%と室内環境の中心となっていることが分かる。昭和初期から戦前と比較してみると、それまで0%であったが立体作品（壁面）が6%ととなり、新しく取り入れられるようになったことが分かる。明治期から戦前までは立体作品（その他）は、壁ではない場所で扱われていた。しかし、戦後になって立体作品を壁の広い画面に貼って構成するようになったという変化が分かる。それに変わって戦前まで30%以上を保っていた絵や写真（装飾）が8%と激減し、続き、昭和期から戦前までが20%とピークであった植物（装飾）も8%と大きく減少している。黒板画等（壁画）は減少傾向にありつつ、新しい傾向としては、そでまで黒板画として黒板に絵を描くという使われ方をしていたが、戦後に入ってから、黒

板画に文字などを書いて使われるようになってきていることである。図6より、装飾と壁面の割合は、全体に対して、装飾が33%であり、壁面は41%である。戦後になって、装飾より壁面が多く取り入れられるようになり数値が逆転した。

④ 時代区分と特徴のまとめ

- I. 明治期から大正期は、室内環境に対して装飾に意識が傾いていた。主に、絵や写真（装飾）、空間飾り（装飾）で室内を飾っていた。壁面の 카테고리では、黒板画等が主流であった。例として図7に示す。
- II. 昭和初期から戦前は、明治期から大正期の流れである絵や写真（装飾）を継続しつつ、花や植物（装飾）と黒板画等（壁面）が目立つようになり、新たに、形に切り抜いた作品（壁面）が取り入れられるようになる。また、平面作品（その他）と立体作品（その他）が増え、幼児の作品を室内環境に取り入れる動きがあった。昭和初期から戦前は、明治期から大正期の室内環境を保ちつつ、新しい室内環境が取り入れられるようになっていった時期である。例として図8に示す。
- III. 戦後から現在は、形に切り抜いた作品（装飾）が急激に増えてきたことである。また、戦後になって壁の広い画面に構成して立体作品を貼るようになってきた。壁を使って作品を構成する件数が増え装飾より壁面が室内環境に多く見られるようになった。例として図9に示す。



大正10（1921）年



大正10（1921）年

図7 明治期から大正期の特徴的な室内環境の例（空間飾り・絵や写真・黒板画）



昭和8 (1933) 年



昭和12 (1937) 年

図8 昭和初期から戦前の特徴的な室内環境の例 (植物・黒板画・絵や写真)
※幼児の作品を掲示する動きもあった



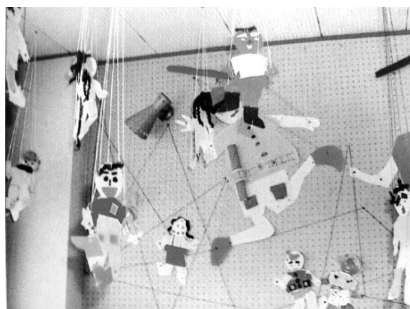
昭和29 (1954) 年



昭和29 (1954) 年



昭和53 (1978) 年



昭和53 (1978) 年

図9 戦後から現在の特徴的な室内装飾の例 (形に切り抜いた作品・壁面)
※立体作品も壁に貼るようになる

11. まとめ

室内環境に対する意識の変化について、分析結果から次のことが分かった。明治期から大正期は装飾に意識を強くもっており、絵や写真（装飾）、空間飾り（装飾）、黒板画（壁面）で室内を飾っていた。絵や写真、掛図を飾り、装飾に意識がいていたことは、鈴木（1997）の調査と相違ない。意識して装飾を取り入れた背景としては、東京女子師範学校附属幼稚園の初代監事（園長）であり、幼児教育の基礎作りに尽力した関信三が『幼稚園記』（明治9年）という実際の保育を行うにあたって必要なことの全般が書かれている保育書の中で「会場の装飾を要す」と室内の装飾は欠かすことが出来ないことと示していることも一つであろう。

昭和初期から戦前は、植物（装飾）と黒板画等（壁面）が目立つようになり、形で切り抜いた作品が取り入れ始めた時期である。植物は中村正直の『幼稚園論』（明治9年）から、備えるものとして示されていたが、明治32年の『幼稚園保育及設備規定』より示されなくなる。しかし『保育カリキュラム』（昭和27年4月号）という実践者向けの保育雑誌の「環境の構成」の中で「…（中略）各保育室毎に花を生けておくのも好ましいですね。…（略）」という記述もあり、実際、O 幼稚園でも、A 幼稚園でも植物は戦後も現在も取り入れられており、国の定めた設備から外れても、実践で取り入れた中で良いと保育者が感じているものは、保育雑誌でも取り上げられ、保育の実践の場で生き続けていることが分かる。また、平面作品（その他）と立体作品（その他）が増え、幼児の作品も保育室内の環境に取り入れていこうとしていた背景には、明治後期以降の恩物の画一的な指導に疑問が生じ脱却しようとした動きと、大正期の自由教育運動の影響による児童中心主義の流れにより、取り入れられるようになったと考えられる。

戦後から現在は、室内環境に対しての意識が変わり、植物や絵のような装飾が減少し、幼児や保育者の作品など壁面中心とした室内環境が確立していった。絵が減り幼児の作品が増加していった背景には、戦後の教育改革として、『教育基本法』（昭和22年）が制定され、同時に『学校教育法』が公布され、学校

教育の一つとして幼稚園が位置付けられた時に刊行された、『保育要領』（昭和23年）の保育項目に「絵画」、「製作」が位置づけられ、幼児にとって楽しい幼児の経験の一つとして、鑑賞「自分の描いた絵だけでなく、他の幼児の絵を見せて、絵について話し合う」といった内容が示されたことと、昭和27年『幼稚園設備基準について』より、必要な設備から「絵」が消えたことも影響しているといえるだろう。

12. 今後の課題と研究の限界

研究の限界として、明治期、大正期の写真の枚数が少なかったこと、昭和18（1943）年から昭和24（1949）年までの室内の写真が手に入らなかったことである。戦争で史料が焼けてしまっている、または、戦争中は休園で保育が行われていない等が要因であり、写真が残っている可能性は低い。しかし、昭和25（1949）年より室内環境の様子が大きく変わっており、変動期と考えられるだけに、全体像を読み解くうえでこの時期のデータを探ることが重要であると考えている。ただし、今回の量的分析の結果、幼稚園の室内環境における時代区分と、時代区分ごとの特徴とその要素やその根拠を見出すことができた。このことは幼稚園の室内環境の変遷を読み解く手がかりとなったと言えるだろう。次は、時代毎の特徴的なカテゴリーの詳細について解明し、より全体像を明確にしていきたいと考えている。

謝辞

本研究の資料提供にご協力いただきました園と園の先生方に深く感謝申し上げます。また本論文の執筆にあたり、ご指導くださった先生方に心よりお礼申し上げます。

付記

本研究は、修士論文の一部を加筆・修正したものである。

引用・参考文献

- 文部科学省（2008）幼稚園教育要領解説，フレーベル館，P23
- 保育とカリキュラム10月号（1980）「保育環境の工夫」，ひかりのくに，P14-21
- 塚本敏治（2018）幼稚園・保育所における壁面構成の現状と展望，名古屋経済大学，教育保育研究紀要第4号，2018年，P23-36
- 岡谷崇史（2021）保育施設における壁面構成の現状と今後の役割及び方向性，高松大学・高松短期大学，研究紀要75，P1-24
- 鈴木法子（1997）壁面構成とは何か1：明治期の幼稚園における壁面構成の萌芽，日本保育学会大会研究論文集（50），P474-475
- 鈴木法子（1998）壁面構成とは何か2：大正期の「室内装飾」，日本保育学会大会研究論文集（51），P114-115
- 田中まさ子（1998）幼児教育方法史研究，風間書房
- 小山みずえ（2012）近代日本幼稚園教育実践史の研究，学術出版会
- 塩川寿平（1990）保育環境論（18）—環境設定に見られる室内装飾に関する一考察—，日本保育学会大会研究論文集（43），P604-605
- 岡田正章（1977）明治保育文献集 第2巻「幼稚園記」，日本らいぶらり，P12
- 高橋さやか（1952）保育カリキュラム（1号）「環境の構成 家庭の連絡」，フレーベル館 P44
- 文部省（1979）幼稚園教育百年史，フレーベル館，P561
- 大阪教育大学教育学部附属幼稚園 アルバム 大正10年
- 大阪教育大学教育学部附属幼稚園 園のおもかげ 大正13年～昭和4年
- 大阪教育大学教育学部附属幼稚園 園の面影 昭和5年～昭和13年
- 大阪教育大学教育学部附属幼稚園 PHOTOALBUM 昭和14年
- 大阪教育大学教育学部附属幼稚園 園のおもかげ 昭和14年～昭和19年・22年
- 大阪教育大学教育学部附属幼稚園 アルバム 昭和25年～平成26年
- 創立100周年記念誌編集委員会（1993）ふよう 創立100周年記念誌，大阪教育大学教育学部附属幼稚園
- お茶の水女子大学附属幼稚園（2006）時の標 国立大学法人 お茶の水女子大学附属幼稚園創立130周年記念，フレーベル館
- 日本保育学会（1981）写真集・幼児保育百年の歩み，ぎょうせい
- お茶の水女子大学文学部附属幼稚園（1976）年表 幼稚園百年史，国土社
- 足利幼稚園 歴史トピック <http://www.asikaga-youtien.jp/rekishi.html>（情報取2015. 6. 18.）

東京立正短期大学紀要編集委員会規程

(設置)

第1条 東京立正短期大学（以下「本学」という）に、紀要編集委員会を設置する。

(目的)

第2条 紀要編集委員会は、教育研究に資するため研究紀要の編集および刊行を行う。

(任務)

第3条 紀要編集委員会の任務は、次の通りとする。

- (1) 研究紀要誌「東京立正短期大学紀要」の編集、刊行、配布
- (2) 編集方針の決定と編集内容の選定
- (3) 寄稿者の選定と依頼
- (4) 原稿の整理、保管
- (5) 合評会等の開催
- (6) その他必要な事項

(組織)

第4条 紀要編集委員会は、教授会の議を経て学長の委嘱する委員若干名をもって組織する。

2. 委員長は委員の互選とする。委員長に事故ある時は他の委員が代行する。
3. 委員は専任教員より選任、委嘱する。
4. 委員の任期は1年とする。但し、再任を妨げない。

(寄稿細目)

第5条 紀要編集委員会は、円滑な寄稿・掲載を図るため、別に寄稿細目を定めるものとする。

(事務処理)

第6条 紀要編集委員会の業務は、紀要編集委員会が行う。但し、研究紀要誌の保管、配布に関しては図書館運営委員会と提携して処理する。

附則 この規程は、平成13年4月1日より施行する。

この規程は、平成17年4月1日より一部訂正施行する。

「東京立正短期大学紀要」寄稿細目

1. 寄稿者は本学専任教員および非常勤教員とする。但し、紀要編集委員会が特に認めた者はこの限りではない。
2. 未発表の論文、研究ノート、翻訳、エッセイ並びに書評、資料紹介、記録などを掲載する。掲載の採否は紀要編集委員会が決定する。
3. 枚数は論文の場合、図版・図表等も含めて20,000字以内（和文）または10,000語以内（英文）とする。その他は和文12,000字以内、英文6,000語以内とする。枚数がこれらの上限を超すと予想される場合には、あらかじめ紀要編集委員会に相談するものとする。原稿はワープロを使用し、縦書き・横書きいずれも可とする。
4. 原稿は返却する。寄稿の際、印字した原稿を一部添付し、データファイルも併せて提出する。また、原稿には英文の表題ならびに氏名を付すものとする。
5. 寄稿者に初校、再校を依頼する。
6. 稿料は支払わない。但し、抜刷り5部を進呈する。なお特殊製版（図版、写真版など）の費用は寄稿者が負担する。
7. 原稿提出期限は毎年11月末日とし、発行は年1回、3月末日までとする。
8. 本文の一部や図表、画像等を他の著作物・ホームページから転載、またはオリジナルを掲載する場合、著作権・肖像権等に関わる手続きは、寄稿者があらかじめ処理するものとする。
9. 本紀要に掲載された著作物の著作権は寄稿者にあるが、寄稿者は本学に対し、掲載論文を電子化し、一般に公開すること（複製ならびに公衆送信）を許諾するものとする。
10. この細目の改廃は、教授会の意見を聴き、学長が行う。

付則 この細目は、平成17年4月1日より施行する。

この細目は、平成19年4月1日より一部訂正施行する。

この細目は、平成29年4月1日より一部訂正施行する。

この細目は、平成30年4月1日より一部訂正施行する。

令和5年6月1日改正、令和5年4月1日に遡及して施行。

編集後記

- ▶ この度、「東京立正短期大学紀要」第52号を無事に発行することができました。本号には6編の論文が掲載されています。お忙しい中、ご執筆いただきました先生方には心よりお礼を申し上げます。
- ▶ 今年度より本学紀要をペーパーレス化することになりました。今後フルオープンアクセスによるオンライン配信が中心となり、先生方の研究成果がより広く社会に届けられることを期待します。

ペーパーレス化に伴い、印刷会社も変更することとなりました。長年にわたり様々な依頼を快く引き受けてくださいました三協社出版の皆様には厚くお礼を申し上げますと共に、新たに組版・印刷作業を依頼することになりました(株)エデュプレスの皆様には、本号の制作にあたりタイトなスケジュールの中、柔軟に対応してくださいましたことに深く感謝申し上げます。

- ▶ 2023年5月に COVID-19が5類に引き下げられました。それに伴い、本学もほぼコロナ禍以前の学校生活に戻ってきたように感じます。日々の生活では、座席の距離を気にすることなく授業を受けられるようになり、黙食も解除されました。文化祭では飲食を伴う模擬店が行われ、卒業式では卒業生一人一人に卒業証書を手渡せるようになり、謝恩会も実施されました。この数年間で様々な活動が制限されていた分、学生にはより一層楽しい学生生活を送ってほしいと思います。
- ▶ 2023年度より新学長として清水海隆先生をお迎えしました。18歳人口の減少による学生数の減少、時代の影響も含めた学生の質の変化など、本学の抱える問題に対し、新たな視点から様々な改革に着手して下さっています。また、2024年度は短期大学基準協会による第三者評価が予定されています。本学の在り方を改めて振り返り、新学長を筆頭に全教職員が一丸となり、よりよい高等教育機関を目指して取り組んでいきたいと思っています。
- ▶ 最後になりますが、本学紀要は研究分野を限定せず、先生方のご専門に応じた多様な論文を掲載しております。今後も皆様からのご投稿をお待ちいたしております。

(『紀要』編集委員会)

執筆者紹介

東 浩一郎…………… 本学教授
有 泉 正 二…………… 本学教授
鈴木 健 史…………… 本学准教授
福田 篤 子…………… 本学講師
倉 持 ころ…………… 本学助教
尾 近 千 鶴…………… 本学非常勤講師

第52号 紀要編集委員

横 尾 瑞 恵 ・ 福 田 篤 子

東京立正短期大学紀要 第52号

令和6年3月20日 印刷

令和6年3月25日 発行

編集 東京立正短期大学紀要編集委員会
発行所 東京立正短期大学
〒166-0013 東京都杉並区堀ノ内2-41-15
TEL 03 (3313) 5101 (代)

印刷所 株式会社エデュプレス
〒110-0005 東京都台東区上野3-7-5
天野ビル4F
TEL 03 (5807) 8100

THE JOURNAL OF TOKYO RISSHO JUNIOR COLLEGE

No.52

March 2024

CONTENTS

- A study on the Marxian optimal growth model
-Based on the Onishi model-AZUMA, Koichiro 1
- Banksy as a Social Phenomenon 5 ARIIZUMI, Shoji 19
- Rachel Carson's "Sense of Wonder" Connecting to Children
-A Study of a Nursery School's Approach to
Co-Existence with Nature-OKON, Chizuru 43
- Examining the Effectiveness of Structured Group Encounter
in a Training School for Child Care Providers
-Attempts to use rubric evaluation- KURAMOCHI, Cocoro 71
- Consideration of Training in Nursery Schools aimed at Changing Values
-Research trend of Training in Nursery Schools- SUZUKI, Kenji 88
- The Change of the Interior Surrounding in the Kindergarten (1)
-On the Decoration of the room and Wall- FUKUDA, Atsuko 102

Published by
Tokyo Risho Junior College

TOKYO JAPAN

ISSN 1881-9400